
素直になれなくて 2

篠原悠哩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になれなくて 2

【Nコード】

N8767C

【作者名】

篠原悠哩

【あらすじ】

前作「素直になれなくて」の続編です。28歳になってやっと思いが通じた幼馴染の二人、真藤滯しんどうれいと春日流星かすがりゆうせいは幸せの真っ只中。そんな二人に危機が迫る。

1# (前書き)

お待たせいたしました。

まだ完成はしておりませんが前作より長い話になりそうなので、思い切って連載開始することにしました。

ここからお読みになっても大丈夫だとは思いますが、よろしければ、前作「素直になれなくて」をご覧くださいけると幸いです。

尚、今回は前作になかった会社名を香麗堂^{こうれいどう}、真藤濤^{しんどうれい}が担当しているメイクブランドをBeauty^{ビューティー}と設定しています。

いずれもフィクションであり、実在いたしません。もちろん、内容に書かれていることも事実ではございませんのでよろしくご承知ください。

では、最後まで努力してまいりますのでお付き合いくださりますようお願い申し上げます。

1#

「…れい…漣…。」

聞きなれた甘い声…。漣はやさしく髪の毛をなでつける暖かい手の感触に心地よく意識を戻してくる。ぼんやりと目を開けると流星の整った美しい顔が漣をのぞきこんでいた。端正で高い鼻梁にきりつとしたややクールな目元に優しく笑みを湛えている。

「…う…ん…。」

漣は眠そうに流星の胸に頬を寄せ安心しきった様子で無邪気にまた眠りにつこうと潜り込む。漣はこのぬくもりと香りがこの上なく好きだといわんばかりに満足そうに大きく息を吸い込んだ。流星はその様子に少々ため息をつきながらも優しく目を細める。

「漣…。時間だよ。そろそろ目を覚ませ。遅れるぞ。」

出来ればこのままにしておいてやりたい。流星は漣の幸せそうな顔を眺めながら、毎朝心を鬼にして漣を眠りの世界から引きずり戻す。これが最近の二人の日課だ。

お互いの両親にカミングアウトしてからというもの、二人はいつも一緒に、毎日漣は流星の部屋で寝泊りしている。漣の両親は流星と一緒に安心とばかりに既にあたりまえの日常として受け止めているようだった。

「れーい、起きろ！」

流星は仕方なく漣の頬を軽くばんばんと弾いた。

「う…ん。」

漣はもう一度ぼんやり目を開けてぼーっと潤んだ瞳で流星を眺める。やがて、視界がはつきりしてきたのか、流星にニッコリ笑いかけると大きく息を吸って吐き出しながら諦めたようにけだるそうに重い体を持ち上げた。

「おは…よう…。流星…。ふあゝっ。」

朝の挨拶を言い終わらないうちにあくびが出てきた。その様子をクスクス笑いながら見ていた流星が顔を近づけ頬に軽く唇で触れると愛しむように漣の唇にやさしく重ねた。漣も目を閉じてそれに応える。流星は唇を離すと、子供に言い聞かせるように漣の目をじっと見て言った。

「さあ、漣、支度しないと間に合わないぞ。」

「えっ？」

漣は慌てて時間を見る。

「あ、ほんとだ！まずい。」

見れば、時計はAM6…40を指している。急にバタバタ動き出した漣は足早に自分の部屋に帰っていった。

支度してダイニングに下りると、流星がもう朝食を食べている。漣もあわてて、朝食をかきこみ早々に家を出た。

漣は毎朝、流星と一緒に通勤する。昔から見慣れた光景だが、以前は朝から兄弟げんかのように互いに意地の張り合いで小学生の通学のようなだったが、二人が互いの想いを告げてからは、甘い視線を交わしながら仲睦まじい様子が誰の目にも見て取れた。漣の同僚で流星の後輩、飯田は毎朝、このラブラブぶりを見せ付けられるのだ。

「おはよう。」

漣はデスクに到着すると既に座ってコーヒーをすすっている飯田にさわやかな笑顔を向けた。

「おはようございます。真藤先輩。朝から仲いいですね。俺なんかあてられっぱなしですよ。」

飯田が笑いながらため息を漏らす。

「え？やあねえ。仲いいって一緒に通勤なんて前とかわらないですよ？」

照れくさそうに満面の笑顔でPCを立ち上げる。

「どこが前とかわらないんですか。二人で見つめあっちゃって、どう見たってラブラブモードでしたよ。こっちが照れるぐらい。」

飯田がすねたように口をとがらせる。

飯田はバレー部だったせいか180cmと背は高いがいかつい感じはなく、スラッとして手足がなく、新人からベテランまで女子社員からの人気は高い。流星が見た目に美麗でクールエレガントな貴公子タイプなら飯田は爽やかイケメンスポーツマンタイプである。ただ飯田の人気は見た目だけでなく、頭がいいのでよく気がつく

ところも男女問わず好印象のようだった。その丁寧で用意周到な仕事ぶりは周りでも評判がいい。漑はひらめきやカン鋭く、クリエイティブで斬新なアイデアがあふれるような仕事ぶりだが、飯田の絶妙な行き届いたフォローにずいぶん助けられている。その自覚があるせいか、仕事に対して飯田には特に信頼が厚い。

「飯田君、昨日の件どうだった？」

漑はPCがたちあがると、スケジュールを確認して飯田に早速仕事の確認にはいる。

「はい。レインボープロモーション側は明日14時ならOKのとことでした。」

「了解。」

漑は返事と同時にデスク上に置いた手帳を手にとると、きびきびとページをめくっていく。

「あゝ、ちょっときびしいかなあ。レジントンホテル側との打ち合わせが13..00からなのよね。手島企画の担当者も呼んでしまったから今さら変更できないわ。木村マネージャーは？」

「OKです。」

飯田はすかさず応える。木村マネージャーとは漑達の上長でブランド統括マネージャーである。漑達の会社香麗堂にはいくつかメイクブランドが存在し、それらを木村マネージャーが総括し、その下に各ブランド担当者がいる形となっている。漑と飯田はいくつかメイクブランドがある中で「Beau^{ビュー}」というブランドを担当している。

「じゃあ、飯田君一緒に行ってスケジュール調整してきてくれる？
全体のスケジュールはどんなあんばい？」

漣が飯田の方に顔を上げる。飯田は待ってましたとばかりに涼しげな笑顔でさらっと切り替えした。

「完璧ですよ。昨日遅くまでかかって必死に作りましたから。あとはスケジュールにあわせてアポイント取り捲るだけです。確認しておいてください。真藤先輩のファイルに貼り付けときましたから。」

「さすがね。用意周到だわ。そういうところは本当に助かるわ。」

漣が特級の笑顔を飯田に向けた。一瞬ドキツとする。こんな風に時折、漣が何気なく屈託のない笑顔を向ける瞬間がある。飯田はその度に、心の奥底に押さえ込んでいる想いに心を揺さぶられるのである。

「いえ、俺も今回の企画はいけるような気がするんです。絶対に1位とりましようね！先輩」

そう元気よく言うと、飯田は平静を装って、漣を後押しするようにニッコリ笑って返した。

「もちろんよ。がんばりましようね。頼りにしてるわよ。飯田貴俊くん。」

漣も同じ調子で勢いよく返す。

「はい。任せてください。真藤先輩のフォローはばっちりしますから。」

そう飯田が行った瞬間、澤の後ろから声がした。

「おはようございます。あの…、ちょっといいですか？R－10の予算の件ですけど…。」

R－10とは、情報開示前に便宜上つけられる名称である。多くの場合、もともと試作品のモデルにつけられた名称で、いくつかあった最終モデルの中の商品化につながった物をそのまま引用して呼んでいることが多い。もちろん関連の書類にはすべてR－10と記されている。機密情報の漏洩を防ぐための対策でもあるのだ。

「ああ、おはようございます。佐々原さん。予算の件ですか？」

澤はニツコリ機嫌の良い笑顔を浮かべて販売企画の佐々原に振り返った。

「はい。今度の役員会議にかけるのですが、企画の追加があった件で予算修正をしてまいりました。内容の確認をさせていただきたいのですが、少しお時間よろしいですか？」

佐々原はいかにも数字に強そうなインテリ風の風貌で、シャープできつそうなキツネ顔のため、社内ではスネ夫君というあだ名で通っていた。

「はい。あ、9時には出かけるのですが、よろしいですか？」

澤が佐々原にそう断わると、佐々原は臆することなく淡々とすぐに

切り返してきた。

「いえ、そんなに時間はかかりません。では、あちらの2号会議室でお話させていただいてもよろしいですか？」

漣はこのニコリともしない佐々原がやや苦手だったが、当初の予算を修正しないといけなくなった原因を作ったのは自分だったので、営業スマイルで応じた。

「はい。わかりました。」

漣はそう佐々原に返事をする、飯田に予算修正の打ち合わせしてくると告げて席を立った。飯田はその姿を見送ると、ほっとしたようにため息をついた。

2#

佐々原との打ち合わせを10分少々ですませると、漣は一旦、ブランド統括マネージャーの木村ところへ報告に行った後、倉元と打ち合わせに出かけてくると飯田に上機嫌で声をかけて足早に会社を出た。

漣は倉元との打ち合わせにはことのほか楽しそうに出かける。なぜなら、倉元はさすがに元モデルでおしゃれなスポットをよく知っていて、毎回、今最先端のスポットに連れ出してくれる。

今日もベイエリアの海が一望できるスタイリッシュで静かな大人の空間のカフェに漣を連れ立ってやってきた。店内は少しテンポのいいジャズが流れている。

壁は打ちっぱなしのコンクリートで、大きな四角い板を不規則に張り合わせたようになっていて、店内はモノトーンでまとめられていた。床は所々段があって高くなっているところや一段低くなっているところなど、さまざまで、客同士の視線が合わないように配慮されている。すべてハイテーブルにハイチェアでシャープなラインの造りになっていて、客同士の距離もたつぷりあるので、それぞれのテーブルで話される内容は互いに聞こえない。そして天井が吹き抜けで高くなっている上、店内はほとんどガラス張りのため、外の景色と同化しているかのように広々とゆったりとした感じを受ける。

「わあ、ステキです。景色もいいですね。こんな景色を見てると打ち合わせ忘れちゃいますね。」

漣は子供みたいに嬉しそうにはしゃいでいる。倉元はラテン系のような端正でメリハリのあるその形のよい顔立ちにクスクスと笑みを浮かべた。

「君は毎回、本当に嬉しそうに喜んでくれるので、連れてくる甲斐があるよ。今日みたいに遠くまで連れ出してしまつて他の仕事の邪魔にならないかい？」

「そんな、毎日忙しいのは事実ですけど、時にはこんな息抜きみたいなこと必要ですよ。本当いろいろなところに連れて行ってもらえるので実を言うと倉元さんとの打ち合わせはとっても楽しみにしてるんですよ。」

滯はちよっぴりいたずらっぽく笑う。

「いい表情をするようになったね。幸せなんだね。なんだか妬けるなあ。」

そう言つて倉元がやや苦笑いをしてため息をつく、滯が小声ですみませんと言つて、少し照れながら、嬉しそうに控えめに笑みを浮かべて肩をすくめた。

「今日の用件だけど、早速いい？」

倉元はふっとビジネスの顔になる。その表情を見て滯も気が引き締まる。

「はい。」

滯はやる気満々にはつらつと返事をする。

倉元との打ち合わせは毎回こんな風に、周りが見たら絶対にデートにしか見えないような雰囲気ではあるが、実際の内容は本当に仕事の話である。倉元との打ち合わせは内容はもちろんだが、段取り

も効率もいい。仕事となると倉元は本当に切れ者である。

「ちょっとビッグなお知らせなんだ。もちろんそちらが承諾してくれればの話だけど。」

倉元が思わせぶりにニヤリと笑う。

「なんですか？」

滯も目をキラキラさせて興味深げに尋ねた。

「毎年、春と秋にうちの社のV誌とK誌の専属人気モデルが一度に集まって4時間通しでやるショウをしってるだろ？」

「ええ、毎年ご招待してくださってますもの。もちろんです。あの2万人以上集まるビッグイベントですよ。」

「そう。今年もドームで開催されるんだ。それで、今年はモデルへのメイクアップをクノチアキに頼むことになったんだ。」

「へえ、クノチアキさんに？」

「ああ、そうなんだ。今一番旬だからね。先日打ち合わせに行った折に、チアキと君の話で盛り上がってね。」

「ええ？私の方？」

滯が驚いたような表情で倉元を覗き込む。倉元はそんな滯を見て目を細める。

「ああ、チアキとは古くからの知り合いなんだ。だから気心が知れててね、雑談に君の話がでてチアキも君をとっても気に入っていたらしく意気投合したんだ。」

「へえ、チアキ先生とお知り合いだったんですね。でも、言われてみればそうですね。倉元さんもついこの間までトップモデルでしたもんね。」

滯が羨望のまなざしで倉元を見つめる。その目に一瞬ドキツとしながらも、倉元は話を続けた。

「君のところでスポンサーをするのはどうだろうかという話になったんだ。そのかわり、すべてのモデルのメイクアップは香麗堂こうれいどうの製品を使う。それプラス、ショウの始まりと途中の休憩でスクリーンに香麗堂のCMを入れる。そして会場周辺では、さまざまなキャンペーンを展開できる。こんな企画はどう？」

「ええ？それ本気ですか？」

滯の顔にぱあっと花が開いたように赤みが差し、嬉しそうに目がキラキラしている。

「本気だよ。会社にも了解を取っているんだ。商品の企画やうちのコラボの企画内容を見て、是非にといってくれてるんだ。」

「はい！もちろんです、って言いたいところなんですけど…、私には決める権限がないので、会社に帰ったらすぐ話してスポンサー契約の件検討していただけるように説得してきます！なるべく早くお返事いたします。それでいいですか？」

漣が興奮して上ずった感じで慌ててしゃべると倉元はまたクスクス笑った。

「良かったよ。君が賛成してくれて。じゃあ返事を待ってるよ。企画のほとんどは数日中に作っておくからいい返事をもらえたらすぐにでも進められるようにしておくよ。」

倉元がほっとしたような表情で漣に笑いかける。

「はい。これがスポンサー契約の企画内容の詳細だ。正式にはそちらの担当者と接触できた時にうちの担当者から詳しく説明させてもらうよ。」

「はい。よろしく願いします。」

漣は机に頭がつきそうなくらい丁寧に深くお辞儀をした。その様子に倉元は目を細める。

「ところで、もうひとつ、レジントンでの話はどんなあんばい？」

テーブルと向かい合ってた漣が倉元の言葉にひょいっと頭を上げる。

「あ、はい、レジントンへは明日、ホテル側と手島企画の担当者と一緒に13…00から打ち合わせなんですよ。もっとも撮影のための機材持込の件とホテル側の対応だけですが。内容の段取りは今週関係者のアポイントを取りますので来週早々になります。ああ、倉元さんにも全員の顔合わせにいらっしていただけませんか？全体で打ち合わせしますので。全員のアポイントがそろい次第、連絡させていただきますから。」

倉元の目を見てしつかりと返答する。いつもの仕事の顔の滯である。滯はいろいろな表情を見せるが、仕事の顔は表情が引き締まって少しりりしさが光る。こんな表情がいいんだよなと倉元は心の中でふと思う。その瞬間少しやりきれない思いに胸が詰まる。まだ、心に引っかかっているのを嫌でも自覚させられる。そんな心の葛藤に苦笑するように倉元はまた滯に笑顔を向ける。

「了解。なるべく早く連絡をしてね。なんとしてでも調整してそちらへ伺うから。」

「はい。」

仕事の話が終わると人気モデルやアーティストの近況などを話して、打ち合わせを終えた。

3

滯が会社に戻ってくると、飯田が眉間にしわを寄せて目配せをして口パクでなにか滯に言わんとしていた。そして小さく奥の会議室の方を指さした。

「おつかれさま。えっ？どうしたの飯田君。」

滯の顔には？？が散っている。

「どうしたもこうしたありませんよ。流星先輩がヒッジョーに機嫌悪く仕事してますよ。」

「え？流星？なにかあったの？」

飯田はあくまでも天然ボケの滯に頭を抱えて大きくため息をついた。

「なに言ってるんですか、真藤先輩。先輩が倉元さんに会いに行くのに楽しそうに出かけるからですよ。」

「え？」

一瞬赤くなる。

「な、なに言ってるの？お仕事よ。れっきとした打ち合わせ。」

滯が飯田を言い含める。実際、飯田も滯が倉元との打ち合わせに出かけていくときは気が気じゃない。飯田がむくれるように愚痴っぽく言った。

「仕事にしては、先輩、倉元さんと出かけるときが一番嬉しそうですよ。そりゃあ、流星先輩の怒るのもわかる気がするな。俺だって…。」

飯田がはっとして言葉を飲み込むと、やや頬を赤らめて黙りこんだ。

「え？」

漣が目を大きく見開いて少し首をかしげて不思議そうな顔をしている。いつもと違う飯田の様子に漣はじっと観察するように覗き込んだ。飯田は漣にじっと見つめられるとますます心臓が高鳴る。それでも心の中で飯田は、おちつけ、ばれるなよと言いつつ、平静を装った。

「いえ、なんでもありません。」

飯田が低い声でぼそっという自分のデスクのPCの画面に顔を向けた。

「ああ、真藤先輩が戻ったら、2号の会議室に来るように伝えてくれって。どうやら1人でこもってるらしいですよ。プロジェクトの仕事、かなりきついみたいで…。」

少しいつもと違う飯田の横顔が気になりながらも漣は生返事をして荷物を置くとフロアの奥の2号会議室へと向かった。

漣は会議室のドアの前にたつと、ドアを見つめて軽くため息をついた。ノックをしたが、返事がない。漣がそっとドアを静かに開ける

と、その瞬間、流星の刺すような視線にさらされた。一瞬手に汗を握る。流星の端正で綺麗な顔に表情はなく、黙ってじっと漑を睨みつけてくる。それでも漑が覚悟を決めて会議室にすばやく入り込んでドアをしめて振り返ると、再びじっと流星と視線が絡み合う。流星は視線を絡めたまま手にもっていた資料を机に置いてゆっくりと立ち上がって近づいてくる。その瞳の奥には怒りと執拗なぐらいの嫉妬の炎が揺らめいている。漑はその瞳に息を呑んだ。

「漑…。」

流星は体が触れるぐらいい至近距離で立ち止まるとひんやりとした右手で漑の頬をなでた。漑は一瞬身震いをするが、そのままじっと流星の瞳に囚われるように見つめたまま立ち尽くしている。

「あの男に会ってきたのか？」

漑は流星の瞳に圧倒されて、一瞬心臓がきゅっと締め付けられるような思いにかられる。別にやましいことをしてきたわけではないのだが、流星にそんな目で見つめられると、倉元との打ち合わせに少しでも心躍らせていた自分に罪の意識を感じてしまうのである。

「…仕事で打ち合わせよ。」

漑は乱れる呼吸を整えて低い声でできるだけ平静を装って言った。

「それにしちゃあ、嬉しそうに出かけていくんだな。」

流星は相変わらず鋭く刺すような視線を漑に向けながら漑にもう一步近づくと、あいていた左手で壁に手をついた。流星が迫ってきたので、漑が一步後ろへあとずさりすると背中が壁に触れる。もう

あとがない。漣は流星と壁にはさまれて囚われた格好になった。流星は唇が触れるか触れないかぐらいに顔を近づけて身体を密着させてくる。息がかかるくらいの距離に漣の心臓は痛いほど激しく打ち付けてくる。そして力強くスパイシーなエゴイストの香に包まれると、途端に漣は体の芯から熱いものがこみ上げてきた。ベースノートのムスクの香が流星の匂いとあいまって強烈なフェロモンのように甘く漣に絡みつく。

「何いつてるの？ Beau^{ビュー}の企画が倉元さんのおかげでいい方向へすすんでるのよ。嬉しいに決まってるじゃない。」

漣は今にも流星に縋りつきたくなる想いをぐっところえつつ、流星の静かに痛く突き刺さるような視線を浴びながら、漣に対しての執拗なまでの熱い想いを受け止めていた。同時に狂ったように打ちつける心臓の音やこみ上げてくる熱が流星に悟られないようにと心の中で願った。

「仕事ね…。」

冷たく流星が言い放つ。

「そうよ。倉元さんとの間に何もないわよ。」

しばらく黙って二人が見つめあう。

「ふん…。まあ、いい。」

流星が冷たく口元だけで笑った。そして漣の唇に軽く唇で触れるともう一度漣の瞳をじっと真顔で見つめた。

「おまえは誰にもやらない…。」

流星の瞳は先ほどにも増して厳しく突き刺さる。漑はその言葉にかっとして体中の血液がすべて逆流して中心に集まってくるかのような感覚を覚えてぶるっと体を震わせた。すぐに肌もしんわりと熱を帯びてくる。漑は体の中に熱の塊の存在を感じながら、荒れ狂うように打ち付ける鼓動を抑えようとしてゴクリと唾を飲み込んだ。

「8時にロビーで待ってる。」

流星がそう言った時、ドアをノックする音が聞こえた。流星は、ぱっと漑から離れて返事をした。

「失礼します。」

女性の声が響いて、ドアが開いた。今どきOL風を絵に描いたようなファッションに身を包んだスタッフの江川だった。江川は流星1人が部屋に居ると思っていたため、ドアを開けるなり、漑の姿を見て一瞬驚いた風にリアクションをしたが、そそくさと流星に近づいて資料を差し出した。

「先ほどおっしゃってた数字揃えましたので…。」

「ありがとう。」

流星は無表情で江川から書類を受け取ると、江川は少し頬を赤らめるとにこりと笑いかける。そして江川がちらっと漑に視線を向ける。漑はいたたまれなくなっってそそくさと江川の横をすり抜けてドアへと近づいた。

「あ、真藤さん。」

流星がいかにも仕事の用事とばかりに漣を姓で呼んだ。漣はまた腫れ物にさわられたようにビクンとして振り向いた。流星が綺麗な顔で涼しげに微笑んだ。

「では、先ほどの件よろしくお願いします。では、後ほど。」

漣は一瞬、戸惑ったが、ぎこちなく笑い返してお辞儀をして出て行った。

2号会議室を後にした漣はまだ覚めやらぬ熱をもてあまして、すぐにデスクに戻らずに休憩室へと足を向けた。幸い、休憩室には誰も居ない。漣はほっとしたようにドリンクのコーナーにいったアイスコーヒーのボタンを押した。なみなみとコーヒーがカップに褐色の液体が注がれる様子を見ている間にさっきの流星の言葉を思い出だして、静まりつつあった鼓動がまた再びぶりかえしてくる。コーヒーが一杯になった音に反応してはっと我に返る。

何考えてるの、漣、今は仕事だよ。そう言い聞かせると漣はカップを手に取り、一気に喉へ流し込んだ。ひんやりとしてほろ苦いのがちようどいい。

流星は独占欲が人一倍強くて、あんな風に時々呼びつけては漣の気を翻弄させる。そして欲望をそるだけそってはぽんと放りだすのだ。まるで罰だといわんばかりに……。漣はその度に体の熱や乱れた呼吸をこうして収めるために苦勞する。それでも、結局収まらきらず、帰るまで体の中で熱のくすぶりを抱えて仕事することになるのだ。

体は正直である。漣は流星の傍にいと無条件に体が反応して理性が保てなくなる。あの暖かな肌のぬくもりと漣をそる流星の放

つフェロモンの匂いに思わず身を任せたくなるのだ。漑は周りには以前と同様に理性を保っているように見せているのだが、実際は流星におぼれているんじゃないかと自分でも自覚できるぐらいに最近の漑の心は流星で占められていた。唯一、仕事の時だけは仕事に夢中になれるのだが…。そんな漑の思いを知ってか知らないでか、流星はやきもちを妬いてはこんなことで漑を煩わせる。

「私はあなたしか見てないのに…。」

そうつぶやくと、漑は窓の外のビルの群れに目をやりながら大きくため息をついた。

4

漣は休憩室で一息ついた後、デスクに戻ると今日の倉元との打ち合わせの内容について飯田に話をした。

「倉元さん、男としては気に入らないけど、仕事に関してはさすがですね。先輩、すごい内容になってきましたね。」

漣は飯田の反応にやや顔をしかめつつ、満足そうに頷くとデスクの電話に手を伸ばし、広報部の担当者に内線で電話をした。

「瀬戸さんですか？真藤です。お疲れ様です。今よろしいですか？」

そして漣は倉元の話をかいつまんで瀬戸に話した。

「それで、今、手元に資料があるのですが、見ていただけないかと……。」

瀬戸は漣の話に狂喜してすぐに伺いますと喰らいついてきた。以前から話す度におもちゃみたい面白い人だと漣はクスッと笑った。

「はい、ありがとうございます。」

そう言って、漣はPCの社内ネットで会議室の空きをなれた手つきで検索する。2号に春日の予約の文字に一瞬どきつとするが、すぐに他へ目を移すと5号が空いていたので、すばやく真藤と入力した。

「では、5号の会議室で。」

了解と威勢よく瀬戸は返事をして電話を切った。そしてその電話ですぐに木村の内線ナンバーを押した。

「木村マネージャーですか、真藤です。ちょっとビッグなお知らせがあるので、今から少しお時間をいただきたいのですが。…ええ、おそらく20〜30分程度です。あ、広報の瀬戸さんにも来ていただく予定です。…はい。…はい、そうです。よろしくお願いします。」

そういつて電話を切ると、今度は飯田に向き直った。

「飯田君、あなたもいいかしら？」

「あ、はい。」

PCのキーボードに指を滑らせてながら、電話の様子に耳を傾けていただろう飯田は、何事もなかったように顔を上げて返事をした。そしてすぐさま、自分のデスクの電話で食堂に電話してお茶を人数分手配した。

こういうところが飯田の気の利いたところである。そして、濡はさりげなく飯田にいつも気が利くわねと笑いかけてねぎらうのを忘れない。飯田はこんな瞬間、濡と組んでよかったと常々思うのである。ちよつとした細かい気配りに気付いてくれてこうして必ずねぎらってくれる。仕事のパートナーとしても最高だが、こんな人が上長だったらいくらでもお役に立てるように働くのにと飯田は別の意味で濡に対して厚い信頼を持っていた。

5号会議室にいくと、既に瀬戸が満面の笑顔で待っていた。

「お待たせしてすみません、瀬戸さん。あと木村マネージャーもま

もなく参りますので。」

そういつて少し申し訳なさそうに軽く頭を下げた。

「いやあ、いいんですよ。真藤さんからお電話いただけただけで、僕嬉しいですから。」

そういつて照れながらニコニコ笑って答えた。その様子に飯田は滯の後ろからひょいっと顔を出して瀬戸を睨みつける。瀬戸は、飯田の姿を見て、がっかりした表情をおもむろに表わした。

「瀬戸、そんなにおもむろに嫌な顔しなくてもいいじゃないか。」

そういつて飯田が笑って牽制する。瀬戸は飯田の同期のベビーフェイスで飯田よりやや小柄なかわいいギャルソンみたいな青年である。

「ちえっ、せっかく真藤さんと二人きりになれるチャンスだったのに。なんでいつもおまえがくつついてるんだよ。」

「悪かったな、お邪魔で。でもな、俺は真藤先輩のパートナーなんだ。当たり前だろ。」

飯田は自慢げに瀬戸に話をする。

「なんで組んでるのがおまえなんだよ。みんな真藤さんと仕事するの狙ってるんだぜ。」

瀬戸は子供のようにつてくされて頬を膨らませる。滯は思わず、おかしくて笑ってしまう。

「瀬戸さんって本当に面白いですね。」

瀬戸はその一言に反応して急に乗り出すようにして漣に迫ってくるので漣が一瞬驚いてひいた。飯田がすかさず瀬戸の前にはだかった。

「おまえねえ、近づきすぎなの。まだおまえ早死にしたくないだろ？」

「へ？」

瀬戸が飯田の意味不明の言葉にぼかんとしている。反対に飯田の話にいち早く反応したのは漣だった。仕事にモード切替をして忘れていたはずなのにまた、思い出してしまった。そのせいか、急に流星の顔がちらついてきて、さっきおさめたはずの熱がぶり返してくる感覚に捉われた。漣は困ったような顔をして頬を赤らめている。飯田はその様子に気付いて漣に声をかけた。

「先輩？どうかしたんですか？顔が赤いですよ。」

「えっ？いえ、なんでもないのよ。さ、とにかく座りましょ。」

そういつて火照る頬をごまかすように微笑むと瀬戸と飯田に椅子を勧めた。まもなく、お茶が届けられ、木村も現れて4人でV誌とK誌の専属カリスマモデルが集うショーのスポンサーの件で話をした。木村も飯田も話に賛同し、瀬戸はといえば、興奮状態でやはり子供のような満面の笑顔で上に通して必ずいい返事もらってきますからと約束して打ち合わせを終えた。

その日の晩、午後8時少し前にビル1階のロビーのソファに座って漑は流星を待っていた。ほとんど待たずして流星がエレベーターから降りて漑に近づいてくる。

「食事に行こう。おばさんには電話しといたから。」

しれっと流星は漑に言うスマートな男のエスコートといった風ですっと背中に軽く触れて出口へと促す。一瞬流星が触れるだけでびくんと体が反応して肌が火照ってくる。漑は一瞬頬を赤らめた。

「なに、おまえ赤くなってるんだ？」

にやにや笑いながら意地悪く視線を遣る。

「流星のいじわる！」

そう言ってむっとして早足で歩きだす。流星は後ろからついて行きながら、漑が思い通りの反応するのに満足げな様子でクスクス笑っている。毎回こんな調子で仲直りするのだ。

外へ出ると、流星はスタスタ歩いていく漑に追いついて、横から笑顔で漑の顔を覗きこんだ。漑は真っ赤になってふくれっつらをしている。

「漑、何食べたい？」

「誰が食事に一緒に行くって決めたのよ！」

「ふーん、じゃ、違う誰かといってもいいわけ？」

「えっ？」

流星がいうと洒落にならない。今までいろんな女の人との遍歴がある。流星は半端じゃないぐらいモテる見目麗しい完璧な男なのである。その上、いつも冷静でスマートでエレガントとくれば、普段あまり仕事以外で他人に笑顔を向けることは少ない流星がその気になって見つめてニッコリ微笑むとほとんどの女はイチコロなのである。漣と想いが通じてからは全くなかったが、流星におぼれるほど好きだと自覚している漣にとっては気が気じゃない。

「ちょっと、それ、本気？」

漣が焦ったような顔で流星を見上げる。

「さあ、どうかな。女王様に断わられたらしかたないだろう？」

「誰が断わるって言ったのよ。」

クスクス流星が笑っている。

「じゃ、何が食べたい？」

漣が真っ赤な顔してぷいっと正面を向く。

「怒ってる顔もステキだけど、機嫌直せよ。漣。」

そうやって流星が漣の腰に手をまわして抱き寄せると、漣の頬に自分の頬でキスするように触れた。そんな流星のじらすような行動に漣はさらに心臓が高鳴って今度は体の芯からほてりだして湧き出し

てくる熱をもてあます。

「滯、体が熱いね。熱でもあるの？」

流星がまたにやにや笑ってからかう。

「流星の意地悪！ そんなにいじめなくたっていいじゃない！」

流星はクスクス笑ってもう一度抱き寄せると頬にキスをした。

「いや、あんまりかわいい反応するから、つい面白くなっちゃって…。機嫌直せよ。滯が大好きなMEDOCのワインおごってやるから。」

「えっ？ほんと？いいの？じゃ、早くいきましょ！」

それまで頬を膨らませていたのにMEDOCのワインに釣られて急に機嫌を直す滯にまた流星はクスクス笑った。滯を見る流星の瞳にはあふれんばかりの愛情がにじみでている。流星がこんな表情を見せるのも滯の前だけだ。流星のそんな優しい幸せそうな表情を見るたびに、滯は流星が自分だけのものだと思えて嬉しさがこみ上げてくるのだ。機嫌を直した滯はまた目を輝かせて流星に話しかけては笑った。こんな風に二人はじゃれあうように楽しげに会話しながら、滯のお気に入りのイタリアンの店の中へと消えた。

しかし、その後ろでじっとその様子を見つめる影に甘く幸せを奏でている二人はまったく気づく様子もなかった。

4#(後書き)

このあと物語が展開します。

5

翌日、飯田と早めのランチを取りながら打ち合わせした後、漣はレジントンホテルに出かけた。レジントンのロビーにつくと手島企画の棚橋が既に待ち構えていた。ソファにゆったりと座っていた棚橋が、漣の姿を見かけるとすぐに立ち上がって近づいてきた。

「やあ、漣ちゃん、今日は一段と綺麗だね。」

棚橋がにこやかに漣に話しかけてさりげなく、ソファまでエスコートする。漣が棚橋に勧められたソファに腰掛けると棚橋はにこやかに漣に親しみのある笑顔を振りまきながら、そのすぐ隣のソファに腰掛けた。

「まあ、棚橋さん、口がうまいんだから。」

漣がクスクス笑う。棚橋は漣より2つ上の30歳で、いかにも優しいデスを絵に描いたような男である。鼻筋が通っていて顎もとがり目なのだが、やや細めでソフトな目元や口角がいつも上がった感じのややふっくらした唇の方が印象深く、上品な優しいおにいさんといった風貌だ。しかし、中身はそれに反しておにいさんというより、やんちゃで頼れる兄貴といった風で手島企画でもやり手のマネージャーである。漣とは仕事で2年の付き合いで随分気心が知れている。

「いや、前よりもなんだか艶やかさがにじみ出てるよ。男でもできたのかい？」

「えっ？」

棚橋のつつこみに漑が真っ赤になって目を逸らす。

「えっ？マジかい？」

冗談のつもりで挨拶程度にからかった棚橋の方が漑の反応に驚いたような顔を見せた。

「えっ…いえ…あの…。」

漑が棚橋のつつこみにしどろもどろになっている。

「マジかよ…。しまったなあ…。もう少し早くアプローチしとくべきだったよ。ちえっ、おいしいことしたな…。」

棚橋は真面目に悔しがる風なそぶりであつぷつ言っている。

「まさか貴俊か？」

棚橋は誰とでも気さくで友達のようにざくばらんに付き合えることから、飯田とは仕事を通して知り合ったのだが、会社も近くにあるため、ちよくちよく飲みで飯田を引っ張りまわしているようで、結構ウマが合うのか仲がいい。

「えっ？まさか。」

漑が驚いた顔をして思いっきり首を振ったのを見て、棚橋が笑って噴出した。

「なんだ、やけにはっきり否定するな。貴俊もかわいそうに…。随分漑ちゃんに入れ込んでたのにな。」

思い出すように棚橋が笑った。

「えっ？」

「なんだ、漣ちゃん気づかなかったのか？あいつは漣ちゃんにマジに惚れてたんだよ。」

「ええっ？飯田君が？そんなはず不是吗。だって、飯田君は…。」

漣は思わず流星の名前をうっかり口を滑らしそうになり、はっとして口をつぐんだ。その様子からカンのいい棚橋が状況を察したらしく、漣の傍に身体を乗り出して耳元に小声で囁いた。

「はあん、わかったぞ。流星とかいう貴俊の先輩だな。漣ちゃん幼馴染なんだろう？」

棚橋がにやにやして漣を肘でつついた。

「まあ、おさまるところにおさまったってことか。」

そういつて棚橋が風貌には似合わないような豪快な笑いを見せると、漣はますます恥ずかしくて顔から火が出そうになった。漣が今から仕事の打ち合わせなのにと、必死で流星のことを心の奥に押しやろうと笑う棚橋の横で1人心の中で葛藤していると、黒いスーツの紳士が近づいてきた。

「あの…、香麗堂の真藤様と手島企画の棚橋様でしょうか？」

その瞬間に滯と棚橋はそれまでの気さくな雰囲気顔からビジネスモードの顔つきかわる。二人はソファから立ち上がった。

「はい。そうですが…。」

30代半ばの上品な身のこなしの紳士はいかにもホテルマンといった雰囲気営業用のスマイルを携えて二人の前で美しいお辞儀をして見せた。

「私、レジントンの企画マネージャーをしております。檜村と申します。」

そう名のると滯と棚橋に名刺を差し出す。滯も棚橋も両手で丁寧に名刺を受け取ると、二人もおなじく各自の名刺を出して挨拶をした。

「このたびは私どもレジントンホテルをご指名いただきまして、誠にありがとうございます。」

そういつてもう一度深く丁寧なお辞儀を見せた。滯も棚橋もかしこまってお辞儀を返す。

「では、こちらにお部屋を取ってございますので、ご案内させていただきます。」

檜村は無駄のないスマートな動きで二人を誘導してホテル側が打ちあわせように用意した会議室へと向かった。

その頃、飯田はといえば、レインボープロモーションでの打ち合

わせのために木村と同行していた。午後2時からの打ち合わせのためにタクシーで移動する中、隣にいる飯田に話しかけた。

「今回のBeauの新製品企画はどんどんすごいことになっていくな。今度こそナンバー1が取れそうな気がするよ。」

40に差し掛かるのに見た目30代前半にしか見えない木村が目を細めた。

「そうですね。真藤先輩はすごいですよ。どっからあんなアイデアが出てくるのか不思議ですよ。それに、外に出ればビッグな企画を手土産に帰ってくるし…。毎回驚かされてますよ。」

飯田が自分のことのように嬉しそうに滯を賞賛する。

「本当だよな。私もこうしてマネージャーやってるけど、兼任ではとんどピンチヒッターぐらいしかできないから申し訳なくて…。」

「大丈夫ですよ。Beauは私達に任せておいてください。私が真藤先輩を完璧にフォローしますから、マネージャーは後ろでどーんと構えていてください。マネージャーが真藤先輩の裁量で自由にBeauの仕事が出来るようにしてくれてるからこそいい方向にいつてるんですよ。いつも真藤先輩が言ってますよ。マネージャーは必要なときはちゃんとわかってくれて動いてくれるから仕事がやりやすいつて。」

飯田は人をその気にさせるのが非常にうまい。かゆいところにてが届くだけじゃなくて、人の心をくすぐるような絶妙なつかみを特技としていた。

「そうか？ならいいけど。でもなあ、あんまり役に立ってないよう
で俺はこれでも気にしてるんだぞ。」

木村は微笑みを絶やさずとも申し訳なさそうな表情を見せると、飯
田がすかさずやり返した。

「そうですか？十分役に立ってますって。今からだってレインボー
プロモーションでの商談は木村マネージャーにかかってるんですか
ら。」

「おいおい、そういわれるとプレッシャーかかるじゃないか。」

そういつて謙遜しながらも木村は嬉しそうに飯田に笑顔を向けてく
る。

「とかなんとか言って、いつもニッコリ笑って結構なことおっしや
ってますよ。いつも感心して見てますから。頼りにしてますよ。マ
ネージャー。」

実際、木村はブランド統括マネージャーになる前に支店で営業系
のマネージャーをしていたので、それまでの現場の営業経験もあつ
て交渉が実にうまい。さらにマネジメントのスキルも高いことも手
伝って、木村が担当するとメンバーがやる気を起こしていい成果を
次々にたたき出すのだ。それで現場の地域採用だったのにも関わら
ず、本社スタッフとして大抜擢されたのである。

現在、木村はメイクブランドのブランド統括マネージャーで、自
分も直接担当しているものも含め5つのブランドを抱えている。そ
の中でもBeauはトップブランドとなっている。Beauはそれ
までトップブランドとして君臨してきたブランドが低迷してきたこ
とを受けて3年前新ブランドとして誕生したばかりのまだ若いブラ

ンドである。特に濤が担当してからは、市場でメキメキ支持が向上してきて現在近差で業界3位のメイクブランドとして君臨している。

「あ、その角で停めてください。」

飯田がタクシーの運転手に声をかける。運転手は頷くとウインカーを左に出して車を歩道に寄せて停めた。木村が先のに降りて、飯田が車内で精算をすませて後からついて降りた。

「さあ、いくか。ななえちゃんにはしっかり活躍してもらわないとな。」

そう言ってさっきまで笑って飯田に愚痴っていた頼りなさ気な上長の顔から、びしっと引き締まった営業の顔変わった。飯田は木村のこんなところにいつも感心する。飯田も自分自身気持ちを引き締めて、レインボープロモーションの入居しているいかにも高級そうな高層ビルを見上げて心の中でつぶやいた。

『真藤先輩。がんばりますから。いい話期待してくださいね。』

6

午後3時に飯田が木村を伴って会社に帰ってきた。滯はもうすでにデスクにいて無心にPCの画面に視線を釘付けにして、白く長い指を滑らかに滑らせている。

「ただいま。先輩。こちらはばっちりですよ。」

その声にはっと我に帰って横に立った飯田を見上げた。

「ああ、お疲れ様。その様子だといい返事が聞けそうね。」

後ろでにこやかに笑う木村の姿にも気付いて、立ち上がった。

「マネージャー、お疲れ様です。申し訳ございません。わざわざマネージャーに足運ばせてしまって。」

滯は笑顔で申し訳なさそうに軽く頭を下げた。

「いや、いいんだよ。これぐらいしか僕はお役に立てないからね。君たちの役に立てて嬉しいぐらいだよ。レインボーさんからはいい返事をいただけたよ。早速で申し訳ないが、この後ひとつ打ち合わせがはいっているから、そちらのレジントンの話とこちらのレインボーの話とを報告し合おう。いいかい？」

「はい。もちろんです。」

滯は上機嫌で返事をするすぐに社内ネットで会議室の検索をする。2号に春日の名前を見て一瞬どきつとする。いい加減慣れろ、滯は

自分に言い聞かせつつ空きを探す、どうやら流星がこもっている
会議室の隣の3号しかあいてないようだった。

「ありました。3号で。」

漣はすばやく真藤と入力してそのウィンドウを閉じた。

「じゃあ、ちょっと一服したいから15分後に。3号で。」

木村は煙草を吸う仕草をして漣に茶目っ気のある顔でウィンクすると笑ってデスクに帰っていった。漣はその後姿をクスクスと笑って見送った。

「お茶たのんでおきますね。喉かわいちゃいましたよ。アイスコーヒーでいいですか？」

飯田がさわやかな笑顔で漣に声をかける。飯田に向き直った瞬間、さっきの棚橋の話がよみがえってきた。

『あいつは漣ちゃんにマジに惚れてたんだよ。』

漣は急に意識してしまっで一瞬返答が遅れてぎこちなくなってしまう。

「えっ？あ、…そっ…そうね、冷たいもののほうがいいわね。よろしく。」

「先輩？どうかしたんですか？」

何も知らない飯田は不思議そうな顔で漣の顔を覗きこむ。

「えっ？べつに。なんでもないわ。いつも気が利いてるなってる。」「

滯が作り笑いで飯田に返した。

「そりゃあ、大好きな先輩のためですもん。たとえ火の中、水の中、俺はなんでもしますよ。」「

すかさず飯田がいつものようにやり返してくる。いつもなら、軽い口をたたいて笑いとばすのだが、柵橋の話を聞いてからはどうにも気になってしまった。

「えっ？」

滯が言葉につまる。その様子に飯田が不信に思ってやや怪訝な顔をする。

「先輩なにマジにとってるんですか？今日、ほんとおかしいですよ。流星先輩と何かあったんですか？」

「えっ？な、何言ってるのよ。飯田君。なんにもないわよ。私、先に3号行ってるわね。」「

飯田の思いがけないつつこみに滯は動揺して、あわててその場から逃げるようにして去った。飯田は様子に変な滯の後姿をしばらく首をかしげて見ていた。

滯が3号の会議室のドアをノックして開けようすると、隣の2号会議室から出てきたセクレタリーセクションの美女、上条江怜奈に出くわした。上条はかなりの美人だけでなくスタイルもよく大人の女の色香が漂う華やかな雰囲気を持つ、社内でもファンクラブがあるほどで、流星がちよっと前に付き合っていた女だった。上条は滯に気付くと品定めするような視線でじっとなめるように眺めると、その高慢で綺麗な顔に勝ち誇ったような薄ら笑いをうかべて何も言わずに滯の横を通りすぎた。その時、ふと嫌な感覚に襲われて一瞬鳥肌がたつ。滯はなんだか気になったので3号に入らず2号のドアをノックした。中から流星の声が聞こえた。

開いたドアから現れたのが滯だとわかると流星が酷く驚いた表情を見せた。滯は一瞬で何かあったと悟った。上条の香水の残り香がかすかに滯の鼻をつく。

「滯…。どうした？何か用か？」

いつもと違って余裕のなさそうなそぶりに滯は不信感を募らせる。

「今の…。上条さんでしょ？なぜここにいたの？」

流星がおもむろにPCに視線をやると淡々と答えた。

「べつに。秘書課が用事があったらしく、確認に来ただけだ。」

「そう？秘書課が企画の担当者になんの用事かしら？」

滯が疑うように嫌味っぽくつぶやいた。

「滯、忙しいんだ。後にしてくれないか。」

流星が不機嫌そうにPCに視線をやったまま滯に冷たく言い放つ。

「…：。わかった。じゃ、帰りに待ってる。」

キーボードの上を滑っていた流星の指が一瞬停まった。それでも顔を上げずに滯にやり返した。

「ああ、今日はだめなんだ。先に帰っててくれないか。打ち合わせが長くなりそうなんだ。」

「え？ あ…：そう…：。わかった。そうする。」

滯は低い声で不信感をあらわにして返事をする。2号の部屋を出て行く。流星は滯の消えたドアを険しい顔で食い入るように見つめていた。

滯は3号の会議室に入ると、座らずに奥の窓際に立った。ここは17階である。下を覗くと高架線上を走り抜ける車が下に見える。大量の車がせわしなく流れる様子をぼんやり眺めながらも、滯は先ほどの流星の態度が思い起こされて心の中には不安が募っていった。ふとドアをノックする音が聞こえた。滯が返事をする。飯田が顔を出した。麗がほっとしたような顔を見せると飯田はすぐに何かあったと察知した。

「先輩、どうかしたんですか？ 顔色が良くないですよ。」

「えっ？ そう？ …：そんなことないわよ。」

飯田が近づいてきて心配そうに滯の顔を覗きこむ。あまりに近くに來たので滯が驚いて一歩ひいた。飯田はかまわずに滯の額に手を当

てる。

「熱はなさそう…ていうか、冷たいですよ。貧血？大丈夫ですか？」

急に飯田の大きくて暖かい手が額に当てられて漣は一瞬ドキッとした。以前からそんなことは日常茶飯事で弟がお姉ちゃんに接してくるぐらいの感覚でしか受け止めていなかった。しかし、棚橋の話を聞いてからはどうにも意識してしまう。漣は飯田の手をさりげなくはずすとぎこちなく微笑んだ。

「大丈夫よ。きっとこの所忙しかったから疲れたのね。」

「先輩、俺体力有り余ってますからもったとき使ってくださいよ。先輩が倒れたんじゃ、仕事に支障をきたしますから。」

飯田が漣を励ますように左手で右腕の力こぶをたたいて明るく笑って言った。漣はそんな飯田の様子に思わず噴出して笑った。

「そうそう、先輩は笑ってた方がいいですよ。何かあったら何でも俺が相談乗りますからなんなりといってくださいね。」

飯田は鋭い。何かあったと感づいているのだ。漣はそう思うと飯田の優しさがありがたいやら申し訳ないやらで、複雑な気持ちになった。ふと、また、ノックがあつて木村が現れた。3人は時間を惜しみながら早速打ち合わせに入った。両方の報告をすませると木村がまとめた。

「さすがだな、飯田君。発売までの全体のスケジュールいい出来だ。こういうことをやらせたら君はぴか一だよ。おまけに順調に計画通り、内容も含めて関係者が呑んでくれたしね、もう後はこなすだけ

だね。」

木村はほめ上手だ。メンバーの個性をうまく伸ばす。だから木村の担当するセクションは活性化する。

「はい。真藤先輩の企画がいいからですよ。みんなノリ気になってこちらの要望を気持ちよく聞き入れてくれますから。」

すかさず飯田が滯をフォローする。木村も笑って頷いた。

「まあ、二人のチームワークがいいということだな。じゃあ、来週は関係者が一同に集まるから、今回の企画内容をそれぞれの役割別に細かくスケジュールと内容を落とし込んで企画説明会で話ができるよう準備に入ってくれるかな。大変なことは言ってくれ。僕も手伝うから。」

「はい。」

二人は威勢よく返事をする、木村は満足そうに頷いて次の打ち合わせに出かけた。木村を見送ったあと、滯は飯田とタイムスケジュール作りを役割分担して、内容の像合わせも同時に行った。そして互いのデスクに戻ると早速タイムスケジュール作りを開始した。

その晩、漣は流星を待ったが、何度か携帯に連絡を入れてみたものの返事はなかった。不安で眠れない夜を過ごした漣は、朝、流星の様子を見に行ってみたが、昨晩は帰らなかったようだった。漣は昨日の上条の顔が思い出されて、さらに不安で胸が一杯になった。母親に朝食はいらないといって早くに家をでて会社で顔を出した。

まだ7時前の会社にはほとんど誰もいない。社内ネットで調べると、今日も流星は2号にこもる予定らしい。香麗堂のブランドひとつ丸ごと連結子会社として独立させようとするためのプロジェクトチームで今は架橋に入っているらしく、かなり仕事がハードのようだった。

漣は2号の会議室をノックしてみた。返答がない。そつとドアを開けて会議室にはいるとPCの前に伏せて眠っている流星を見つけた。その途端、漣はほっとして取り越し苦労だった自分を笑った。ゆっくり近づくとう端正な流星の横顔が目に入ってくる。漣は優しく流星の柔らかい髪をすくようになるとかがんで頬に唇を近づけた。その瞬間、いつものエゴイストの香りではなく甘ったるい官能的なローズの香りがふわっと鼻をかすめた。昨日すれ違ったときに感じた上条の香水の匂いだった。漣はその場に固まった。あまりにショックで気が動転して会議室から逃げるように出て行った。

午前7時を少し過ぎたころ、飯田が出勤してきた。

「先輩、めっちゃくちや早いんですね。どうしたんですか？」

いつものように元気よく笑顔で声をかけたが、漣は無反応だった。返事をするようなそんな余裕がなかったのだ。PCの画面は確かに

タイムスケジュールの作成中の画面だが、キーボード上の指はとま
ったまま画面を凝視している。

「先輩？」

飯田は漣の様子が変わることに気付いてとっさに漣の腕に手をかけた。

「先輩！ちよつときてください。」

飯田が厳しい顔をして漣を引っ張って立たせる。

「い、飯田君？…ちよつと…！」

飯田が漣を無視して強引に引っ張って一番近くの5号会議室に入っ
た。そして漣を椅子に座らせるとその横に座って漣の顔を覗きこん
だ。

「先輩、何があったんですか？」

「…。」

「流星先輩と何かあったんですか？昨日からおかしいですよ。」

漣は黙っている。飯田は少しイラつくように漣の肩に両手をかけて
自分の方に向かせた。

「俺に言えないようなことですか？」

いつもはさわやかな笑顔を携えていかにも好青年といった様子の
飯田が、辛らつな顔して真面目に怒っている。それでも漣は言える

わけがなかった。棚橋から飯田が自分に特別な感情を持っていると聞かされたからには流星とのことでも気軽に話すわけにはいかない。

「先輩。俺は先輩に笑ってて欲しいんですよ。何かあったなら言うて下さいよ。」

漣があまりにも辛そうな顔してそれでも黙っているの、飯田はとうとう耐えられず、漣を抱き寄せた。

「ちょっと…！飯田…くん？」

漣が驚いて飯田から離れようとしたが、飯田の強い力でねじ伏せられた。女のか弱い力では到底かなわないと思い、漣は諦めて飯田の胸に顔をうずめた。飯田の胸は温かく、ほんのりさわやかに香るシトラスが気分をリラックスさせるようで、気付くと漣は涙が溢れ出していた。

「先輩？」

飯田が漣の顔を覗き込む。

「泣いてるの？」

暖かい手で優しく頬をなでて漣の涙を拭い取る。

「何があったんですか？話してみして下さい。」

漣は優しく耳元で囁く飯田の顔を見上げた。そこにはいつもの後輩じゃなく、優しく見守る男の顔があった。飯田はニッコリと笑って頷く。漣はその笑顔にどうしようもなく縋りたくなって呼吸を深く

吸い込んで呼吸を整えた。

「流星が昨日帰ってこなかったの。朝、2号で眠っていたから、徹夜で仕事してたんだと思って近づいたら、バラの香水の匂いがして…。昨日、3号で打ち合わせの前に、2号から出てくる上条さんとすれ違ったの。挑戦的で勝ち誇ったような顔をされたわ。その上条さんの香水の香りだったの。だから…。」

「そんなはず…。流星先輩は先輩しか見てませんよ。そんなはずないですよ。確かに少し前にちょっとだけ付き合っていましたけど…。流星先輩が先輩を裏切ることなんてありえませんかって。」

飯田は不安気な表情を見せる滯を前に流星を庇った。

「でも…。だったらなぜ流星にバラの香りの残り香があるの？おかしいわ。」

滯の目からまた涙があふれる。飯田は、滯を安心させるようにもう一度抱き寄せると子供をあやすように背中をやさしくぽんぽんと軽くたたいた。

「大丈夫ですよ。何か理由があるんですよ。流星先輩はそんな人じゃないですよ。俺が後で聞いてきますから先輩は心配しないで仕事に打ち込んでください。」

滯はとっさにまた、棚橋の言葉を思い出した。

「えっ？でも…。そんな…。飯田君にそこまでさせられないわ。私、自分で…。」

飯田はまた漣の顔を覗きこんでニツコリと笑って漣の唇に指を当てて話をさえぎった。飯田の表情はどこまでも優しい。

「いいんですよ。先輩のためなら俺は何でもしますよっていつも言ってるでしょ？頼れる後輩なんだから。」

「でも…。飯田君？なぜ私にそこまでしてくれるの？これは仕事じゃないんだし…。」

漣がおそろおそろ飯田に尋ねると、飯田が少し驚いたような表情をしたが、すぐにニツコリ笑った。

「いつも言ってるでしょ。先輩が好きなんですってば。」

「えっ…?」

飯田があまりにもストレートに言ったので漣はあっけに取られた。

「俺は、この2年ずっと先輩のこと好きでしたよ。でも、先輩は流星先輩が好きなことははじめから知ってましたし、流星先輩も先輩のことが好きなのは昔から傍で見ていて知ってましたから。俺は流星先輩のことも好きだから二人に幸せになってもらいたいです。そりゃあ、本当にくつついちゃったときはちよつとさびしかったですけど。でも、先輩が幸せそうに笑ってるから二人をこれからも応援しようと思ったんですよ。先輩を泣かせるなんて流星先輩をとちめてやりますよ。いい加減なことをするんなら俺がもうらうぞつてね。」

そういって飯田は漣に微笑んだ。

「とにかく、俺が話を聞いてきますから、先輩は仕事に打ち込んで待っててください。ほら、もう泣かないで。」

そういつて飯田は再び滯の涙を優しく拭い取ってやった。

「先輩、美人が台無しですよ。今日はクノチアキさんのところへ行くんでしょ？ そんな顔してたらカリスマメイクアップアーティストの前で恥ずかしいですよ。」

飯田は優しく微笑むともう一度滯を抱きしめた。

「もう、大丈夫ですから…。元気でましたね？」

滯は不思議と飯田の声を聞いていると安心できて、少し元気が湧いてくるような気がしてコクリと頷いた。

「さ、仕事しましょ。俺、コーヒー買ってきます。会社のじゃなくて、今日はスタバのツールをおごりますよ。それで元気回復してくださいね。」

そう言いつて滯を支えて一緒に立ち上がった。飯田は滯を前に促して一緒にデスクまで行くと、滯を座らせて自分はスタバへと出かけて行った。

幾分落ち着きを取り戻した滯はちらっと2号の会議室に視線をやったが、頭を振るとすぐに仕事にのめりこんで行った。

少しすると漣は10時の約束のために会社を出て行った。それまで、飯田が漣に元氣を出させるために氣分が沈みこまないようにと氣を遣って明るい雰囲氣で楽しく會話を盛り上げてくれた。それもあって、出かける頃には、幾分、氣分も回復してしていた。飯田の氣持ちを考えると心苦しいが、本当に飯田の優しさには助けられる。

『漣、しっかりしろ、この仕事は1人のものじゃないんだから。』

漣はそう言い聞かせて自分を律すると、元氣よくクノチアキのスタジオ兼事務所を訪れた。

「ああ、漣ちゃん、こんにちは！待ってたのよ。」

事務所にはいるとスタジオの奥でスタッフと打ち合わせしていたチアキがわざわざ出てきて満面の笑顔で出迎えてくれた。チアキは倉元と同じ年らしいが、とても30代には見えない。一見するとシャープできりっとした顔立ちのクールなアーチストに見える。ところがその容貌とは裏腹に豪快で竹を割ったような性格というか、底抜けに明るくさばさばした氣質の女性なのである。今の漣にとってはその明るさが氣分的にも助けられる。

「いつ見ても綺麗ね。漣ちゃん。ねえ、今度メイクさせてよ。」

「ええっ？ いいんですか？」

漣が嬉しそうに驚きの声を上げるとチアキは満足そうな表情を向けて近づいてくる。

「あたりまえよ！こんないいモデルがいるのにほかっておくほうがどうかしてるわよ！あ、でも、漣ちゃん、ちょっとこっちに来て。あなた夕べ寝てないでしょ？化粧ノリ、いただけないわね。ちょっと直させて。」

そう言ってチアキは漣を引っ張って行ってスタジオの方の大きな鏡の前に座らせた。そしてどこからチアキの商売道具が山となって積まれているワゴンを引いて傍にもどってきた。

「ちょっと、仕事忙しすぎじゃない？昨日倉元が来てね、漣ちゃんに仕事増やしたって言ってたからもしかしてそのせいなんじゃない？」

そう言いながらもすぐに漣にケープをかけてヘアバンドで髪を上げると慣れた手つきでクレンジングしていく。

「いえ、そんなことはないですよ。倉元さんには本当感謝してますから。すごいお仕事を回してくださってうちのスタッフもやる気満々なんですよ。あ、チアキ先生、また、ショウではお世話になります。」

クレンジングが終わってチアキが手を離れた隙に漣がぺこっと頭を下げる。その様子を鏡越しにちらっと見て漣に笑いかける。

「いいのよ。この話はこっちから振ったことだし。私もいい仕事できそうだしね。Beauの新作の間見せてもらったでしょ？俄然やる気になったわよ。ステキだったわ。香麗堂は品質や発色は本当にぴかーにいいんだけど、デザインがね、イマイチだったのよ。それが今回はいいわ。あれ、漣ちゃんのアイデアなんでしょ？シンシ

ア社に持ち込んだの。」

漑は照れながら頷いた。

「そうよね、だって、今までとぜんぜん違うもの。しかも限定でしょ？ 予約でどの位伸びるか楽しみよね。私も雑誌でがんがんに宣伝しておくわ。試作品ね、使いやすいし、発色もいいわ。なんせ、パールの技術はすごいわね。仕上がりには本当に満足できたわ。だから、ショウで使いたいと思ったのよ。森川ちゃんなんかはこんなのすごく好きだと思うわ。今から楽しみね。」

チアキは楽しげに語りながら漑の肌にスキンケアをたっぷり塗りこんで睡眠不足で乾燥しがちな肌をよみがえらせて行く。さすが百戦錬磨のプロである。

「わあゝ。肌にハリ感が戻ってる！ さすがですね！ チアキ先生。」

「ははは。こんなの朝飯前よ。人気がある子は忙しいから不規則でこんなもんじゃないのよ。それを撮影用に仕上げなきゃいけないんだもの。これくらいなんてことないわよ。さて、あとこのクマをナントカしないとね。美人が台無しよ。」

漑がクスッと笑った。

「えゝ？ どうしたの？」

チアキが楽しそうに鏡越しに漑に視線をやる。

「いえ、ここに来る前にうちのスタッフに同じこと言われたなと思って。」

「ああ、もしかしてこの間に一緒にいたイケメン飯田君のこと？」

「えっ？ええ。良くわかりますね。」

「そりゃあ…。」

チアキはクスクス笑う。

「なんですか？」

滯はチアキがあまりにも笑うのでぼかんとして無邪気に尋ねた。

「ああ、彼は滯ちゃんにぞっこんだったものね。」

「ええーっ！なんでそんなこと！」

滯がぽつと顔を赤らめる。

「あら、滯ちゃん気付いてたの？」

鏡越しのチアキと目があって一瞬ドキッとする。

「えっ？いえ、その…。棚橋さんに…。」

「ああ、棚橋？あいつ本当におしゃべりなんだから。」

手島企画は映像制作会社のため、チアキとも一緒に仕事をするので当然面識があるのだが、それだけではなかった。驚いてしまうのだが、元のご主人らしいのだ。はじめに聞いたときには驚いた。しか

し、二人はなぜか友達のように仲がいい。夫婦は向かないから友達になりましょうと協議離婚をしたらしいのだ。その後二人とも独身が続けている。

「でも、チアキ先生はどうして？」

「えっ？ 見てればわかるわよ。いつもあなたのことを見ていて、守るように傍にいろんだもの。あれでわからない人はよっぽど鈍感だわよ。あなた倉元も振ったでしょ？ 倉元もはじめに飯田君のことを気にしていたもの。」

と言うことは気付かなかったのは漣本人だけということになる。どうやら鈍感な漣のことらしかった。その事実には愕然として漣は深いため息をついた。

「はあ。」

チアキが漣の様子を見てクスクス笑う。

「漣ちゃん、ほんといいキャラしてるわよね。その年にしてその天然さ。ステキよ。だから倉元が惚れちゃうのよ。私も男だったら絶対漣ちゃんに惚れるわ。」

「ええっ？ 先生ってば…。」

漣が顔を赤らめて恥ずかしがっている様子を鏡越しでちらっと見ると、チアキは豪快に笑いながらベースメイクを丁寧に塗りこんでいった。

「お手入れするとほら、こんなに肌綺麗よ。漣ちゃん。」

そう言ってベースメイクまで完了した姿の漣の隣に立って鏡越しに笑いかける。

「わあゝ。自分の肌じゃないみたい。すごいですね。やっぱり先生はすごいです!」

そういつて漣がボケ振りを発揮すると、またチアキが豪快に笑った。

「:ちょっと漣ちゃん、ほんとあなたっていいわね。いつも相手にしてる子たちはね、たいがい自分を自慢するわよ。やっぱりあなたはモデルには向いてないわね。」

「えっ?それってほめてます?」

「そりゃもちろん、さすがあの倉元を惚れさせた子ねって意味よ。」

漣は倉元の話を出されるとまだちくつと心が痛む。

「なに?気にしなくてもいいのよ。倉元だって割り切って仕事してるし、そんなことで塞ぎこむような奴じゃないわ。まあ、もちろん、まだ未練たっぷりみたいだけどね。まあ、いいんじゃない、それでまた一段と男に磨きがかかるから。かっこいい男になるでしょ。奴は。」

チアキはそう言い放つと手早くメイクを施していった。

「わあ、ステキ。漣さん、綺麗ですよ。」

漣とチアキの周りにスタッフが集まってくる。

「ほんとステキ！先生、写真取りましようよ。」

中でも小柄の20代半ばぐらいのスタッフがチアキに声をかけた。

「そうね、こんな機会めったにないもの。ねえ、澪ちゃん、このスタジオに飾るだけなら許してくれるかしら？」

「え？私の写真を？」

「そう。澪ちゃんの写真。ほんと綺麗なもの。」

チアキにあんまりいい表情でニッコリ笑ってほめられたので、澪は思わず頷いてしまった。

「OK？そう、じゃ、早速。」

そういうとチアキは澪をスタジオの中央にある撮影用のステージに立たせた。撮影用のスポットライトとレフ板をスタッフが手際よく調整していく。

「さっちゃん、OKだから撮影始めて。」

さっちゃんと言われる専属の女性カメラマンがカメラをセットすると、ファインダーを覗きながら周りのスタッフが細かい支持を飛ばす。

「澪ちゃん、もう少し右に頭を傾けてそう。あ、行きすぎ。はい、ちょっと戻して。はい、カメラの方を見てニッコリ笑って。うーん、もう少し力抜いて。リラックスしてね。」

漣はカメラを意識すると妙に緊張してぎこちなくなる。そんな漣にチアキがすかさず声をかける。

「ああ、今度倉元と一緒に3人で打ち合わせしない？ ショウの段取りもうじき仕上がるって倉元がいつてたわ。」

「えっ？ あ、はい。お願いします。時間は合いますので。」

そうチアキに返答すると漣は嬉しそうに笑った。その瞬間カシャ、カシャと連続してシャッターを押す音がする。

「漣ちゃんいい笑顔だったわよ。」

さっちゃんと言われたカメラマンがファインダから顔を上げてニツコリと笑った。チアキはまた豪快に笑う。

「ほんと漣ちゃん、いいわ。仕事の話のほうが緊張しないんだもんね。」

「えっ？ じゃあ、今の…。」

心配そうに千秋の顔を見たので、チアキはニツコリ笑って返した。

「うそじゃないわよ。真面目なお・は・な・し。来週早々がいいんだけど、漣ちゃんどう？」

「来週ですか。はい。あ、でも、月曜日は今回の新製品の企画の説明会をしますのでチアキ先生にもご足労いただこうかと思ってまして。」

「ああ、前に言ってたやつね。空けてあるわよ。あれ、3時まででしょ？その後は？倉元も来るんでしょ？」

「はい。もちろんです。」

「じゃ、終わったら3人でうちあわせしましょ。その後、倉元においしいもの食べさせてもらいましょうよ。奴はグルメだからいいところ連れてってくれるわよ。」

チアキが含み笑いをして漣に視線を向けた。

「はい！お願いします。」

漣は満面の笑顔で応えたとその様子にチアキは満足げに頷いた。撮影の後、漣はランチがてらチアキとレジントンでの件の打ち合わせをすませて会社へと戻って行った。

9

飯田は滯をクノチアキの元へ笑顔で送り出してから、すかさず、2号会議室へと向かった。ドアの前で一瞬立ち止まって何か考えるような顔をしたが、思い直したようにドアをノックした。中から流星の声が聞こえる。飯田はそれを確認して中に入ると、厳しい顔つきで流星を睨んだ。

「どうした、貴俊。なんか用事か？」

幾分疲れた表情の流星が気になったが、厳しい顔を崩さなかった。

「どうした、怖い顔して。」

「先輩、昨日どこへ行ってたんですか？」

「えっ？どこって？ああ、滯か。ここに居たに決まってるじゃないか。仕事が猛烈に忙しいからな。ほぼ徹夜だよ。ふああ。」

そういつて欠伸をした。

「本当ですか？」

飯田は硬い表情をこわさず、問い詰めるようにたずねた。

「なんだよ。どうしたんだよ。貴俊。おまえ変だぞ。」

「応えてください。本当なんですか？」

「当たり前だろ？」

流星は面倒くさそうに返事をする。

「そうですか。」

飯田は低い声でそういうと表情を変えずに流星に近づいて来て流星の胸倉を掴んで立たせた。

「なんだよ。貴俊！」

「先輩、バラの香りがぶんぶんしますよ。先輩の香はエゴイストじゃなかったでしたっけ？この香水、上条さんのものらしいですね。別れたんじゃないかったですか？」

飯田が流星の胸倉を掴みながら睨みつけて言った。

「だったらどうだっていうんだ。」

流星は飯田から目を逸らしてむっとして言葉を吐き捨てた。飯田がピクツとこめかみを動かして更に険しい顔つきになる。

「先輩、見損ないましたよ。あなたは真藤先輩一筋なんじゃなかったんですか！」

「なんだよ。なんでおまえが怒るんだよ。」

流星が掴まれた胸倉を強引に飯田の手からはずしてネクタイを整える。

「真藤先輩を泣かしたからです。」

「えっ？」

流星の手が一瞬止まった。

「真藤先輩は心配してほとんど眠れなかった様子で、朝、ここに来たんですよ。そして、眠ってるあなたに近づいたら、上条さんの香水の匂いがしたって、朝、先輩は泣いてましたよ。」

流星は急に険しい顔になってじっと床を見つめている。

「だから仕事にさしつかえるからっておまえがでてきたのか。」

「確かに先輩に何かあると仕事に支障をきたします。でも、違います。俺が来たのはそんな理由じゃありません。」

流星は今にも噛み付きそうな態度をぎりぎり押さえているといった様子の飯田に開き直ってからかうような態度で出てきた。

「おまえ、滯のことを好きなのか？まるで俺の大事な女に何するんだといわんばかりの態度だぞ？」

「そうです。俺はずっと先輩のことが好きだったんです。」

流星は思わぬ返事にまさかと言う表情で飯田の顔を見上げた。

「でも、先輩は流星先輩、あなたのことが好きなことはわかってましたから…。流星先輩も先輩のことだけを見ていたと思ってきたから…。だから諦めようと思ったのに…。なぜ…？あれほど、先輩に

ぞっこんだったじゃないですか！先輩以外に興味がないって…。あれ？嘘だったんですか？なぜ、泣かすようなことをするんですか？流星先輩らしくないですよ。」

飯田が今にも泣きそうな顔をして真剣に流星に訴えかける。流星はしばらく黙り込んでじっと飯田の目を見つめた。流星の黒い瞳の奥にせつなく悲しげな今にも消え入りそうな光の揺らめきが見えたような気がして、飯田ははっと息を呑んだ。

「先輩…。」

流星の悲しみに染まった瞳を見せられて、飯田は今までの勢いを失い言葉を失ってしまった。

「わかったよ、貴俊…。話はそれだけか？俺は忙しいんだ。時間がない。用事がないならもう出て行ってくれないか。」

そう言って流星は背を向けた。飯田は、さすがに拒絶して背を向けた流星の背中には声をかけられず、しばらく躊躇していたが、深いため息をつくと諦めたように出て行った。1人になった流星はテールブルを拳で思いっきりたたいてガタンとそのまま床に崩れ落ちた。力なくうなだれた流星の肩は小刻みに揺れている。手が震えるほど力をこめてもう一度思いきり床に拳を打ち付けた。どうしようもない思いを吐き捨てるかのように…。。

「わあ、先輩！綺麗ですよ！チアキ先生ですか？」

滯が会社に戻るなりいち早く滯の繁華に気付いて飯田が賛美する。
滯は照れくさそうに笑顔を見せた。

「チアキ先生にあなたと同じことを言われたわ。」

「えっ？美人が台無し…ですか？」

飯田がクスクス笑う。言い当てられて滯がまた顔を赤らめる。

「そりゃあ、チアキ先生、先輩を酷く気に入ってましたからね。モデルにさせろって試作品見に来た時もうるさかったじゃないですか。」

滯は途端にチアキにも飯田のことを言われたのを思い出してさらに真っ赤になった。

「先輩？どうかしたんですか？」

「えっ？いえ、向こうで写真撮られちゃったのよ。スタジオに飾らせてくれて。」

「へえ！そりゃすごい。是非、チアキ先生のスタジオ行く時は同行させてください。先輩の写真見たいですから。」

飯田が物欲しそう両手を組んでお願いポーズをする。

「ええっ？いいわよ、見なくても。恥ずかしいし…。」

「なんでですか？綺麗なものは綺麗なんですから、先輩そう照れなくても…。まあ、諦めてください。」

そう言って飯田はいつものように漣に明るく笑顔を向ける。

「あの…。」

ふと漣が真顔になって飯田に声をかけようとした。

「さあ、タイムスケジュール作ってしましましょう。俺、3社分作りましたから。あと少しなんで、先輩の分も手伝いますからね。」

飯田は気付かないフリをしてずっと立ち上がった。

「おっとその前にコーヒー調達してきます。先輩も飲みますよね。」

飯田にニツコリ笑ってたずねられたので、漣はその勢いにつられて頷いた。しかしその返事を待たずして飯田は席を立て歩き出していた。漣はタイミングを失ってしまったので、ため息をついてしぶしぶPCのPOWERボタンを押した。

午後8時。

「先輩、おなか空きませんか？まだかかりますから、ご飯食べに行きませんか？」

飯田にそう言われてちらっと時計を見る。漣は流星のことが気になってできるだけ仕事にうちこんでいたのだが、自分の仕事を手伝ってくれている飯田のことを考えてそうね、と頷いた。二人はいったん仕事を中断して、外へ食事に出かけた。

「何食べます？」

「簡単なものがいいわね。そんなに食欲ないし。」

飯田は少し顔をしかめたがすぐに漣に笑顔を向けた。

「じゃあ、麺にしましょう！その伊勢屋になんてどうですか。」

漣はうどん屋なら食べれそうなものもあるかもしれないと飯田の意見に賛成した。伊勢屋の店内は既に静かで夕食の波が通り過ぎたところといった感じだった。漣はざる一枚を、飯田はざる二枚と天ぷらを頼んだ。飯田の豪快な食べっぷりに漣がクスクス笑った。

「なんですか？」

飯田が照れくさそうに漣に話しかけた。

「いいえ、そう言えばスポーツマンだったんだよってね、いつもあなたと食事に行くと思い出すのよ。」

「えっ？大食いだからですか？」

「そうね、今日はかわいいものだけど、いつもはもっとすごいものね。これにどんぶりがひとつつくもの。」

「そうですね、今日のはおやつみたいなものですから。」

さらっと飯田が言っただけだったので漣は驚いた。

「えっ？まさか帰ってからまた食べるの？」

「そりゃそうですよ。こんなじゃおなか一杯にならない。」

そういうながら飯田は無心にうどんをほおばっている。

「えっ？もしかして遠慮してるの？飯田君。いいのよ、しっかり食べてよ。」

漣が焦って言うのと飯田が手を止めてクスクス笑った。

「違いますよ。満腹になると眠くなるじゃないですか。仕事にならないんですよ。」

漣はほっとしてまたクスツと笑う。

「ああ、そういうことね。でも、よく太らないわね、そんな生活してて。」

「ああ、俺？エネルギー体質みたいですぐに燃焼されちゃうんですよ。ほら。」

飯田が不意に漣の頬に手を伸ばした。触れた手にどきっとして一瞬固まった。飯田の手は飯田が言うように暖かいというより熱い。漣は飯田の思いに直接触れたみたいにかけてさっと体を引く。

「飯田君！」

漣がしかめっ面で睨みつけると飯田はいたずらっこのような表情で役得とつぶやいて舌を出す。それからニコニコ笑って、天ぷらを箸でつかんで口へ放り込んだ。

食事が済むと飯田がコーヒーを買っていきましようスタバに誘った。店内で注文した飲み物を待っている間、ふと窓ガラス越しに外に視線をやった。そしてすぐに漣の視線がそこに釘付けになった。すぐ目の前のカウンター奥から店員がさわやかな声で漣に声をかけている。

「先輩？呼んでますよ？」

漣は飯田の声にも気付かず、放心状態になって立ち尽くしている。飯田が不信に思って漣の視線の先に目を向けた。店と反対の通りに流星とその流星の腕に絡みつくようにしなだれた上条が何か話をしながら歩いてゆく姿があった。飯田がその光景にはっとしたが、同時に流星の無表情な顔に気が付き、遠くなっていくその背中なんだか哀愁が漂っているようにも感じた。もう一度店員に呼ばれ、我に帰った飯田は漣の分も受け取ると漣の腕を取ってすばやく店から連れ出した。

飯田はすぐに会社に戻らず、会社と反対側の川沿いに漣を連れて歩いて行った。漣は黙りこくっている。しばらく歩いて人通りから外れたところにベンチがあったので、漣を促して二人でそこへ座った。飯田は手に持っていたスタバの袋を脇へ置くと、しばらく黙って二人で川の流れを見つめていた。

飯田がずっと漣の手を握る。

「大丈夫ですって、流星先輩には何か事情があるんですよ。」

「…。」

漚は川に視線をやったまま黙っている。飯田はいたたまれなくなつて、思わず漚を抱きしめる。今朝と違って余裕がないのか、飯田に抵抗する風もなくなすがままだにされている。

「先輩、流星先輩を信じましょう。」

飯田がそういうと漚は飯田の腕の中でピクツと反応した。

「あんな二人を見て、信じろですって？」

漚が投げ捨てるように言葉を吐いた。その瞬間、漚が声を押し殺すように飯田の腕の中で嗚咽し始める。飯田は漚の頭を大事そうになどと漚の体をさらに抱き寄せてその抱きしめる腕に力をこめた。

『流星先輩、あなたはいったい何を考えてるんですか。』

飯田はその腕に漚を抱きしめながら心の中で流星を責めた。

その晩は仕事にならないと判断して一旦会社にもどると仕事を片付けて、飯田が滯を送って帰った。

「先輩、大丈夫ですか？」

飯田が心配そうに滯の顔を覗きこむ。滯はだまっただまま頷くとぼうつとして歩いて玄関の中に消えていった。しばらくじっと滯の家の前で滯の後ろ姿を見送ったまま立ち尽くしていた飯田が、帰ろうと振り返ると、そこにちょうど流星が現れた。飯田はその姿をみるなり、流星をどなりつけた。

「流星先輩！何考えてるんですか！あなたは！」

そう叫ぶと流星につかつか近づいて行って胸倉を掴んで頬を殴りつけた。その反動で流星は地面に叩きつけられた。流星は殴られた頬に手をやって一瞬飯田を睨みつけたが、避けるようにすぐに地面に視線を落とした。ピンと張り詰めた空気が二人を隔てる。

「先輩！」

何も言わない流星がもどかしくて、飯田はもう一度、地面に転がっている流星に掴みかかった。

「先輩、さっき、上条さんと歩いてましたよね。どういことなんですか。真藤先輩はまた・・・。」

飯田が言葉に詰まって思いをはきだせずにいると、流星がふいに自分の胸倉を掴んでいる飯田の手をとった。

「貴俊……。ちょっと寄って行けよ。」

淡々とそれだけ言う流星は立ち上がって、門を通過して玄関の方へ歩いていった。飯田もしばらくはじっとその様子を睨みつけていたが、流星が玄関の中に消えたのを見て、勢いよく大きく息を吐き出すとしかたないとばかりにあとに続いた。

流星は部屋にはいつて上着を脱いでベッドの上に放り投げると飯田にソファにすわるように促した。飯田はこの部屋に来るのは久しぶりだった。大学が近かったせいもあって学生の頃はしょっちゅう出入りしていて、今の会社にはいつてからも入社したばかりの頃はよく泊まりに来て飲んで愚痴をきいてももらったものだ。その頃とほとんど変わらない部屋の風景だった。相変わらず滯の写真ばかりが目立つ。

「先輩……。何かあるんでしょう？ 本当のことを言ってください。」

飯田が流星に詰め寄る。

「貴俊……。滯を頼む……。」

思わぬ言葉に飯田が一瞬あっけにとられた。

「え……？」

「滯を幸せにしてやってくれ。」

「どういことですか？」

飯田が訝しげな顔をしながら問い正す。

「・・・江怜奈は妊娠してるらしいんだ。」

「えっ・・・？それ、まさか流星先輩の？」

飯田が不可解と言う顔をして流星にあいコンタクトで回答を求めると、流星は飯田からすつと目を逸らして苦笑いしながら頷いた。

「らしい・・・。」

飯田の顔がしんじられないと言わんばかりにゆがんだ。

「そんな・・・。でも、あなたは真藤先輩が好きなんですよ？だってら・・・。」

「あいつは産むって言って、聞かないんだ！」

流星は飯田の言葉をさえぎって黙って聞けといわんばかりの強い口調で言った。

「しかも・・・俺に結婚しろと。じゃなければおなかの子供もろとも死んでやるって・・・。冗談かと思ったら本当に目の前で飛び降りようとして・・・。あいつ本気だった・・・。なんとか止めたら今度は、あいつ・・・滯の目の前でおなかの子供もろとも死んでやるっていうんだ。しかもどこで調べたのか、レジントンホテルのプレス発表で死んでやるっていうんだ。」

「そんな……。冗談でしょ？」

飯田は流星の言葉に驚きを隠せない。上条は確かに気の強そうな女だが、今までに浮いた話が多く、飯田には1人に真剣になるなんてタイプには思えなかった。

「冗談じゃない。あいつは本気なんだよ！」

流星が声を荒げたので飯田はその瞬間心臓がきゅっとしめつけられるように血の気が引いた気がした。未だかつて、こんなに余裕のない流星を見たことがなかった。いつも飄々としていてクールに振舞い、その余裕ぶりに対峙する相手はいつの間にか優位にたたれてしまう。そんな流星が今日は別人のように余裕がない。

「……。あいつの神経は壊れそうならいもろくてヤバイ……。そうさせてしまったのには俺にも責任があるんだ。」

飯田は、流星の苦しそうに話す内容に言葉を失った。

部屋中ずっしりと質量の重い空気で占められてまるで身動きできないかのように流星も飯田もその場で微動だにしない。ここは飯田にとっては学生時代から来慣れた好きな空間だったが、今は息苦しく居心地は最悪だった。飯田はそれでも重苦しい空気の中、じっと耐えていたがそのまま流星は口を閉ざしたまま何も語ることはなかった。

それに痺れをきらして先に口火を切ったのは飯田だった。低くこもるような声は怒りをやっと思いで抑えつけているのか不安定に震えている。

「それで、先輩は上条さんと結婚するんですか。」

それでも流星は応えない。その態度に飯田が急に声を荒げた。

「それじゃ、先輩はどうなるんですか！真藤先輩はあなたただけなんですよ！今だって、先輩ぼろぼろになって帰っていききましたよ！」

「貴俊……。俺の身からでた錆びだ。濡に嫌われるのが怖くて今の今までずっと思いをごまかしてきた。こんな卑怯なやつへのバツさ。・。あいつは仕事が生きていなんだ。あいつには才能があるしな。それで光る女なんだよ。生まれて間もない頃からずっと一緒だった。あいつはいつでも何かをみつけて思い込んだらもう一途なんだよ。あいつは誰かのために生きる女じゃない。だからそんな濡を・。俺はいつでもそばで守ってやりたかった・。でも・。もう・。・。それもできない・。・。あいつのために今の俺にできることは・。・。」

流星はそのまま言葉を詰まらせて黙り込んだ。今まで見せたことのないような悲痛な苦しみが滲みでた表情に飯田は再び言葉を失った。流星は涙こそ流してないが、飯田には泣いているように見えた。

「先輩・。・。」

「江怜奈に体はやるが心はやらないって言った。そしたらあいつはそれでもいいって・。・。」

流星が諦めたように嘲笑すると、急に向き直ってまっすぐな視線を飯田に向けた。

「俺はあとにも先にもずっと濡だけだ。だから、濡を頼めるのもおまえしか居ないんだ。おまえなら・。・。」

流星が真顔でじっと飯田を見つめる。

「おまえなら滯を幸せにできる。頼むな……。貴俊……。頼む・
・・。」

そう言つて流星は床に崩れるように膝をつけると両手を床につけ頭を下げた。流星の握られた拳はやりきれない思いがあらわれるように指が手のひらに食い込みそうなほど強く握られていた。飯田が流星の頭を上げさせようと近づこうとかがみかけた時、流星の体が小刻みに震えているのに気付き一瞬うろたえて流星に差し伸べようとした手を止めてしまった。結局、飯田は歪でずっしりとした重い塊を心に抱え込んだまま流星にかける言葉もなく黙ってその場を立ち去った。

12#

翌日漣はやはり眠れなかったのか、疲れた顔で朝早くから出勤した。漣がデスクにたどり着くと飯田は既にP Cの前に座って仕事を始めていた。

「おはようございます。先輩。今日も早いですね。」

飯田はキーボード操作をする手を止めていつものようにさわやかな笑顔を漣に向けた。

「おはよう…。夕べは…。」

漣が昨日のことを口にしようとする、飯田がふっと漣の唇に指を当ててさえぎった。

「先輩、昨日のことはもう忘れましょう。仕事一杯ありますからね。働いてもらいますよ。」

そういつてニツコリ笑ってまたP Cの方に向き直って滑らかに指を動かし始めた。漣は飯田をしばらくじっと見ていたが、すぐにデスクに座るとP Cのスイッチに手をかけた。

その日一日、漣と飯田はあまり言葉を交わすことなく、一日中仕事にのめりこむようにして作業を進めていた。その日の晩、飯田が後はやりますから帰って休んでくださいと、漣を強引に仕事から引き剥がした。やっていた仕事を飯田に取り上げられたので、漣はしかたなく飯田に頼んで帰ることにした。

漣が疲れた体を引きずって帰ろうとすると、外は雨が降っていた。昼間、妙に蒸し暑いと思った。真夏はこのところスコールのように

大量に降ってはピタッとやむ。しかし、ここで待っているのも時間が時間だけに面倒くさく感じた。仕方なくビルの通用口で外の雨を眺めてため息をつく、覚悟を決めて走ってタクシーを止めて乗り込もうとした。

「真藤さん。」

漣が振り返るとそこには赤い傘をさした上条が立っていた。

「一緒に乗ってもいいかしら？」

漣が呆然と立ち尽くしているとタクシーの運転手からどうしますかと声がかかったので漣は乗りますと返事をしてタクシーに乗り込んだ。そして上条にもどうぞと声をかけた。上条は傘を閉じると失礼するわと漣の隣に乗り込んだ。その時、あの2号会議室で眠る流星から香ったのと同じバラの香りがふっと鼻をかすめた。その瞬間、昨日の上条が流星の腕に絡みつくようにしなだれて歩く姿がフラッシュバックする。

「お客さんどちらへ？」

タクシーの運転手が少し後ろを振り向き加減に行き先を尋ねる。

「バイエリアへ。」

スッとあたりまえのように上条が漣の代わりに返事をした。そしてまっすぐ前をむいたまま漣をちらっと横目で見下すように見て何か含みを帯びた冷たい口調で漣に話しかける。

「ちょっとお話があるの。付き合ってくださいるかしら？」

漚はもうタクシーが動き始めていたので返事をしなかった。

ベイエリアまでは15分ぐらいだったが、道中二人は言葉をかわすことはなかった。

漚はタクシーの中に漂うバラの香りか妙に鼻につき、胸の内にどろどろした塊がべったりとへばりついたような不快感に逃げ出したい思いでいっぱいだった。漚は息を吸い込もうにも酸素が欠乏するか息苦しく心臓を激しく打つ音だけが体の中に響き渡るような気がしていた。タクシーの中はエアコンでひんやりとした空気も手伝わてさらに漚の体温をうばっていく。漚は身動きをすることもなく、ずっと窓の外に視線をやっていた。もちろん、実際漚は外の景色なんてひとつも見えていなかった。自分の隣で不敵に微笑む上条の存在が痛いほど漚を圧迫していたのだ。

上条はブライトンホテルにつけるように運転手に声をかけた。運転手は静かに頷くとブライトンホテルのエントランスにすべるように入っていく。白い制服のベルボーイが近づいて、タクシーのドアが開くとドアの側に立った。上条が降りて立ち上がると、ベルボーイがいらっしゃいませと丁寧にお辞儀をして出迎えた。そのあと続いて漚が降りると、ベルボーイが同じように出迎え、いらっしゃいませ、お荷物はございますかと声をかけてきた。二人ともそれを断わると、上条は漚を振り返ることなくコツコツとヒールの音を響かせてホテルの中へと入っていった。漚は心臓が飛び出てきそうに程に激しくうちこまれる鼓動をおさえようと少し深呼吸をした。そして黙って上条の後をついていった。

上条はロビーの奥にあるラウンジの入り口で出迎えたウェイトーに2、3なにか話しかけるとすぐに一番奥の窓側の席に案内された。漚はウェイトーにイスをすすめられて上条の前に座る。一瞬、上条と目があった。上条は爬虫類が獲物をみつけた時のように視線は鋭く顔にはうっすら微笑みを携えている。漚はドクリと体中の血液が大量に動いた気がした。その瞬間、すうっと血の気が引いていき、

口の中がからからに乾いてきた。漣と上条は視線をあわせたまま、しばらくは飲み物が来るまでは互いに何も話さなかった。

ウェイターが二人分の飲み物を置いて去っていくとやっと上条が口を開いた。

「単刀直入に言うわ。春日ちゃんと分かれて頂戴。」

漣は驚いてはじめは何をいわれたかわからずにいた。

「え？」

上条はクスッと笑って話を続けた。

「私、妊娠してるの。もちろん、春日くんの子よ。」

漣は上条の言葉に頭を殴られたかのように頭の中に何かの音が鳴り響く気がした。

「だから別れて。春日くんも私と結婚するって言ってるし…。」

上条は数日前見せた勝ち誇ったような顔で漣を見下すように言った。漣はその上条の言葉でわずかに流星を信じようと思っていた心を打ちのめされた。漣はそれまでで必死に自分を保つため張っていた糸が切れ、目の前が真っ白になる。その後何か話をする上条の言葉はもう耳に入らなかった。漣はいたたまれず、おもむろに席を立つと走ってその場から逃げ出した。

一瞬周りがざわついたが、あとに残された上条はにやっと笑うと走り去る漣の後姿をじっと見つめていた。

どこをどう走ったのかわからないが、いつの間にか漣は激しく振る雨に打たれて放心状態でのろのろと歩いていた。髪も服もズブ濡

れで水がはじかれる様子はなく、じつとりと染み込んで、濡れた髪は濡の冷えきった肌に張り付き、顎先からは雨水がしたたり落ちている。服も雨水を含んですっかり色は深く沈み、濡の冷えきった体に重くのしかかっていた。しかし、濡にはそんなことさえ、感じないかのようにただただすべてが空白のままのろろと歩き続けた。雨はすべてを洗い流すかのように一層はげしさをまして行った。

「なんて雨だ！前も見えやしない。」

男は車を運転しながら目の前の雨でほとんどワイパーが意味をなさないほど白くぼやけるフロントウィンドウをうらめしそうに眺めてややため息をつく。あきらめたように速度を落として慎重に見えにくい視界に注意をやった時、男ははっとして急ブレーキを思いっきり踏み込んだ。

キュルキュルキュル…キィー！

男が乗るローバーはあまりに深く思いっきり踏みこんだのでタイヤにロックがかかりキュツと前のめりになるような感じで強引に停まった。中から男が慌てて降りて激しく降る雨の中、濡に走り寄った。

「濡さん！」

濡には男が呼ぶ声すら聞こえない様子で立ち止まらずにふらふらと歩き続けた。様子がおかしいことに気付いた男が濡に走り寄って肩を掴んだ。

「濡さん！」

漣は男に肩を掴まれてびくんとして驚いて振り向きざまに長身の男を見上げた。漣ははっと我に帰ったようだった。

「倉…元…さん？」

その瞬間、漣は倉元の腕に倒れこんだ。

「漣さん！」

13# (前書き)

かみじょうえれな
上条江怜奈のお話です。

『江怜奈！あなたのせいよ！』

「ちが・・・ママ！ママッ！」

上条江怜奈が泣きながら叫んではっと目を開ける。辺りは真っ暗だった。思わず起き上がって江怜奈は自分の体を確認するように抱きしめると、大きなため息を吐く。汗をべっとりかいている。嫌な汗だ。気持ち悪い。いつの間に眠ってしまったのだろう。

「またか・・・。」

そういつて大きくため息をつく。昔からよく何かにつけてこの夢を見る。姉^{まりな}茉莉奈が亡くなった時の夢だ。あれからもう20年がたつ。あの時のことは今でもトラウマのように怜奈の心にこびりついている。

江怜奈は双子だった。同性だが二卵性で同時に2つの卵子が受精して着床してしまった、いわゆる姉妹が同時に生まれた双子である。それにしても江怜奈は姉にあたる茉莉奈とはあまり似ていなかった。姉の茉莉奈は江怜奈のややキツイ利発な顔立ちと比較すると丸く大きく見開かれた瞳と丸っこいややピンクに染まった柔らかな頬は天使のように愛らしく、まわりの人の目を一心に集めていた。だいたい、かわいいねとかまわれるのは茉莉奈で、江怜奈は幼い時からかわい気のない子として定着していた。

しかし、茉莉奈が周りの大人に特別扱いされるのにはかわいいだけではない理由もあった。生まれつき知能がちょっと弱いのだ。生まれたばかりの頃にはわからなかったのだが、次第に江怜奈との違いに気付いて病院で調べたところ、軽度ではあるのだが、先天性で

あることがわかった。日常生活には事欠かないレベルのようだが、同年の子供たちと一緒の知能の成長は難しいということだった。

それもあって、物心ついても茉莉奈はいつまでも純真であどけなく、泣く、笑う、癩癩を起こすなどすべてが赤ん坊のようだった。

江怜奈はいつもみんなの関心が茉莉奈に向くのが酷く腹ただしく、時には両親が見えないところで茉莉奈を泣かせたりもした。それでも両親は見えていなかったとしても江怜奈がいじめたと茉莉奈を庇い、江怜奈をこっぴどく叱った。とくに母親は茉莉奈に異常な執着を見せ、そのかわいがりようは尋常ではなかった。大きくなるたびに母親の江怜奈への叱り方はエスカレートしていった。父親は茉莉奈の事情を考えるとそれもいたしかたないと見逃すばかりか、結局、自分も茉莉奈が不憫と、傍から見ても特別に見えるぐらいに溺愛した。そんな環境で育った江怜奈はますます茉莉奈が憎らしくて、ことあるごとに茉莉奈にちょっかいをだしては両親に叱られるというのを繰り返した。それでも、茉莉奈は無邪気に江怜奈の傍にきて江怜奈にその天使のような笑顔を向けてくる。その愛らしいキラキラした笑顔を見るたびに江怜奈は酷く後ろめたさを感じて、心の中に何かが重くのしかかっていった。

起きぬけに昔のことを思い出しながらぼうっとしていた江怜奈はふと我に帰ると、大きくため息をついた。江怜奈はそんな思いをかき消すようにクビを何度か振ると、けだるい体を大きく伸ばしてベッドサイドのライトをつける。

「まぶしっ！」

一瞬、顔をしかめるが、ふと帰って来て着替えもしていないことに気付いた。

ああ、そうだ、今日はだるくてそのままベッドに倒れこんだんだっ

け。今、何時だろう。

サイドテーブルに置いてある時計に目をやる。まだPM11…10だ。

それにしても蒸し暑い。エアコンも付けずに眠ってしまうなんて・・
・。だから嫌な夢を見るのよ！

江怜奈はそんな思いを断ち切るかのように強引に立ち上がると、そのまま浴室へとなだれ込んでいった。べったりと張り付いた嫌な汗を流そうと冷たいシャワーを浴びてみる。お気に入りのローズのシヤワージェルの香りに包まれても、途中、真藤滯の動揺した蒼白の顔を思い出し、思わずこみ上げるものがあって吐きそうになった。江怜奈は目に入ったシャンプーのボトルを浴室の壁に投げつけた。からになりかけたボトルは軽くバカにしたような抜けた音で転がった。

「なんなのよ！」

余計気分が悪い。結局、すっきり出来ずに江怜奈は深夜の街に繰り出した。

「よお、江怜奈、久しぶりじゃん。ご無沙汰だな。いい男捕まえたんだってな！もっぱら噂になってるぜ。」

江怜奈は大学時代から常連で通いつめているバーのカウンターで、1人面白くなさそうにアール・アガサを傾けている。そんな江怜奈に一見イケメンに見えるホスト崩れの軽そうな男がなれなく隣の席に座って江怜奈に声をかけた。

「うるさいわね。」

江怜奈は男に視線もやらずに冷たく言い放った。男はほとんど無視する江怜奈に諦めのため息をついて背後にいた数人の連れに残念そうに首をふると店を出て行ってしまった。

江怜奈はこの界限では有名だ。資産家の令嬢の上、容貌はややキツイ感じがあるものの、華やかで気品のある美女である。モデル張りのスタイルと大人の色香はどうしても男の目を引く。しかも、女王気質で、わがままがトレードマークで知られている。江怜奈はその人目を引く容貌から、ひとたび外に出れば取り巻きや男に事欠かなかった。それだけに声をかけてくるものも多い。しかし、江怜奈の機嫌が良い時は愛想も良いし付き合いもいいのだが、ひとたび機嫌を損ねると、気が短く、攻撃は容赦なく相手を突き刺す。そんな時は誰もがお手上げなほど江怜奈は激しいお天気屋だった。周りではせいぜい怒らせないようにそっとしておくのが関の山といった一種の腫れ物扱いである。

「ねえ、もう一杯頂戴。」

江怜奈お気に入りのバーテンが無表情のまま頷く。

このバーテンは年頃が30前後ぐらいだろう。もう江怜奈が通うようになって5、6年たつが、その前からずっとこの店にいるらしい。長い髪を後ろで束ね、クールで知的な雰囲気で端正な顔立ちは美しく、その周りにまとった完璧なまでの静けさは返って強烈な存在感として誰かと話している時にもずっと江怜奈の中にあった。さらにこのクールなバーテンはめったに笑わない。

美しい容貌も手伝って眺めるにも最高の男だと江怜奈は常に意識にとめていた。常に付かず離れずの距離を保ち、話しかけてくることもない。それでも、江怜奈はなぜか気に入っていた。近くに客がいないとき、その距離感と彼から漂うピリッとクールでけっして穏か

ではない静かな空気が妙に安心できるのだ。話をしたこともないし、笑いかけられたこともないのだが、そのバーテンは江怜奈がやや酸味のある味が好きなのを知っている。友達とふざけて互い同じ種類のカクテルを飲んだ時、味が若干違うのにここ何年かで気付いた。何を言うわけでもないが、自分の存在を少し離れたところからずっと気にかけてくれているような気がするのである。

今夜も江怜奈が不機嫌そうに座ると注文もしないのにずっとアント・アガサが出てきた。やっぱりちょっぴりオレンジジュースの酸味が利いていてむかむかした嫌な気分を少し緩和させてくれた気がした。江怜奈がチラッとバーテンに視線をやると一瞬バーテンの深い夜の闇のような黒い瞳と目が合ったが、やっぱりニコリともしないで後ろを振り向いてホワイトラムを自分の後ろのボトルの群れに戻して、そのままいつものようにまるで気にをめる様子もない風に仕事に戻って行った。

滯が気付くと見知らぬ部屋の中ようだった。はっとして起き上がろうとする。

「滯ちゃん、いいの、心配しないで。ここは私の家よ。」

ふと声のする方を見るとチアキがダイニングキッチンから滯の様子を覗き込んでいた。

「調子はどう？熱は下がったみたいだったけど、どこか調子悪いところはない？」

滯はなぜチアキの家に自分がいるのかわからないといった顔をしていたが、取り合えずチアキの言葉に返事をする。

「あ…いえ…。大丈夫です…。」

「さあ、少し何か食べれる？軽くと思ってお雑炊を作ってみたんだけど、一緒にどうかしら？」

「え…？あ、すみません。…はい、いただきます。」

チアキがクスッと笑ってキッチンからやってきた。

「立てる？」

「あ、はい。大丈夫です。」

漣はリビングのソファベッドから這い出すと、自分の足でややふらつきながらもテーブルのあるキッチンへ移動した。その様子を後ろから心配そうに眺めていたチアキが、漣が座ったのを見計らうと、すぐにできたての雑炊を漣についてやった。漣はゆっくりと覚ましながらいんげにすくった雑炊を口に持っていた。

「…おいしい…。」

かつおだしに醤油のシンプルな味によく火が通った柔らかい白菜やにんじんが入ってそれに玉子がとじてあるのだけなのだが、体が欲しているのか、ことのほかおいしく感じた。

「お水も飲んだほうがいいわよ。随分汗かいたりで水分不足になってると思うから。」

漣が頷くとチアキが優しくニッコリ笑った。一通り食べて落ち着いたところで、チアキが漣に話しかけた。

「随分疲れてたのね。もう、まる2日ここにいるのよ。漣ちゃん。」

「えっ？」

漣は驚いて部屋の中に日付がわかるものを探した。

「今日は16日よ。漣ちゃんが倒れたのは14日。」

「…!、あの私…。」

「ああ、大丈夫よ。慌てないで。飯田君に連絡しておいたから、お家にも連絡を入れてくれたわ。お母様から電話いただいたから。そ

れに会社も飯田君がうまくやっておいしてくれたようだから安心して。」

「すみません…。何から何までご迷惑ばかりかけてしまつて。」

ふっと優しくチアキが笑つた。

「それを言うなら、倉元にいいなさい。」

チアキが笑つて立ち上がつて急須を手にとると静かにお湯を注いだ。緑茶の良い香りがしてくる。

「あ、倉元さん…。」

「思い出した？あなた、ベイエリアで雨に濡れてふらふら歩いてたよね。倉元が車で通りがかつて声をかけたら、急に倒れ込んで…。倉元が慌てて、私に電話してきたのよ。それで、家はベイエリアに至近距離だからとにかく私の家にいらっしゃいって連れてこさせたの。そしたら、熱が高くて…。近くにね、幼馴染の医者がいるのよ。内科医じゃないんだけど、とにかく来いと呼びつけて見てもらったの。雨に長時間打たれて体が冷えて熱がでるだけだからと、家で暖かくして寝てれば大丈夫だつて行つてたわ。だから解熱剤だけ飲ませてそのままここでやすませたのよ。」

漑は申し訳なさそうにうなだれた。

「はあ…。すみません…。」

漑は仕事の相手なのに倉元やチアキに迷惑をかけてしまったことに酷く落ち込んだ様子だった。

「なによ。滯ちゃんらしくないわね。元気だしなさいよ。」

そういつてチアキが滯に暖かいお茶を注いで差し出した。

「さ、お茶でも飲んで。ま、もつとも、滯ちゃんがここで寝てるだけならいいんだけどね、二人の大男がさ、家にとっかえひっかえ出入りする方がうっとおしかったわよ。」

チアキが何か思い出してクスクス笑った。

「え?」

「倉元と飯田君よ。滯ちゃんの様子を二人がとっかえひっかえ見に来るの。来ないとなったら今度は電話攻撃。ほんと滯ちゃん、モテるわねえ。」

チアキが吹き出すように笑った。

「すみません…。」

滯が赤くなって俯く。

「やあねえ、責めてるんじゃないのよ。ちょっとからかってるの。」

「えっ?」

滯が顔を上げるとチアキがウインクして笑った。

「ねえ、なぜあんなところを雨に打たれて歩いてたの?よかったら

話してみない？」

漣はチアキにそういわれておぼろげな記憶をたどる。そして突然はつとすると、漣の顔色は見る見るうちに青ざめた。

「漣ちゃん？」

漣は急に呼吸が速くなったかと思うとふらっと倒れそうになった。

「漣ちゃん？大丈夫？」

あわてて、チアキが支えたせいでかろうじて倒れずにすんだ。

「ごめんごめん、私デリカシーがないわね。無理しなくていいわ。さ、もう一度立てる？ベッドって休みましよう。」

チアキはベッドまで漣をささえて寝かせると、すぐにキッチンにもどって水と薬を携えて戻ってきた。

「さ、薬飲んでもう少し眠るといいわ。家は一向にかまわないからね。ゆっくりすればいいのよ。」

「すみません……。ほんと何から何まで……。」

「さあ、もう気にしなさんな。」

チアキが優しく微笑んで漣に声をかけた。漣はすぐにとろんとしてきたかと思うと、もう一度眠りについた。

しばらくすると飯田がやってきた。仕事の合間に向け出てきたようだった。

「すみません、チアキ先生。先輩どんな様子ですか？」

「ああ、さっきね少し起きたから、食事したわよ。今眠ったところ…。」

飯田がソファベッドに近づいて漑の顔を覗きこんだ。漑の寝息は静かでじっと体を丸めるようにして眠っている。飯田は、漑の寝顔をしばらく眺めてから物音を立てないように静かにチアキの傍に戻ってきた。

「でも…、漑ちゃん倒れる前のことを思いだしたら、急にまた、調子が悪くなって…。それで今眠ったところ。あれは、尋常じゃないわね。何かがあった様子だったわ…。飯田君なにか心当たりある？あなたがいつも一番近くにいるから何か知ってるんじゃない？」

飯田はチアキに聞かれてドキッとした。漑が倒れた理由もわかってる。それを話していい物か飯田は決めかねて戸惑う表情を見せた。

「飯田君？つまらないこと考えるんじゃないのよ。私達は仕事上の付き合いだけど、仕事は仕事よ。今は漑ちゃんの友人として接してるの。なにか知ってるんだったら教えてちょうだい。」

チアキは真顔でじっと飯田の目を見据えた。飯田は、しばらく考える風だったが、ようやく口を開いた。

「先輩はおそらく、知ってしまったんだと思います。大切な人の真

実を。」

飯田は漕が倒れる理由はひとつしかないと思った。おそらく上条が漕に話したのだろう。あの日タクシーに乗り込もうとした漕に赤い傘の女が声をかけて一緒に乗っていったと顔見知りの警備員が言っていた。飯田は1人で帰したことをこれほど後悔したことはなかった。自分がついていれば、漕は真実を知ることもなく、こうして倒れることもなかったのだ。飯田は流星とのことや上条の妊娠のこと等かいつまんでチアキに事情を説明した。

「そう…。そんなことが…。で、飯田君、どうするの？」

「えっ？どうするって？」

「だって漕ちゃんのこと好きなんですよ？」

「えっ？なんで…？」

チアキは笑った。

「そんなのはじめからわかるわよ。あなたの様子見てはじめにピンときたわ。」

飯田はチアキの言葉に罰が悪そうに赤くなった。

「で、どうなの？」

チアキに問い詰められて、諦めたように飯田がため息をつく。

「もちろん、俺は今までどおり、先輩の傍にいるつもりですが、先

輩が好きなのは流星先輩ですからね。その気持ちをどうこうはできませんよ。」

飯田は少し険しい顔をしてチアキに言い返した。

「そりゃあ、そうね、倉元も似た様なこと言ってたわ。」

「えっ？ 倉元さんが？」

チアキが頷く。

「ほんとあんた達はやさしいわね。私が男だったら、強引にでもこっち向かせちゃうんだけどな。」

「えっ？」

飯田が驚いた顔をする。

「嘘よ。滯ちゃんの気持ちを無視しては出来ないわよ。冗談。さ、飯田君、仕事抜けだしてきたんでしょ？ そろそろ戻ったら？ 何かあったら連絡するから。」

チアキは飯田をなだめるようにして仕事へと向かわせた。

入れ替わって夕方、倉元がやってきた。

「そろそろくる頃だと思ったわ。昼間ね、一瞬起きて食事したけど、

すぐに眠ったわ。」

「そうか…。」

倉元はその場から眠っている漣に視線をやった。それから、飯田に聞いた話を倉元にもしてやった。

「そうだったのか…。ついこの間、幸せそうに笑ってたのに…。そんなことなら…。」

倉元が拳に力をこめた。チアキはその様子を見て大きくため息をついた。

「ほんと、漣ちゃんもね、あんたたちにしておけば、こんな苦しむことなく、幸せなのに。世の中、思うようにならないわね。」

チアキがチクリと棘のある言い方をした。

「すまない。迷惑かけてしまつて。チアキしか頼れなくて…。男じやこんな時役にたたないからな。仕事は大丈夫なのか？」

倉元は申し訳なさそうにチアキに尋ねた。

「ええ、今週はゆるやかなのよ。出るときは事務所のスタッフに來てもらってるし。っていつでも、漣ちゃんはずっと眠りっぱなしだから、さして手をかけてないわ。よっぽど疲れてたのよね。かわいそうに。」

チアキがちらっと倉元に視線をやった。それに気付いて少し焦った顔をする。

「えっ？俺のせいだっていうのか？」

「冗談よ。あなたの仕事は滯ちゃんを輝かせるわ。」

チアキがふつと吹き出して笑った。

「あなたが自慢するからどんな子か興味があって仕事も請けてみたけど、本当、いい娘よね。才能もあるし。あなたが夢中になるのもわかる気がしたわ。なんだろう、一途ですごく気持ちいいのよね、この子と仕事すると。夢があるっていうか。忘れてしまいうるようになる思いを掘り起こされるのよ。そういうことでしょ？」

チアキがおどけるように倉元の目を覗き込んだ。

「：ああ、そうなんだ。彼女といると、そんな純粹に夢を追いかけてた自分を取り戻せる気がして、妙にわくわくしてくるんだ。いろんな娘と仕事したけど、そんな思いにさせられたのははじめてだったな。」

そういつて嬉しそうに倉元が微笑んだのでチアキが少しすねたように口を尖らせた。

「まったく、飯田君といい、あなたといい、滯ちゃんにベタばれなんだから。ほんと焼けるわね。」

「えっ？」

倉元がチアキの顔を見上げようとすると、チアキがすかさず立ち上がる。

「様子見てやったら？ 気になってしょうがないんでしょ？ 私まだ、奥の部屋で仕事の途中なの。いいかしら？」

チアキが奥の部屋に向かって歩きながら背を向けたまま倉元に言った。倉元はチアキのその背中をじっと見ながらもああと返事を返した。

チアキが奥の部屋に入り込むと倉元は静かに滯が眠るソファベツドに近づいて跪いて、滯の眠る横顔を覗き込んだ。滯のまぶたが濡れている。泣いていたのか……？ そつとぬぐってやろうと滯に触れようとした。

「……りゅう……せい……。」

色を失くして少し乾いた唇が動いた。途端に滯の長い睫の奥から涙が湧いてくる。倉元は一瞬ぎゅっと胸を締め付けられた。それでも、気を取り直して滯の流す涙をぬぐってやる。

「諦めたはずなのに……。なぜ君はこうまで俺を惹きつける？」

ふっと苦笑いすると倉元は滯の髪をやさしく梳くようになでた。その様子を奥の部屋に入り込んだはずのチアキがドアの隙間から重い表情じつとで見ていた。

午後8時になると飯田が再びやってきた。飯田を招きいれると滯が飯田の声でちょうど目を覚ました。

「あ、先輩、起こしてしまいましたか？すみません。」

飯田が申し訳なさそうに頭を下げる。

「飯田君…。」

おぼろげな視界に見慣れた顔を見つけて名前を呼んだ。そして、起き上がるうとして身体を持ち上げようとした。飯田がすかさず支えて手伝ってやる。

「大丈夫ですか？無理しないでください。」

「大丈夫よ。それより、あなたにいっぱい迷惑かけてしまったわね。ごめんなさい。」

「そんな、迷惑だなんて…。先輩、気にしないでください。頼れる後輩ですから。」

飯田がいつものようにさわやかに滯に笑いかける。滯にとって飯田の笑顔は救われるようだった。

「飯田くん、迷惑ついでにお願いがあるの。」

「なんですか？なんなりとおっしゃってください。」

飯田が優しく漣に微笑みかける。

「ずっとここに居るわけにはいかないから、自宅に帰りたいの。タクシー呼んでもらえるかな？」

「えっ？そりゃ、わかりますけど…動けますか？」

飯田が心配そうな面持ちで漣に問いかける。漣は身体を起こそうとしてソファ―ベッドに腰掛ける風にして床に足を下ろした。

「なんとか大丈夫。チアキ先生は？」

「あ、お仕事があるらしく、奥の部屋にいらっしやいます。」

「じゃあ、挨拶してくるわ。」

そういつて漣が立ち上がろうとすると、足がおぼつかず体がふらついた。

「あ……。」

飯田がすぐに抱きとめる。そしてそのまま飯田は漣を抱きしめた。

「心配したんですよ…。俺が傍にいますから。先輩…。」

「飯田くん…。」

飯田の胸は温かく、凍えた漣の心を優しくつつんだ。漣はその瞬間、自分があまりにも人肌を恋しく欲していたのだと自覚して、涙がこ

み上げてきた。

「先輩…。我慢しないで…。泣いていいんですよ。」

そういつて飯田は漣の頭を大事に抱えて頬を摺り寄せた。漣は飯田の優しさに思わず縋りそうになる自分を抑えて、やっとの思いで飯田の胸を手で押しやった。

「飯田君…。あなたに会ったら少し元気が出てきたわ。もう大丈夫。心配かけてごめんなさい。」

漣はそう言ってぎこちなく笑った。

漣はその日のうちに自宅に帰ることをチアキに伝え、心配そうに引き止めるチアキにお礼をいってタクシーで飯田とともに自宅へと向かった。自宅前で飯田に支えてもらいながらタクシーを降りようとして、タクシーの後方に顔を上げた。その瞬間、漣は固まった。様子が変なことに気付いた飯田が漣の視線の先に目をやった。

「…流星先輩…。」

飯田が呆然として流星を見ている。漣はタクシーを降りるとその場に立ち尽くした。流星は二人の姿を前に驚いた顔をして立ち尽くしている。飯田がはっと我に帰ると、漣の肩を抱くようにして抱えた。

「先輩、いきましよう。身体にさわれます。」

そう言って家の玄関へと促そうとしたが、漣は動かなかった。

「先輩…?」

「流星…。私に話すことがあるんじゃない？」

滯が低い声で流星を睨みつけるようにして言った。滯の体は震えている。飯田は肩を抱く手に力をこめた。

「流星…。」

流星も何も言わずにじっと滯を見ている。そして急に青白い顔を曇らせて視線を逸らした。

「仲いいんだな。なんだ、貴俊と出来てたのか…。」

そういつて流星はこバカにしたように笑うとさっさと歩き出して玄関へと足を向けた。

「流星、そんな話じゃないわ。ちゃんと私に説明してよ。何があったの？」

「なんのことだ？ おまえこそ貴俊とやけに親密じゃないか。どういうことだよ。」

嫌味のように棘のある言い方で滯にやり返してくる。

「流星先輩！ そんな言い方やめてください！」

「なんだ、貴俊。別に隠そうとしなくてもいいんだぞ。毎日一緒にいるんだからな、そうなのでも不思議はないからな。俺もすっかり騙されたな。」

流星は玄関の前に立ち、漑と飯田に背中を向けたままだ。飯田は流星の態度にいたたまれなくなって流星の背中に吐き出すように叫んだ。

「流星先輩！…上条さんが先輩に話したんですよ！それで…先輩は…。」

「飯田君！」

漑が飯田を睨みつけて首を振って飯田を牽制した。

「なんだって？江怜奈が？」

流星がすごい形相で振り向いた。流星のその端正で綺麗な顔に怒りをあらわにしている。

「ええ、本当よ。」

漑はあふれ出しそうになる感情を抑えて震えながら答える。痛いほど打ち付ける心臓の鼓動で追い詰められたのか、大きく息をすうと流星に向かって叫んだ。

「どういことなの？…流星！あなたの口から聞きたいのよ！」

その場が静まり返る。3人はその場に立ち尽くして微動だにしない。その場は緊迫した空気が漂っていた。

しばらくの間、流星は沈黙していたが、急に下を向くととクスクス笑い出した。そして顔を上げると漑をじっと見据えて開き直るように笑って言った。

「なんだ聞いたのか……。しかたないな。そうなんだよ。あそんでたツケだな。江怜奈の腹の中に俺の子がいるらしいんだ。俺、江怜奈と結婚するよ。江怜奈は社長令嬢だしな、まあ、あれだけの女だから、まあ、いいんじゃないかねえの？俺も潮時か……。」

「流星先輩！違うでしょ？そんな言い方しないでください！」

飯田が必死に流星を庇って訴える。

「うるさいな。貴俊！漣はおまえにやる！早く漣を連れていけ。」

そう叫ぶと流星は扉を開けて力任せに閉じた。

「漣……。くっ……。」

流星は閉じられたドアの前で崩れるように床に座り込んだ。そしてじっと耐えるように声を殺して嗚咽した。

漣は放心状態で流星の家の玄関を睨みつけて立っていた。飯田も流星の消えた玄関を見つめながら漣を守るように抱きしめた。

「先輩……。」

漣は一瞬ビクツとすると自分から飯田の胸に顔をうずめた。漣はその場に立っているのがやっとだった。自分がどこにいるのかすらわからずに不安の渦に飲まれていくような気がして、唯一飯田から伝わるぬくもりだけが漣を現実につなぎとめていた。漣は必死で飯田にしがみつく。今はただただ誰かの温もりが必要だった。飯田はそんな漣の思いを受け止めるように漣を強く抱きしめた。

翌日、流星は江怜奈を港へ呼び出した。ここは公園のように整備されているが、まわりに人は少ない。目の前を荷物を積んだ外国貨物船がこの先の港に入港するために通り過ぎる。天気はどんよりと重く灰色の雲が広がる。まるで心の内をあらわしているかのようだ。光を閉ざす厚い雲が広がる空にはウミネコが船より高い位置でぐりぐりと鳴きながら飛び回っていた。

「なぜ、滯に手を出した？」

流星が厳しい顔をして江怜奈を睨みつけている。

「なんだ、珍しくあなたから誘ってくれたと思ったら、そんなこと。」

江怜奈は高慢な表情で鼻で笑った。

「手なんかだしてないわ。」

流星が江怜奈の両肩をつかんで噛み付くように言葉を投げた。

「約束しただろう？ 滯には手を出さないと！」

「痛いっ！」

はっとして流星が江怜奈の方から手を離す。

「滯、滯ってうるさいわね！ あなたが煮え切らないから私が話した

までのことでしょうか？ どうせ言わないといけないんだから一緒じゃない！」

流星が黙り込む。そして江怜奈にもう一回近づくと頭を下げた。

「頼むから、漣には関わらないでくれ。その代わり俺をおまえにやるといったら？ 俺はおまえと結婚するって。」

江怜奈が流星を凝視して、また高慢に笑う。

「そうね。どうせ、あなたは私のものだもの。わかったわ。あなたが私の物である限りあの子には手は出さないわ。そのかわり、私の言うこと何でも聞いて。」

江怜奈が流星にじっと訴えるような瞳を向けてくる。

「ねえ、キスして。」

流星はしばらくじっと江怜奈を見ていたが、ゆっくり江怜奈に近づくと江怜奈が流星の首に手をまわす。流星が江怜奈の体を抱き寄せ唇を重ねた。そして唇を離すとじっと流星を見つめる。それまで強気だった江怜奈は急に顔を曇らせると自分から流星の胸に顔をうずめた。

「傍にいて…。あなたが好きなの…。私から離れないで…。私…。あなたがいないと生きていけない…。」

江怜奈は搾り出すようにつぶやくと流星に縋りつく。流星は江怜奈を抱きながら空を見上げて目を閉じた。

—私にはあなたしかいない…。

「皆さん、こんにちは。香麗堂、『Beau』担当の真藤です。今日は私ども香麗堂の新製品『Beau（ピュア・クリスタル）』新発売企画説明会に足をお運びくださり、誠にありがとうございます。こうして勢ぞろいした皆様のお顔を拝見しておりますと、本当に驚くばかりで、改めて、すばらしいメンバーが揃ったなど私達もたいへん頼もしく思っております。お忙しい中、お時間を割いてくださっておりますので、こちらでも段取りよく進めていくことを努力いたしますので、どうかよろしく願います。では、まずは代表取締役社長の新垣より、ご挨拶をさせていただきます。では新垣社長、願います。」

澪はやや無表情に言葉を紡いですぐ傍に座っていた新垣に視線をやる。新垣が軽く頷いて立ち上がって前に立った。

「皆さん、本日は…。」

社長と入れ替わりで澪が木村マネージャーと飯田の間に座る。飯田がその横顔にチラッと視線をやる。傍からみれば緊張して顔がこわばっているとも見受けられるが、そうではないことを飯田には手に取るようにわかった。

あの後、翌日澪は何もなかったかのように出社した。一見そんな風みえるのだが、毎日見ている飯田には澪の状態が尋常でないことが痛い程伝わってきた。澪はそれまでもよく仕事をしたが、ここ数日は生半可じゃない。仕事に依存しているのだ。仕事に携わっていないと自分が保てないとも言わんばかりに、寝るのも惜しんで仕事をした。飯田はそれに触らず、ただ仕事でのサポートとともに澪を傍で何も言わず見守った。今の現状は本人しか乗り越えることは

できない。飯田は漑が倒れそうになったら自分が傍で絶対に支えるつもりで、いつもにも増して常に傍にいて漑を支えた。

そして今日、この数ヶ月企画をサポートしてくれる優秀なスペシヤリストが一同に介する重要な日を迎えた。クノチアキも倉元も、そして棚橋もいる。そして結城ななえもいる。マネージャーから話を聞いてとても興味を持って、自ら話を聞いてみたいと本人のたつての希望で出席となったらしい。こうしてみると、その道では名の知れた顔ぶれが一同にそろっている。通常ならこのメンバーを前に相当のプレッシャーを感じるはずだ。しかし、漑は違った。いつもはつらつとした漑のオーラは消え失せ、かわりにいつもにも増して凄みが加わったようなオーラを纏っている。それは、外見の美しさとあいまって、ちがう意味で鮮烈な印象に見えた。同じ思いをその向かい側の席に座るクノチアキと倉元も感じていた。

企画説明会ははじめに最終版の見本品を披露した。思った以上のできばえに一様に反応の良い声が漏れた。とくに、予約限定品のシンシア社とのコラボの商品は目を惹くようだった。そして飯田から商品のラインナップ、特長を説明するとともに、商品の技術背景を研究所室長の上島が説明する。はじめはシンシア社とのコラボの話を決った上島だったが、今となっては思いのほか社内や関係者に評判がよく、上機嫌で得意の世界初の技術を披露するなど、いつもにも増して饒舌だった。社長の新垣も幹部も、集まったスペシャリストたちの反応を見て満足気な表情である。

その後はキャンペーンの全体スケジュール、各企画ごとの内容確認が滞りなくなされた。目玉はやはり、レジントンホテルのガーデンを貸切にしてのプレス発表会やV誌とのタイアップ、V誌とK誌の専属モデルによるコレクションだった。いつもならタレントはVTRでのコメントだが、今日は結城ななえ本人がパーソナリティとして自己紹介を買って出た。ななえは少し緊張気味ではあったが、ほほを染めて嬉しそうに挨拶をした。今、注目の大物若手女優だが、生の方が初々しくてかわいらしい。これが『ピュア・クリスタル』

のイメージにぴったりと、澤は他に誰も候補を立てることなく、ななえに決めていたのだ。思いがかなうどころか、ななえの方が『ピュア・クリスタル』をとっても気に入ってくれて、今日も自分でメイクしてくるほどの入れ込みようだった。

「化粧品のパーソナリティを担当するのははじめてなんです、以前からすごく憧れてました。今、とても嬉しいです。それに……はじめに『ピュア・クリスタル』を見て、すごくかわいいので、思わず手にとってしまいました。」

ななえが嬉しそうに微笑む。この子供のようにあどけなく、でも、どこか色気を感じる不思議な微笑みは人の視線を強烈に惹きつける。ななえは少し緊張している様子を隠すこともなく、深呼吸した。

「今、試作品を使わせていただいているのですがキラキラしたシンシアのクリスタルがこのデザインにぴったりですっごくかわいい。でも、発色もいいし、パールがクリスタルみたいに透明な輝きが上品で……でも華やかさもある……。『ピュア・クリスタル』は私のお気に入りです。初めて見たときから一目ぼれしてしまいました。大好きな化粧品のパーソナリティができるなんて……。私、本当にこの仕事をいただけたことに感謝しています。精一杯パーソナリティを努めさせていただきますので、皆様どうかよろしく願います。」

ななえは丁寧に深々とお辞儀をした。周りから自然に拍手がでる。さすがに今もっとも注目を浴びる女優である。すっかりここにいるスタッフを虜にしたようだった。

「先輩、やっぱりななえちゃんにして良かったですね。これから楽しみですね。」

飯田が少し体を滯の方に傾けてななえに視線を送りながら滯に話かけた。

「そうね。ななえちゃん、すごく輝いてる・・・。」

そう言って滯もななえを見ながらも少し寂しそうな顔を見せる。すかさず飯田がフォローをいれた。

「ななえちゃんがその気になったのは先輩ですよ。はじめに先輩に会って、すごくやってみたくなったって言ってましたよ。やっぱり、事務所を通してじゃなく、直に会いに行つてよかったですね。話ができるまで粘った甲斐がありましたよ。あとから、事務所から怒られましたけど、ななえちゃん、どうしてもって、自分で通しちゃったみたいなんです。そのおかげであとからはトントンと商談が進みましたけど。そうやって人の心を動かすの、先輩じゃなくちゃできませんよ。」

滯は飯田のをチラッとみて少し微笑むとすぐに立ち上がった。

「皆さん、これにて企画説明会を終了させていただきます。今回の企画はいつにも増して、力を入れています。『Beau』のブランドが誕生してから早いもので今年3年目を迎えます。節目となる今回はなんとしても、市場でNo.1の地位を獲得したいと思っています。そのために、その道のスペシャリストの中から選りすぐり、自信をもって皆様にお声をかけさせていただきました。必ず、No.1にふさわしい仕事をしてくださると思いますので皆様に期待しております。私ども香麗堂は皆様とともに『Beau』ブランドをトップブランドにするための最後の仕上げとなるこの企画を全社を上げて盛り上げて参りたいと思います。」

そしてそれまで無表情だった漣の顔が一瞬崩れた。涙を堪えるかのように目を潤ませて、周りの人の顔を1人1人視線を合わせてから、大きく深呼吸をして、少し間があって、漣は搾り出すように言葉を紡いだ。

「あの：個人的にもとても思い入れを持ってこのブランドを手がけて参りました。皆様にお会いした折、私が申し上げた言葉は本心です。純粋に『ピュア・クリスタル』のためだけに、この製品の魅力を最大限に引き出してくれる方の手にゆだねたいと思い、私の目で皆様をお1人お1人を選びました。『ピュア・クリスタル』の企画が持ち上がったときに、既に私の中では皆様のお名前が浮かんでおりました。皆様でないとはだめなんです。No. 1になるためには皆様でなければならなかったのです。私も今までの『Beau』ブランド担当としての経験をもとに今回はいつもにも増して精魂こめてこの企画のために力を尽くしています。『Beau』ピュア・クリスタル』は私自身だと思っています。どうか、私達とともに皆様のお力で『Beau』をNo. 1に押し上げてください。よろしく願います。」

漣はやっとの思いで言い切って勢いよく深々とお辞儀をすると、じっとそのまま動かなかった。しばらくするとパラパラと拍手が聞こえてそのうちつられるように全員が拍手をはじめた。漣が驚いて顔を上げるとみんなが立ち上がって拍手して、がんばろうな、漣ちゃんと次々と声があがった。漣はその性質や仕事への情熱で人を強く惹きつける。本当に担当者から愛されるのだ。漣と仕事をしたことがあるものは大概仕事が楽しいと感じるようで、いつの間にか本気で入れ込んで仕事をしてしまう。みんなの暖かい拍手に漣は堪えきれず、涙を流した。席にもどると飯田が笑顔で迎える。そしてさりげなくやや体を漣に傾けて囁くように言った。

「かつこよかったですよ。さすが先輩ですね。」

漣は一瞬ほっとした表情を見せる。飯田がその表情を見て少しだけ安堵した。こここのところの漣は危ういナイフのようで、それでいてその刃は薄く、少しの衝撃でもろく崩れ去りそうなほどだったのだ。ある。ひとつ山場を越えたように感じて飯田もついほっとしたのだ。飯田は仕事がうまくいっている限り、漣は立っていられると確信し、これからも何があっても支え続けようと気持ちを引き締めた。

会議が閉められると急いで漣と飯田が会場の入り口に回った。会場を出て行くスペシャリスト達に挨拶をしながら丁寧に見送りをする。

「漣ちゃん、さっきのよかったよ。うん、ほんといい企画だね。きつとN O. 1になれるよ。してみせるから。任せときな。いい仕事するから、期待しててよ。」

などと会議室から退出する者はみんな笑顔で活き活きと一様に漣に声をかけていく。

「ありがとうございます。私どもがんばります。これからよろしくお願いします。」

笑顔で握手に応じ、さらにその後姿に深々とお辞儀をする。その横で飯田も同じように挨拶しては見送りを丁寧にした。

「漣ちゃん。」

聞きなれた声が後ろからかかって漣が振り向いた。そこにはチアキと倉元が心配そうな顔で立っていた。

「チアキ先生、倉元さん、その節はご心配おかけしました。もう大丈夫です。」

滯は顔をこわばらせて言った。その表情に倉元が敏感に反応する。しかし滯は倉元が何か言いかけるのをさえぎるように口を開いた。

「倉元さん、また、ステキなところで打ち合わせをお願いしますね。楽しみにしてますから。」

そういつてニツコリ笑いかけた。無理やり笑顔を作って笑いかける滯の前にして倉元は何もいえなくなってしまった。しかたなく、倉元は心配そうな顔で頷いた。

「じゃ、滯ちゃん、明日スタジオで。」

チアキが場の雰囲気を感じて笑顔で明るい声で軽快に挨拶をする。

「はい。必ず伺います。」

そう言って、明るく笑顔で滯も返した。それでもエレベーターに乗り込む前に倉元がふっと足を止めた。

「倉元？」

「ああ。」

チアキの呼ぶ声に振り向かずには返事をすると言ったようにエレベーターに乗り込んだ。エレベーターには倉元とチアキの二人だけだった。

「まだ、未練たらたらね。」

チアキの言葉に倉元がため息で応じる。

「そんなにあなたを悩ませている滯ちゃんはすごい娘ね。今まで誰にもなびかなかったあなたが後姿を見てため息ついてるんですもの。もう一回、あなたの切ない思いをぶつけてみたら？飯田君にもつかれちゃうわよ。」

チアキは無機質にフロアの番号が変化していく様に目をやりながら倉元に問いかけたが、倉元は諦めたように首を振った。

「今はまだだめさ。滯さんは心を閉ざしているしね。まだあの春日が心を占めてるよ。あの飯田ですら傍にいることしかできない感じだった。今の滯さんの心には誰も触れられないよ。」

チアキは倉元の横顔に目をやると、そこにはチアキが今まで見たこともない表情があった。その複雑な思いがにじむ表情にチアキにはいたたまれなくて何か言いかけようとしたとき、チンツとエレベータの停まるシグナル音にさえぎられた。エレベーターの扉が開いて数人の男女が乗り込んでくると、そのまま二人の会話は途切れた。

今日集まったスペシャリストを一通り送り出したあと幹部を見送ると、会場には滯と飯田だけが残った。

「お疲れ様でした。先輩。」

「お疲れさま。飯田君のおかげで資料も間に合ったし、大成功だったわ。ありがとう。」

滯は少し疲れた表情を見せながらも飯田をねぎらった。

「いいえ、僕はサポートしたまでです。先輩の仕事はすごいですよ。一緒にやっているとわくわくさせられますから。いい仕事させてもらって、俺のほうが感謝です。」

「ありがとう、いつもそうやって優しい言葉をかけてくれるから、つい頭に乗ってしまいわ。」

滯が飯田にほんの少し笑いかける。しかし、飯田には酷く寂しい笑顔に思えた。それでも、飯田には今の滯の姿を目の前にと流星のことには触れられなかった。触れてはいけないような気がしたのだ。滯は今、必死に堪えて立っている。飯田はこみ上げてくる思いを押さえつつもどかしさを感じていた。

「先輩、頭にのっけていいですよ。先輩は本当に才能のあるステキな人ですよ。」

そういつて飯田は優しく滯に笑いかけた。

「あ、先輩、5時ですよ。今日はこのまま、片付けて終わりました。久々に残業飯じゃなくてちゃんと晩御飯食べに行きましょうよ。僕がおりますから。」

「えっ…、あ…、でも、今日はもう少し仕事していききたいから…。」

濡がやんわり断わろうとすると飯田がすかさず制した。

「なにいつてるんですか、明日でも間に合いますよ。明日はチアキ先生のところに午後でしょ？僕も手伝いますから大丈夫です。それに先輩このところ働きすぎです。病み上がりの体にむちうちちゃいけません。また倒れたりしたらどうするんですか！」

飯田が少しきつい口調で濡に畳み掛けると頼りなさ気に濡が微笑んだ。

「大丈夫よ。」

その濡の様子に飯田は押さえ込んでいた気持ちが堰を切ってあふれた。

「大丈夫じゃないです！」

飯田が濡の華奢な両肩を大きな手でしっかり掴むとじっと顔を覗きこんだ。

「大丈夫じゃないですよ。あなたは。張り詰めていて今にも切れそう。そんなに自分を追い詰めないで。」

飯田が悲しそうに漑の目をじっと見つめてくる。そして我慢できずに強引に自分の胸に引き寄せて強く抱きしめた。

「ちょっと、飯田くん…?」

一瞬飯田の腕から逃れようとするが、漑はすぐに力を抜いた。飯田のシトラスの香りが鼻に触れる。この香りはどこか心を穏かにしてくれるそんな気がする。

「あなたが、聞くなといえは俺はもう何もいいません。でも、俺はあなたを守ります。だから、俺の言うとおりにしてください。このままではあなたはあなたを保てなくなる。流星先輩のことが好きでもいい。俺はその気持ちごとあなたを受け止めるから。いつも傍で支えますから。あなたの弱い心を隠さないで。」

漑は一瞬ビクツとしたがそのまま押し黙った。飯田はそこに触れないつもりでいたのに押さえきれず思わず口にしてしまったことを悔やむような表情をしていた。しかし、漑がじっとしていたのでそのまま更に強く抱きしめた。飯田は漑の悲しみをすべて覆いつくすかのように大丈夫俺がいるからと心の中で呪文のように繰り返した。飯田はもうしばらく腕の中に漑を抱きしめていたかったが、何かに気付いたかのようにすつと漑の体を離れた。

「さあ、先輩。早く片付けていきましょう。」

そういつていつものさわやかな笑顔で言うと言料を片付け始めた。漑はしばらくの間と惑ったような様子を見せたが、結局、何も言わず、最終版の見本をケースの中に収めはじめた。その様子をちらっと横目で飯田が見たが、やはりそのまま何も言わず片付けに専念した。

会場を片付けたあと、二人はデスクに戻り、少しルーチンワークをこなして5時半に会社を出ることができた。飯田が連れて行ったところは京都風の上品な感じのお店だった。

「へえ、飯田くんシテはめずらしいところにくるのね。」

「えー、酷いな。先輩。僕だって少しはこういうところにもくるんですよ。」

飯田は食欲のない漣にあわせてあっさりしたものが多かったと気を遣って京風料理の店を選んでくれたらしい。飯田らしい、さりげない気遣いに漣は頭があがらない。飯田のやさしさは今の漣の傷ついた心に甘く優しく浸み込んでくる。

飯田が軽口をたたいて漣を笑わせるなどなるべく重い話にならないように気を使ってくれていたせいかな、はじめはあまり箸がすすまなかった漣も、少しずつ料理を受け入れていった。

「美味しい…。」

漣に明るい表情が戻ってきたようだった。飯田はその様子に優しく目を細める。

「よかった。先輩を連れてくから味が確かな所じゃないと思ってここにしてよかった。実は棚橋さんとよく来るんですよ。ここ。」

「へえ、通りで飯田くんにしては渋い好みだと思ったわ。」

漣はクスクス笑う。

「えー。先輩ってば俺を誤解してません？俺結構大人ですよ。」

飯田がふくれっ面ですねた表情をする。こんな飯田とのやりとりを
漣は普段から気に入っている。仲のいい姉弟みたいでつかまいた
くなるのだ。

「瀬川くんと仲よさそうだし、ほら、総務の女の子たちとよく飲み
にいくでしょ？あれ見てると、こんな大人な雰囲気考えられなくて
」

「瀬川と一緒にしないでくださいよ！あいつは特別お子様なんです
から。しかもしつけられてないから野生児なんです。山猿と一緒にで
すから、いつ先輩にかぶりつくかわかりませんからね、半径2メー
トル以内に近づいちゃだめですよ。」

飯田がムキになって必死で訴える。漣はますますクスクス笑った。

「それじゃあ、仕事できないじゃない。瀬川くんも今回のコレクシ
ョンのスポンサーの件とっても頑張ってくれたのよ。もう少し、誉
めてあげようよ。」

「いいんです。あいつは。仕事は仕事。先輩にちょっかいだすやつ
は俺が許さないんです。」

勢いでいってしまったが、せっかく忘れかけてたことを思いださ
せてしまったのではないかと、一瞬危惧したが、思いの外、漣は噴
き出して笑った。

「飯田くん、それじゃあ、高校生みたいじゃない。」

飯田は内心ほっとしながらも間伐いれずに返す。

「ちえっ！先輩、すぐ子供扱いするんだから。」

「そんなことないわよ。普段から頼りにしてますよ。飯田貴俊くん。」

「本当ですかあ？」

「本当よ。あなたは優秀だわ。先に先にと気づいてくれるから仕事しやすいし、仕事も本当に気がきいてるわ。私なんてフォローされてばかり。」

ふっと空気がかわる。飯田が急に真顔になった。

「先輩だからですよ。他の人ではこうはいきません。あなたのことだからなんでもわかるんですよ。」

飯田がいままでとは違うやや低いトーンで澪をじっと見つめて言った。

「飯田くん…。」

澪が不安気な顔を見るとふっと飯田がそれまでの弟、後輩の顔に戻した。

「なーんて顔してるんですか。さ、この天ぷら旨いんですよ。いただきます。」

そう言って飯田は豪快に天ぷらをたிரげていく。澪は、飯田のいつものたべっぷりに安心したのか、クスッと笑うと自分も箸をつけ

た。ちらつとその様子を上目使いで見て、飯田はほっと胸を撫で下ろした。

その後も飯田が漑を気遣っておもしろおかしく同僚などの話をし
て雰囲気盛り上げたので、漑はなんとかほとんどの食事を平らげ
た。久しぶりに味わった気がした。流星とのがあつてからしば
らく食べられずにいたが、昨日今日は大事な仕事もあるし、エネ
ルギーが切れない程度になんとかなく食べ物を押し込めると言う感じ
だった。でも、飯田のおかげでひさびさに美味しく食事ができたし、
気分転換になった。本当に飯田は頼りになる。たすけられてばっか
りだなと漑はふつとあきらめたように笑った。

「なんですか？その笑い。」

飯田が子供がむくれるような表情で聞き返した。

「え？別に。意地を張ってもあなたの前ではどうにもならないわね。
結局助けられちゃうなって思ってる。」

そう言って漑が素直に笑うと飯田はほんの少し驚いた風な表情をし
たが、すぐに笑った。

「そうですよ。隠したって無駄ですから。先輩は俺にはかなわない
んです。あきらめて寄りかかってくださいね。」

漑は飯田の優しい笑顔を見てため息をつくと思わずに頷いた。

「さ、帰りましょう。ゆっくり休んで明日からの仕事に供えましょ
う。」

飯田はいつもの調子で明るく言う会計して店を後にした。
店を出ると飯田がタクシーを呼び止めるために通りにでようとする
のを漕がひきとめた。

「飯田くん、待って。少し歩かない？」

漕がまじめな顔をして言うのでしばらくじっとその瞳を見つめた。

「いいですよ。こんな美人を一人で歩かせると危険ですからね。俺
がどこまでもついていきますよ。では、女王様いずこへ？」

「川沿いを歩いて駅まで。」

「了解。じゃ、参りましょう。」

飯田がにっこり笑ってエスコートする。

川沿いを歩いて駅に向かうコースは実は駅へいくには遠回りである。
なにか話したいのだろうと飯田は察したが、何もいわずに漕を連れ
て歩きだした。川沿いは少し風があり、ほんの少しお酒も入ってい
るせいか、心地よい。漕はいつもよりのんびり歩いて空を仰ぐ。そ
の少し後ろを飯田が見守るように歩いている。都会の街明かりのせ
いか、天気は良くても星がまばらだ。

「先輩。せっかくだから降りませんか。」

この川沿いは散策コースがある。漕が振り向きながら頷いたので、
飯田は漕を連れて土手の階段を降りた。飯田がさりげなく漕の手を
取ると漕は素直に握り返した。川べりは広場のようになっていて舗
装してある。誤って川に落ちたりしないようにと柵が設けられ、と

ころどころベンチが置かれている。遠くのほうに人がちらほら見える程度で、漣と飯田がいるエリアは誰も歩いていなかった。

「気持ちいいね。」

そういつて漣は柵のほうへと近づいた。飯田も後ろからゆっくり漣に近づいた。

「本当ですね。」

二人は川の流れの向こうの都会の夜景に視線をやる。しばらく何も言わず、景色だけを見つめる。静かに川が流れる音に混じって遠くに車やサイレンの音がうっすら聞こえる。

「飯田くん。いろいろ心配かけてごめんなさい。あなたのおかげで何度救われたかわからないわ。あなたがいたからこうしていられるもの。」

「先輩…。」

飯田は薄暗がりに蒼く浮かぶ漣の横顔を見つめた。

「私はもう大丈夫よ。これは強がりではないわ。流星とは未だにちゃんと話が出来てはいないけど、この間の夜の流星を見れば十分過ぎるぐらい流星の気持ちがあったの。流星の心には私がいる。あの悲しみにくれた目を見ればわかる。生まれたときから一緒にいるんだもの。お互いのことは手に取るようにわかるわ。そりゃあ、上条さんの話を聞いたときは気が動転したのは事実よ。あ、あの時も飯田君にはすっかりお世話になってしまったわね。」

漣が飯田に振り返る。飯田はふいに目があったので一瞬どきつとした。その瞳はもう何かを越えてしまったかのように静かで綺麗だった。

「私は流星が好き。私の心の中には唯一流星だけなの。ずっと流星だけを見つめて生きてきたんだもの。今更他の人は考えられない。こんなことがあってはつきりわかったの。ばかよね。もっと早く素直に言えばよかったのに。傷つくのが怖くて逃げていたのよね。この結果は二人してまねいたことなのよ。しかたないわ。未だにうまく受け止めることは出来てないけど、時間とともに受け入れられると思う。もう、この先一緒に居られることはないのかもしれない。でも、私にはやっぱり流星しか考えられないの。」

漣は改まってからだごと飯田に向けた。

「飯田くん、あなたの優しさには本当に感謝してる。こんなによくしてもらって申し訳ないけど、あなたの気持ちには応えられない。あなたにぐらっときそうな時は何度もあったけど、でもやっぱり、私の心の中には流星だけなのよ。ごめんなさい。」

漣はそういって頭を下げた。

「先輩やめてください。頭を上げてくださいよ。」

飯田が漣の肩に手をかけると漣が顔を上げた。

「いいんです。わかってますよ。昼間いったでしょ？流星先輩が好きなあなたごと受け入れるって。」

「そんな、それじゃあ、飯田くんが…。」

「いいんです。もう僕はずっとそんなあなたに思いを寄せていたんですから、今更ですよ。それに……」

飯田が少し躊躇して視線をはずしたが、思い直して顔を上げた。

「あの晩より前に……、実は流星先輩に会ってるんですよ。その流星先輩から頼まれたんです。」

「流星から？」

飯田は滯の問いかけに真顔で頷いた。

「滯を幸せにしてやってってくれて。」

滯は驚いたように目を見開いた。そしてその目には次第に涙がこみ上げてくる。滯はとっさに川の向こうの夜景に視線をやった。堪えきれず涙があふれた。滯の頬に光るものを見たときに飯田は滯を後ろから抱きしめた。そして滯の髪にキスをする。

「あなたの心に流星先輩がいてもいい。俺にあなたを守らせてください。あなたの傍にいたいんです。今までどおり弟みたいな存在でもいい。俺から逃げないで。」

一瞬泣いているかと思うほどの飯田の訴えるような声は初めてだった。その声に動揺して滯は身動きできず、飯田の熱いほどの温もりと息苦しいほどの強い力を黙って受け止めていた。

流星は相変わらず、空きの会議室をみつけては、早朝から深夜までこもる毎日だった。流星の所属する企画部のもとと担当している仕事もあるが、大きく成長したブランドをひとつ独立させるためのプロジェクトも担当しているため、そのプロジェクトも架橋に入り、このところますますハードワークが強いられた。睡眠も食事も不規則で身体の疲労はピークに達している。それでも、頭の中は一瞬たりとも滞ることから離れられない。仕事に没頭できたら…忘れられたなら幸せなのに…。時折、キーボードを打つ手を止めて画面をうつろにながめている。

流星は家にもたまにしか帰っていない。着替えを取りに行く程度だ。家にかえれば、嫌でも滞り出くわしてしまう。それにも増して、自分の部屋にいれば、思いが通じてから二人で過ごした濃密な時がどうしても蘇る。滞りの匂い、甘い声、なめらかな肌の温もり。すぐそばにいるのに触れられない、抱きしめてやりたいのにできないつらさに耐えなくてはならない。少し前までは甘く愛を紡ぐ場所だったのに今の流星には拷問のような場所と化していた。

結局、しかたなく流星は逃げるように会社の比較的近くに住んでいる大学時代の友人の家に転がり込んでいる。その友人もまた大手の証券会社に勤めているので、激務をこなすために帰らない日も多い。たまに帰っても寝に帰るだけのようで、頼んだら事情もきかず、女作る暇もないし、誰も来やしないから好きに使えと言って、快く鍵を渡してくれた。

いつもなら飯田を頼るのだが、今回ばかりはそれはできなかった。飯田は事情を知っているだけに頼れば優しい男だから必ず受け入れてくれる。しかし、今回ばかりは傍で飯田を見ているのもつらいのだ。こんなことがあるまで飯田が滞りを好きだったことは微塵も気がつかなかった。滞りに関心がある男はことごとく排除してきたのに灯

台元暗しだった。流星はふと飯田を思いやった。あいつもこんな気持ちにずっと耐えていたのか。好きなのに、すぐ目の前にいるのに触れたくても触れられないもどかしく苦しい思いに耐えてきたのか。流星は今更ながら、自分がいかに盲目的に滯しか見てこなかったかを思い知らされる。

流星は自嘲気味に笑う。身から出た錆。ずっと自分の気持ちを適当にごまかしてきたツケだ。

甘んじて受けるしかない。滯の悲しむ様子を考えるとすべてを捨ててでも滯のもとに帰って抱きしめてやりたい。

でも、あんな危うい江怜奈を捨ててはいけない。精神が不安定でいつ衝動的に自殺をはかるかわからないのだ。このところ前にも増して起伏が激しい。まるで腫れ物のようだ。しかし、あそこまで追いつめたのは自分のせいだ。滯のために江怜奈の心をもてあそんだ結果だった。しかも腹には自分の子までいる。江怜奈を愛することはできないが、自分が蒔いた種だ。甘んじて受け入れるしかない。しかも2つの命がかかっているのだ。ひとつは江怜奈、もうひとつは自分の子である。自分の後始末は自分でやるしかない。このまま滯を愛する心は閉じ込めて……。しかし、この大切な思いは自分の宝だ。ずっと死ぬまで心の奥底に秘めて誰にも触れさせない。代償にすべてを江怜奈に与えても、この心だけは触れさせない。自分の物だ。そして滯の……。自分にはそれしかない。滯には飯田と言うとことん優しい男がいる。自分じゃきつと幸せにしてやれないのだ。滯には飯田の方が幸せになれる、流星は心の中で呪文のように自分にいい聞かせた。

ふとノックの音がする。はっとして我に帰ると淡々と返事をした。入って来たのは江怜奈だった。上条はしばらくだまって流星の顔を眺める。大きくて少しきつめの目を見開いて強烈にまわりつくような視線を投げてくる。流星は江怜奈のこの視線がどうにも苦手だった。以前付き合っていた頃にはそんな目をしたりはしなかった。このゆがんだ思いを映し出させるようになったのは自分の所為だ。

この美しい女の心を狂わせたのはすべて自分の所為だと流星は自分に言い聞かせる。耐えろ。流星。

「なに？」

「そっけないのね。愛しい女が目の前に現れたっていうのに」

「なに言ってるんだ。ここは会社だぞ」

「あら、あなたがそんなこというなんて思わなかったわ。以前はところかまわず女を口説いてたくせに」

江怜奈は流星から視線をはずさずにニッコリと何か企むように笑って、流星の傍に近づいた。そして流星の白い頬を愛おし気になでると唇を重ねてきた。流星もそれに無条件に応える。江怜奈が深く流星を味わった後に耳の傍で囁いた。

「今夜つきあって」

「今夜は仕事がたまってるんだ」

江怜奈はこめかみをピクツと動かした。

「私の言うことが聞けないの？」

口調には微妙に怒りがこめられていた。流星は一瞬はっとした。江怜奈を怒らせてはいけない。少し躊躇して小さくため息をつくと言ったように言った。

「わかった。8時までは時間をくれないか。それまでにできるだけ

片付けたい」

流星はP Cの画面に目をやったまま、低い声で答えた。

「わかったわ。じゃ、8時に」

そういつて江怜奈は上品に微笑むともう一度流星にキスして去っていった。あとに残った江怜奈のバラの残香が流星をいつまでも足枷のように流星を苦しめた。

21時すぎ、流星と江怜奈はレストラン&バー「バレリアン」のカウンターにいた。ここは江怜奈が通い慣れた店である。流星はカウンターの左肘について自分の頬を支えながら、無表情に琥珀色の液体を傾けているが、時々氷の音が響くだけで、全く声を発する様子もなかった。やや青白く端正な顔は感情等持ち合わせてないかのようどこか一点に視線をやったまま動かない。右隣の江怜奈はそんな流星に少し甘えたようにしなだれかかる。傍から見て明らかに江怜奈の空気と流星の空気は違っていた。それでも江怜奈は全くそんなことを気にかける様子もなく、1人話し続ける。流星はと言えば、どこか一点を見つめたまま顔色を変えずに黙って江怜奈を受け入れている。

「ねえ、結婚式はフランジュパニ大聖堂にしない？あなたと私なら似合うわ。」

フランジュパニ大聖堂は多くのセレブが結婚式を挙げたがる日本でも有名な教会である。

「神の前で貴方と私、永遠の愛を誓うのよ。ステキじゃない？たくさん純白の花に囲まれて大勢の人に祝福されて…、一生に1回だものうんとステキにしたいわ。あ、そうそう、ウェディングドレスも見にいかなくちゃね。ドレスはマキ江藤に決めてるの。子供の頃、見てすごくあこがれたのよ。マキはブライダルでは世界でも一目置かれるセレブの憧れのブランドよ。」

流星は一瞬こめかみがひきあがった様子を見せたが、すぐにもとの感情をもちあわせてない美しい人形のような表情に戻した。それで

も江怜奈ははしゃぐように話をしている。しかし、一見楽しそうに話をしているが、江怜奈の目はわらってなかった。話せば話すほど、悲しそうにすらみえる。一方流星はといえば、無言で話を聞いていて、一切江怜奈の顔を見ない。無表情な中にもどこか遠くをみてその瞳は寂しそうに曇っているようである。

しばらくして流星が仕事にもどるといって席を立った。江怜奈もあわせて立ち上がると流星の腕に絡みついた。

「そこまで送るわ。いいでしょう？」

上目遣いで微笑んだ。しかし、江怜奈のまわりつくような視線は流星に有無を言わせなかった。この目は危うい。江怜奈はいつ逆上するかわからない。その危険をにおわせるのだ。流星は仕方なく頷くとチェックして重い足どりで江怜奈を連れて店をあとにした。

江怜奈と流星が帰っていく姿をじっとバーテンが見ている。その様子に他のバーテンから声がかかる。

「拓海、どうしたんだ」

「いや、なんでもない」

そういうと何もなかったように拓海と呼ばれたバーテンは江怜奈と流星の飲みかけのグラスを片付けた。

しばらくして江怜奈が再び戻ってきた。顔は真顔だったが、どうにも悲しそうで、拓海は入ってきた時、一瞬、江怜奈が泣いているのかとさえ思った。拓海はそんな江怜奈から目が離せず、江怜奈に注目していた。江怜奈がその視線に気づいてか、ふと拓海を見返す。拓海はしばらくじっと視線を合わせていたが、しばらくするとニコリともせずには挨拶程度に平然と軽く会釈をした。その時、江怜奈が

一瞬何かを訴えかける繾るような目をした。それでも、なにものかあったかのように拓海はがグラスを取り出すために背中を向けたので江怜奈はあきらめたように拓海の正面の席に座った。拓海は背中で重い雰囲気をかみ締めながらも、平然といつものレシピでアール・アガサをシェークする。拓海の迷いのないきびきびしながらも優雅で隙のない動きを江怜奈も無言でじっと見つめた。江怜奈の目の前で氷の音とともにグラスにオレンジのカクテルが注がれる。最後の一滴を振り出すとシェーカーをすっと引いた。

「あの人は貴女に似合わない。」

江怜奈ははっとして顔を上げる。そこには真っ黒で鋭い辛辣な瞳があった。江怜奈は細く美しい眉を片側吊り上げる。

「なんですって？」

江怜奈は急に不機嫌さをあらわにして、拓海に攻撃的な瞳を向ける。

「貴方には関係ないでしょう？」

江怜奈は拓海を睨みつけながらも少し震える怒った口調で言葉を投げた。拓海はそれには応えず、じっと江怜奈を夜の闇のような黒い瞳で見つめた。その吸い込まれそうなほど強い視線に江怜奈は思わず息を呑む。

「貴女はあの人を愛してない。」

江怜奈は一瞬顔をこわばらせた。心臓を一突きにされたかと思うほど、一瞬心臓の動きがとまった。そして次の瞬間、心臓が飛び出しそうなくらい怒涛のように激しく打ちつけてくる。思わず、江怜奈

に注がれたまっすぐ向けられる漆黒のような瞳から目を逸らした。

「これ以上自分を偽らないほうがいい。」

江怜奈は体中の血が一気に逆流したように全身に戦慄が走った。

ガシャーン！

江怜奈は思わずグラスを思いっきり払った。その瞬間、周りが一斉に江怜奈を見る。拓海は無言でカウンターからでてそれを片付け始める。

「なんなのよ、あなた！私の何がわかるっていうのよ！」

江怜奈はそう叫ぶと走って店から出て行った。拓海は片付ける手をとめて江怜奈が出て行った扉をじっと眺めていた。

江怜奈は店を飛び出すとそこは歓楽に酔いしれた人達が集う街だった。週末だからか、通りには人が多く、酔っ払って陽気な声を上げる若者や店を品定めしているサラリーマン、既に出来上がって上機嫌で通りを歩く男女でにぎわっていた。しかし、江怜奈はそんな街の様子に目もくれず、走っていく。途中誰かにぶつかって、罵声をあびせられても耳に入らないのか振り向きもせずになにかに取り憑かれたように一心に細いヒールで転びそうな程の勢いで走った。

なんなのよ、あの男！

なんだっていうのよ。

ちよっという男だと思って鼻屑にしてやれば偉そうに。

なんなのよ、あの目！

江怜奈は拓海の深く漆黒の瞳を思い出していた。江怜奈の心臓を一

突きするようなあの目。

あの男の目を思い出すと途端に江怜奈の心拍数があがる。心が痛い。なんにもかも見透かすようで怖い。瞬間そう思った。

あの人は貴女に似合わない……。

拓海の言葉が何度も江怜奈の頭の中で空回りする。

私が春日くんを愛してないですって？

冗談じゃない！

私には春日君しかないわ。愛してるのよ。自分に嘘なんてついていないわ。

江怜奈は自分にそう言い聞かせて、週末の人々の開放感を盛り上げるきらびやかな光がこぼれる通りの真ん中で立ち止まると、息が荒く肩で呼吸をしながらじっと地面を凝視した。

何やってるの私？

江怜奈は一瞬しゃがんで頭をかかえた。まわりは江怜奈に注目している。それでも江怜奈には辺りの様子は目に入っていない様子で、自分の思いをかき消すように頭を横に何度か振ると、すつくと立ち上がり、車道へと走った。ちょうどそこへスローに流して来たタクシーを停め、急いで乗り込んだ。江怜奈は行き先をつけるとタクシーの座席の隅で寒くもないのに凍えるように体をまるめて自分で自分をじっと抱きしめた。

21#

スタジオ・チアキ AM11:00

「先生、そろそろ倉元さんいらっしゃる頃ですよ」

スタジオ・チアキの若いスタッフが、奥のガラス張りのミーティングルームに資料を広げ、スケッチブックを広げて難しそうな顔をしたチアキに声をかけた。

「え？ ああ、聡^{さと}ちゃんか。もうそんな時間？ わかったわ。きりのいいところで切り上げるから倉元が来たらスペシャルコーヒーでもてなしてお待ちいただいて」

そういつてチアキはかけていたあめ色の縁のスクエア型のメガネをはずすと聡ちゃんと呼ばれる若いスタッフに冗談っぽく返事を返した。

「はい。わかりました」

スタッフはやや吹きそうになりながらも嬉しそうに返事をする。どうせ、煮詰まっているので今切り上げてもいいのだが、倉元はこのスタジオでも人気者で、周りの若いスタッフの女の子たちにとっては倉元とのわずかな談笑がとても至福の時らしいので、チアキはいつもわざと倉元を待たせる。実はこれはスタッフサービスの一環なのだ。毎回スタッフ達とひとしきり話をして盛り上がった頃にチアキは腰を上げる。これが日常だった。

チアキはもう一度書き直そうとペンをとるが、すぐに描いていた手を止めてスケッチブックを持ち上げると、少し遠くに退いて眺め

る。そして、ふうつと深くため息をついたかと思うと、ふと顔を上げた。すると、ガラス越しに倉元の姿が見えた。スタッフの女の子達に囲まれて何やら楽しげに談笑している。チアキは冷めたコーヒーを飲みながら、時折その姿を眺めては一向に進まない描きかけのデッサンを見つめてもう一度ため息をついた。

何が問題なの？チアキ。

チアキの頭の中には眠っている滯を愛おしそうに見つめる倉元の姿がフラッシュバックしてくる。チアキは描きかけのデッサンの上で止まっていたペンに当たるかのように荒っぽくデッサンをぐちゃぐちゃと塗りつぶした。

もう、何だって言うの！倉元のまわりにはいつだって女の影があったじゃない！今更なに？チアキ！お前は倉元の親友だろう？変な気を起こすんじゃない！

そう言い聞かせると塗りつぶしたデッサンの紙を大胆にやぶって自分のもやもやした気持ちを払拭するかのようにクシャッと握りつぶした。その姿を一瞬視界に捉えた倉元は苦笑いした。

「なんだかお宅の先生、今日は荒れてるね。デッサンすすんでないの？」

「ええ、倉元さんの仕事じゃないんですけどね、ただ、めずらしくデザイナーが気に入らないらしいんですよ。世界で有名なデザイナーだからふつうだったら飛びつく仕事なんでしょうけど、先生、どうにも気に入らないらしくて……。以前多大にお世話になった人に絡むんで気が進まないけど、断われないらしいんですよ」

近くにいたスタッフの小野田聡美おのださとしみがややため息交じりで応えた。

「ひょっとして武居光洋タケイミツヒロかい？」

「えっ？ 倉元さん、ご存知なんですか？」

「ああ、知ってるも何も俺も彼の仕事何度かしたことがあるからね」

「そうなんですか？ チアキ先生が嫌う程なんかかわったところでもある方なんですか？」

「えっ…？ 変わって…、いや、ある意味かわってるかもしれないな。今は海外でも名の通ったデザイナーだが、高校が一緒でね、俺達。チアキはあの通り美人だろ？ おっかけまわされてたのさ」

そういうと倉元はふくみ笑いをした。

「ちよっと！ 倉元！ 余計なこというんじゃないわよ」

倉元が声のするほうにキャスターのついた椅子ごと振り向いた。

「やあ、チアキ。ご機嫌斜めだね」

倉元は社交辞令によよそ行きの笑顔でニツコリと笑った。

「ちよっと、なに、そのよそ行きの笑顔は。気持ち悪いわ。聡ちゃん、コーヒー私にも入れてくれる？」

そう言ってチアキは空になったカップをスタッフに差し出した。

「はい。うんと濃いのがいいですね。先生」

聡美にそう念を押されてチアキは「はいはい、それで」と気のない返事を返す。その様子を見て倉元はまわりのほかのスタッフたちに肩をすくめてややため息をついた。

「倉元！仕事があるんでしょ？午後から滯ちゃんがやってくるわ。早くかたづけてランチにいきましょう。延長したら、コンビニ飯で我慢してもらうわ」

チアキは倉元を一喝すると、倉元の向かいの空いた席にどかっと腰掛けた。

「荒れてるな。チアキ。そんなにみっちゃんを毛嫌いしなくたっていいだろ？今じゃ押しも押されぬ世界的デザイナーだぞ？」

「わかってるわよ。デザイン自体は嫌いじゃないけど、どうしてもあいつの顔が浮かんできてイメージがこわれるのよね。ああ、早くこの仕事終わらせたいわ。まったく」

クスクス倉元がわらう。

「相変わらずだな、そのみっちゃん嫌い」

「大きなお世話よ」

チアキはフンと憂鬱そうににため息をつく。と聡美が持ってきたコーヒ―をスタッフのトレイから取り上げるとゴクリと飲んだ。

「アツっ！」

「あ、先生大丈夫ですか？」

倉元はさらに笑い転げた。

「倉元っ！」

「はいはい」

倉元はチアキに怒鳴られてもまだわらっている。

「コンビニ飯決定！」

「えっそりゃないって、チアキ！せっかくいいところ予約しておいたのに」

「じゃ、あんたのおごり」

「はいはい」

「商談成立ね、さ、はいとこ仕事の話すませましょ」

「了解」

そういつてバックから資料を出す。倉元はそれまでのリラックスモードの顔からビジネスモードの顔にかわった。それからしばらく熱く二人でバトルして折り合いをつけると、チアキが立ち上がった。

「OKじゃ、そういうことでいきましょう。まっって、上着とってくるわ」

そう倉元に言い残すとチアキは奥のミーティングルームに引っ込んだ。

「さすがですね。仕事となるとチアキ先生も倉元さんも別人のようですね」

聡美がコーヒーマグカップをかたづけに来て倉元に話しかけた。

「ほんと、倉元さんってチアキ先生と仲いんですね。なんでも知ってるみたい」

「ああ、付き合い古いからね」

「高校時代からですか？」

「そうだね、高校に入学したときに同じクラスだったんだ。女のくせにえらくさばけててなんだか気があってね、仕事も仕事だし、それで今に至るんだ」

「へえ、長いですね、でも、恋人になったりしないんですか？すごくお似合いにみえるんですけど。私達よく噂してるんですよ」

「ああ、よく言われるけどね、チアキとはなんにもないよ。親友のようなほら、会社なら同期の仲間のようなそんな感じ……」

ガタンっ！

大きな物音に倉元とスタッフが振り返ると、そこには床に突っ伏していた。

「なにやってるんですか？先生。大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないわよ、誰？こんなところに荷物置いたの！足引っ掛けたじゃない！もう！」

チアキは悔しそうにその荷物を手で平手打ちする。

「先生ですよ。ほら、昨日。頼まれた本、どこに置きましたようかっていったらすぐに使うからとりあえず入り口の脇に置いてって……」

聡美の言葉にチアキは床に突っ伏したまま、悔しそうに絶句していた。そして仕方なく立ち上がろうとするとずっと目の前に倉元の大きな手が差し出された。その手の先を見ると倉元が心配そうにチアキに視線を向けてくる。

「そそっかしいな。慌てなくても俺は逃げないよ。俺のおごりだろ？ほら、立てよ。チアキ」

「……ふんっ。当たり前よ」

チアキはバツが悪そうに真っ赤な顔をして倉元と視線を合わせないようにすると差し出された手を取り、立ち上がる。

「ほら、バッグ」

「余計なお世話よ」

そういつて倉元からバッグをもぎ取るとスタスタ歩いてスタジオを出て行ってしまった。

「だいぶ動揺してるみたいですけど、よっぽど詰まってたんでしょうか。先生」

「さあ？いつもは理路整然としてソツがないけど、時々ね、あんな風にあぶなっかしい時があるんだ。どんなに有名なアーチストになってもそんなところはかわらないな」

倉元は懐かしそうに目を細める。

「倉元っ！いつまで待たせる気？早くしなさいよ！」

「怒ってる怒ってる。倉元さん、先生のご機嫌取りよろしくお願ひしますね。」

倉元が苦笑する。

「倉元っ！」

「はいはい、今行くよ」

ドアの外に聞こえるように大きな声で叫ぶ。

「じゃ、行ってきます」

そういつて微笑む倉元に聡美はよろしくお願ひしますと丁寧に頭を下げた。倉元はチラッとそれを視界に捉えると、軽いため息をついてすぐにドアの外で待ちぼうけしているチアキの元に急いだ。その姿を見送った聡美は振り向き様に近くにいたひとつ先輩のスタッフに話しかけた。

「お似合いだと思うのにな。チアキ先生は絶対貴方についていきま
すタイプじゃないから、よっぽど大人な人じゃないとだめなんだろ
うな」

「あら、じゃあ、倉元さんぴったりじゃない。あんな子供っぽいと
ころ倉元さんがいるときしかみられないでしょ？倉元さんだってな
んだカンダってチアキ先生のわがまま聞いてあげてるし。結構無
理言われてもちっともいやそうじゃないしね」

「そう言えばそうですね。ああ倉元さんにきまった人ができるのは
許せないけど、チアキ先生なら許しちゃう！」

聡美が手を組んで祈るような仕草をしていると、そこへチーフの三
谷が割り込んできた。

「ほら、いつまでも噂話で盛り上がってないで一番の人、休憩はい
って」

「はい」

聡美と先輩スタッフが同時に返事をして自分のデスクに戻っていっ
た。

「ほんとにもう、人の噂だけは一人前なんだから。」

三谷は軽くため息をついてぼやくようにつぶやくと自分もデスクに
戻っていった。

22#

「へえ、いいじゃない。ここ」

「だろ？前に取材で紹介された店なんだ」

そこは和食の創作料理のお店で店内は広いのだろうけれど、変則したつくりで各エリアごとに雰囲気を変えてある。倉元とチアキは店の奥に通されて縁側から庭が眺められる離れ風の個室に案内された。

「なんだか京都の山奥にある離れの宿のようだわ。へえ…、ステキね、このお庭も」

「ああ、ここは個室もいくつかあるんだけど、全部テーマによって部屋の造りや印象が違うんだ」

「失礼します」

和装のいでたちで店のスタッフが次々と料理を運んでくる。

「わあ…。ステキね。美味しそう。倉元のおごりなんてラッキーだわ」

「チアキにはいつも仕事のわがまま聞いてもらってるからね、今注目のメイクアップアーティストにこれぐらいお安いご用さ」

「ふふふ。倉元に言われるとくすぐったいわね」

チアキはさっそく料理に手をつけると味にも満足した様子で深く頷

いた。

「いいわね…、美味しいわ。東京コレクションのときに来日する海外の関係者を連れてくるにはいいわね。私もチェックしておこ。ほんと、倉元情報通ね。よく使わせていただいてるわ。さも、私が見つけてきたような振りして」

そう言って、さっきまで気が立っていたチアキとは別人のようにちやめつけたっぷりの笑顔を見せる。倉元がふっと微笑んだ。

「何よ。また…」

「いや、やっと機嫌直ったなと思って」

「失礼ね。べつに私は機嫌を悪くしてないわよ。さっきはミツヒロの仕事してたからだわ」

本当は倉元のことが頭にちらついて気が立ってたのだが、実際ミツヒロの仕事は気に入らないのでなかなか乗れずに行き詰ってたのは事実だった。

「やれやれ、みっちゃんも嫌われたもんだな」

「しかたないでしょ？あいつ苦手なんだもん」

「おもむろに口説くからかい？」

「フランスに行ったら似た男がたくさんいたわ。詩の様にくさい言葉で語るのよ。叙情的に。それでわかったの。ミツヒロはフランス男なんだって」

「ラテン男は我慢ができてフランス男は我慢がならないって？」

倉元は笑いがおさまらない。

「笑い事じゃないのよ、もう…」

チアキはむっとして頬をふくらませる。普段の仕事の顔では絶対に見せない顔である。子供みたいにすねたり、はしゃいだりは、棚橋か倉元の前でしかみせない。倉元はそんなチアキが昔から気に入っていた。

「ごめん、ごめん」

倉元はまだ爆笑している。

「笑いすぎっ！」

「はいはい。で、ラテン男の棚橋さんなら良かったわけだ」

ふいに棚橋の話がでて、笑っていたチアキの顔がふっと元に戻った。

「ああ、棚橋？ そうね、彼は今でも仲がいいぐらいだから上出来だったわ」

「上出来？ そういえば、棚橋さんとのことちゃんと聞いたことなかったな。そんな評価を出しといてなぜ別れたんだい？」

チアキは深くため息をつくとき少し間を空けてややトーンの低い声で語りだした。

「心苦しかったのよ。私はこの通り、いい仕事があれば日本中だけじゃなくて海外も平気で電話1本でも出て行ってしまう、風来坊みたいな女よ。彼はそんな私にいつも笑ってたわ。出来すぎだったのよ。はじめはいつ帰っても同じように愛情を注いでくれる棚橋に素直に喜べたわ。でもね、だんだんそれがつらくなってきたの。彼は我慢してるんじゃないかとかきつと寂しい思いをしてるに違いないとか。なのに、仕事となると彼のことを微塵も思い出さずに仕事に没頭する自分がいるの。だんだんそれが負荷になっていつか重い足枷のようになっていったのね」

「そうか…。確かに棚橋さんは包容力のある大人だよな。それでも、残念だね。俺にはお似合いにうつってたのにな。棚橋さんは一度もチアキのことで何かいったことはなかったよ。むしろ、今でも飲むとよく自慢してるよ。チアキは最高の女だって」

チアキは棚橋との離婚のことを気にしているわけではないが、倉元にお似合いといわれるとチクチクと心に突き刺さるようで複雑な心境だった。

「やめてよ。もう、棚橋の話は。棚橋とは離婚してからの方が彼のことがよくわかる気がするのよね。だから親友でいいのよ。最近じゃ、漣ちゃんに失恋したってぼやいてたわ」

「えっ？漣さん？」

「ああ、ひそかにご執心だったみたいよ。スタッフ曰く、漣ちゃんとの打ち合わせのときはデートにでかけるみたい嬉しそうにでかけていくんですって」

倉元が驚いた顔をして絶句している

「やあね、なに動揺してるのよ。棚橋のは夢見るオジサマで一喜一憂して楽しんでただけよ。ほら、アイドルにご執心なのと一緒。飯田君の話聞きつつ仕事とをともにしてたらファンになっちゃったみたいよ。ほんと滯ちゃんていい男達をみんな釘付けにしちゃうのね」

倉元が急に寡黙になった。

「滯さん、大丈夫かな」

倉元の沈んだ声にチアキもずっと真顔になる。

「昨日は滯ちゃん、随分雰囲気がちがってたわね。今は仕事で自分をささえてるって感じだった。」

倉元はふと何かを回想しているかのようにこじんまりとした中庭に視線を落とした。

「ああ。結局俺は気の利いた声のひとつもかけてやれなかったよ」

倉元が寂しそうにつぶやいたのでチアキはすかさずフォローする。

「仕方ないんじゃない？今の滯ちゃんは自分を支えるので精一杯だから、他の人の言葉を受け入れる余裕すらないのよ」

倉元ががっかりしたようにため息をついた。

「他の人…か。やっぱり俺は滯さんにとっては他人なんだよな。いっつも遠慮がある」

「倉元…？」

チアキが心配と困惑の顔で倉元をみつめた。チアキは今まで女のことでこんな風に意気消沈している倉元を見るのははじめてだった。今のチアキにとっては内臓をきゅっと締め上げられたような苦い思いに駆られる。

「飯田には頼っても俺には…」

それでもチアキは平然を装い話を続けた。

「飯田君？ 四六時中一緒にいるんだもの、兄弟みたいな感じなのは仕方ないわね。でも、飯田君もそれはそれで気にしてるみたいよ。棚橋がいったわ。それでも飯田君は弟でもいいから滯ちちゃんのそばにいて支えてあげたいんだって」

「そうか…。飯田が羨ましいな」

そういつて倉元がもう一度ため息をつくときチアキが居住まいを正して少し体を乗り出すようにして倉元に語りかけた。

「なにいつてるの？ 飯田君は滯ちちゃんの憧れの人になってる倉元がうらやましいらしいわよ。どうしたら大人の魅力がだせるのかって真剣に食い下がられて困ったって笑ってたもの。二人とも滯ちゃんにとっては存在の仕方が違うけど同じ距離にいてることよ。倉元は倉元で倉元の大人な魅力でじんわりいったら？ 今の滯ちゃんには性急に攻め立てるのは良くないしね。太陽のように見守ってあげることが大事なんじゃない？」

チアキは思わずはっとして、乗り出した体を引いておとなしく座り直す。勢いで口から出てしまった言葉に自己嫌悪しつつ、大きなため息をついた。

「ああ、なんでこんな話してるんだろ？ステキなお店に美味しいお料理が台無しになるわ。さ、美味しくいただきましよ」

チアキがそういって自分の皿から鶏の燻り焼きを一切れとると口へ放りこむ。倉元はそんなチアキを見てクスツと笑った。

「なんだか、結局最後は俺が励まされるんだよな」

口をもごもごさせながらもチアキは上目遣いで倉元を見てにやっと笑って見せた。

「ふふん。私のありがたみを感じるでしょ？」

「そうだな。チアキといると元気がでるよ。ありがとう」

「えっ？あっ！」

チアキはそういって笑う倉元の笑顔にドキッとして手に取ろうとした小鉢を滑らせて落としてしまった。

「ぷっ！本当にチアキは楽しませてくれるね。君といると悩みなんて吹っ飛ぶよ。あ、さわらないで、今人を呼ぶから」

そういって倉元は部屋のインターホンを押す。

「ああ、すみません、お料理そそうしてしまつて…。はい。はい。」

あ、それから食後にコーヒーもコーヒーも追加していただけますか。
はい。はい、お願いします」

「ほんと気がきくわね。女やってるのが馬鹿らしくなっちゃうぐらい。だから倉元はもてるのね。顔やスタイルのよさをさっぴいても中身が絶品のイケメンなのにね。なかなか売れない」

「ひどいな、売れないは余分だろ。チアキ」

チアキは茶目っ気たっぷり到下をだしてウインクした。

23#

午後、倉元とチアキがスタジオに戻ってくると、スタッフが集まっていた。てなによりにぎやかに盛り上がっていた。

「なに、楽しそうね」

「あ、おかえりなさい。先生、倉元さん。お邪魔してます」

スタッフの中心にいた漣が立ち上がって丁寧にあいさつした。

「ああ、漣ちゃん、早いわね。待たせたんじゃない？」

「いえ、さっき来たところですよ」

「先生、漣さんにこれいただいたんです」

聡美がオレンジと茶色の蠟引きのペーパーバックを持ち上げて見せた。

「あら？これ…これ、メゾン・ド・ショコラじゃない！まあ嬉しい！ありがとうございます。私チョコには目がないのよ」

チアキは聡美からペーパーバックを受け取ると中を覗きこんでニッコリした。

「えへ、そう倉元さんから以前うかがってて…。ちょっと時間あったんで寄ってきたんです」

「もう、滞ちゃん気をつかわなくってもいいのに……。高かったでしょう？」

「そんな、あんなにお世話になっておいてこれぐらいはさせていただかないと」

「かえってもうしわけなくなっちゃうわね。ま、でも、せっかくのご好意だから遠慮なくいただいとくわ！ありがとう！じゃ、打ち合わせのあとでコーヒーマイクにみんなでいただきますしよう！」

「きゃー、うれしい！これすごく人気で並ぶんですよ。高級だし。前にジンジャーの入ったマカロンをいただいたことあるんですけど、めっちゃめっちゃ美味しくて……。感激です。滞さんありがとうございます。先生、じゃ、あとでうんと美味しいコーヒーいれますから期待してくださいね。特別な人しかださないコーヒーのために新しくいい豆をゲットしてきたんです」

「なに、その特別な人にしかださないコーヒーって」

「ふふふ。先生の顔色ひとつで美味しいコーヒーが飲めるかどうかきまるんですよ」

聡美は得意げな顔でカミングアウトし始める。

「なんだい？そりゃ？聞き捨てならないな」

倉元が関心を示して聡美に問いかけた。

「ええ、実はうちにはルールがあって、あ、これ、スタッフが勝手につくったルールですよ。普通く気が進まなさそうな人達へは普通

のレギュラーコーヒー、私達も普段のんでますけどね。先生のお気に入りの特別なお客様の場合はスペシャルなスタッフセレクトコーヒーになるんです。いまのところ棚橋さんと倉元さんと澤さんだけですけど」

「あなたたち…ねえ…」

チアキが絶句している。倉元は笑い転げて苦しそうに言った。

「ああ、だから…か…。ここのコーヒー上等なのだすなあっていつも思ってたんだよ」

「でしょ？特に倉元さんには私達の愛情こめて入れますから特別なはずです」

「えっ？はあ…。」

聡美が元気よく言い放ったのでさすがの倉元もたじたじになっている。

「ちょっと、聡ちゃんってば…」

聡美はチアキの言葉もさえぎるように話を続けた。

「だって、先生がいつも倉元にはスペシャルなコーヒーをだしてお待ちいただいてっていうじゃないですか」

「あのねえ…聡ちゃん…」

今度は倉元がチアキの困った様子に笑い転げている。

「倉元っ！あんた笑いすぎっ！」

ふとみると漣も笑っている。

「ごめんなさいね、漣ちゃん、はずかしいわ。ほんとに」

「いいえ、楽しいですね、みなさん。職場が明るくて羨ましいですよ」

「ああ、ほんと、ここはいつも明るいからいいよな」

倉元も後続く。

「さあ、いつまでも馬鹿いってないで、打ちあわせ、打ち合わせ」

「こっちのミーティングルームを空けるわ。どうせ、ミツヒロの仕事はもう少し先だし、今日はもう進まない気がするから」

「みっちゃんかわいそ」

倉元がぼそっとつぶやくとすかさずチアキが振り向いてキッと睨みつける。

「倉元っ！」

「しまった、機嫌損ねたか」

倉元が漣を見て舌を出して方をすくめる。

「ごちゃごちゃいってないで、早く来なさい！」

どうやらチアキは地獄耳のようである。

「はいはい。やれやれ、ここ女王様は今日はお天気屋だね」

そういつて倉元は濡にウインクすると親指でミーティングルームを指し示し、行こうと合図したので濡もクスクス笑いながら頷いた。

ミーティングルームにはいるとチアキは広げていた資料とスケッチブックやメイク品をがさがさと片付けてスペースを空けた。

「どうぞ、座って。濡ちゃん。あ、倉元ちょっとその棚の中のグリーンリンの箱とつてくれる？」

倉元はなれた手つきで棚の扉を開けると迷わずグリーングの箱を取り出してきた。

「ああ、まって、さっきのファイルもいるんじゃないのか？」

チアキが忘れていたとばかりの表情で倉元の問いかけに答えた。

「ああ、そう言えばそうだった。どこにおいたっけ？」

「さっき出かける前にデスクに置いてたよ。とってくるよ」

倉元はすばやく部屋を出て行った。

「なんか、倉元さんってチアキ先生の有能な秘書っていうか、お母さんみたいですわね」

「ええっ？なんてことを…」

チアキが噴出して笑う。

「まあ、確かに私は大雑把だからね、それに比べ奴は完璧なエスコートができるほどよく気が利く男だわよね」

チアキがさらっと面白そうに話すと滯も頷いて軽いため息をつく。

「そうですね。時々完璧すぎて恐縮しちゃうほど」

チアキは滯の表情を見て察するように寂しそうに微笑んだ。

「そうか…、恐縮しちゃうか…。倉元が聞いたらがっかりするだろうな…」

「そんなつもりでいったんじゃ…」

「わかってるわ。倉元はね、貴方が頼ってくれないことに寂しさを感じてるみたいよ。飯田君とはどうなの？」

「はあ…それが…」

そう滯が口をひらきかけた時、ドアをノックする音にさえぎられてしまった。

コンコン

「はい」

開かれたドアから倉元が顔を出す。

「これだったよな」

「ご名答。ほんとよく見てるわね。関心するわ。」

「長年の付き合いだからね、チアキが忘れん坊なことは承知してるよ。」

「ちょっと、失礼ね。」

チアキが頬を膨らまして子供見たいな表情をみせたので漣がクスクス笑う。

「なんか、幼馴染みたい。」

「えっ？」

漣の言葉に一瞬二人は固まった。その空気を感じとったのか、漣も自分が何気なく行ってしまった言葉にはっとする。

「えっ…？ああ、そう言えば私もそうだったな…」

そういうと漣は寂しげな遠い目をした。チアキは漣の沈んだ空気を察してすかさず声をかけた。

「漣ちゃん、元気だして。時間が解決するわよ。今はあまり考えないで…」

滯はその言葉に頷きながら床に視線を落とした。

「すみません、だめですネエ、私。仕事するときには考えないようにしてるんですけど、つい、チアキ先生や倉元さんの前だと甘えてしまつて…」

チアキがふっと優しく微笑んだ。

「いいのよ。うちで気を張らなくても。私は仕事だけのつもりで滯ちゃんにつきあつてゐるわけじゃないわ。とっくの昔に友人と思つてゐるのよ。何かあればなんでも言つて頂戴。倉元も私も滯ちゃんを支えてあげたいって思つてゐるのよ」

「ありがとうございます。もしかして飯田君に聞いたんですか？私のこと。」

チアキはため息をつくとややためらつたものの申し訳なさそうに頷いた。

「ええ、聞いたわ。ごめんなさい。ちょっと飯田君脅してね。滯ちゃんの気持ちはわからないでもないわ。なんでこう、好きな人とはうまくいかないのかしらね」

チアキが白状したついでにばやくようにいったのが、あまりにも実感がこもっているように感じたため、倉元が一瞬驚いたようにチアキを見た。瞬間、ぱっと目があつたが、チアキはバツがわるそうにさつと逸らした。

「滯ちゃん、長い人生だもの、いろいろあるわ。わたしもね、あんなに好きだった棚橋と今は親友が心地いいのよ。人生わからないも

のね。今でもよく飲みに行くのよ。互いに一緒にいた時間があることが安心なのか、なんだか時々家族みたいを感じるわ。今でも彼のこと好きだけど、あの頃とはちがうはね。もう一度恋愛関係にもどりたいとは思わないもの。不思議よね。今思えばその頃、今みたいな関係は想像もつかなかったわ」

チアキは懐かしそうに目を細める。倉元もだまってじっとチアキを見つめた。

「先生、ありがとうございます。そうですね。きつともっとうまく受けとめられるときがきますよね。なんだか。いつも先生には励まされっぱなしだな。ここへくるとがんばる気持ちがわいてきますよ」

「そうなんだ。チアキには俺もいつも励まされてるよ」

倉元が滯に声をかけつつチアキに微笑みながら視線をやった。

「何よ、二人して。さ、仕事かたつけてしまいましょ」

チアキは照れくさそうに笑うと、滯も倉元もほっとした表情で笑いながら頷いた。

24#

「あ、先輩、おかえりなさい」

飯田がP Cのキーボードを打つ手を止めて笑顔を向ける。

「ただいま、飯田君。はい、おみやげ」

「えっ？あ…これ、メゾン・ド・ショコラじゃないですか！うわあ
」

漣はおもむろに喜ぶ飯田を見てクスクス笑う。

「飯田君、やっぱり知ってるのね。さすが、社内のアイドルだわ」

「えっ？そんな、僕はたまたまチョコが好きなんですってば」

飯田があわてて言い訳するのをにんまり笑って漣はさらにおもしろそうに飯田を構う。

「へえ、飯田君なら昔からモテたでしょう？たくさんチョコもらってたんでしょ？」

「先輩、人聞きの悪いこといわないてくださいよ。俺はそんなモテませんってば」

「そうかしら？今年も君のデスクはチョコのプレゼントで一杯だったじゃない？」

「あ…あれは…。その…。みんな義理チョコですから」

「なに真面目に否定するんだい？飯田君」

「えっ？あ、木村マネージャー」

木村が嬉しそうにニコニコして二人の会話に割って入った。

「まるで浮気を指摘されてあわててる男みたいだったぞ」

木村も楽しそうに飯田を構う。

「なっ！何いってるんですか！マネージャー」

「ははは。君をからかうとおもしろいな。どれ、美味しそうだな。それを肴に打ち合わせしようか」

滯がクスクス笑いながら頷いた。

「ちえっ、酷いなあ…」

飯田はむくれた顔をしつつも社内ネットで空いている会議室の検索をする。しかし、いつも使う会議室はどこも空いておらず、唯一空いているのは企画室の中にある簡易なミーティングルームのみだった。

「ちえ、ここだけか…」

飯田の頭にはチラっと流星の顔が思い浮かんだ。企画部は流星のいる部署である。今日に限って流星は会議室にこもっている様子がない。

い。さつき見た一覧には名前がなかった。何かの会議中で席を空けていることを願いつつ、予約を入れた。そして電話の受話器をとると慣れた手つきでプッシュボタン4桁を押し、内線で社内の喫茶コーナーにコーヒーを注文した。

「企画室のミーティングルームしか開いていませんでした。でも、そこも2時間限定ですが」

一瞬、漣の顔がこわばった。飯田はそれに気付いたが、木村の前なので気付かないフリをした。

「ああ、いいよ。きつと一時間ぐらいかな。その後、僕は別件で出かけるから」

木村はいつものスマイルで気軽に応じると、漣としていたチョコレート談義に話を戻した。漣も今日は幾分リラックスしているようだ。やはり、クノチアキのところについてくると漣はいつもひとときわかるい。先生にはかなわないなと軽いため息をついた瞬間、倉元の顔が浮かんでチクツと飯田の心が痛んだ。

『ああ、倉元は大人だからな。チアキがいつもあの男は完璧だってあんないい男はいないと絶賛してるよ。貴俊、お前のライバルはなかなか手ごわいな』

昨日は漣を駅まで送ったあと、いたたまれず、棚橋がきまって現れる店に顔を出した。棚橋は底抜けに明るい男で、気がめいつている時に会うと気分が晴れ晴れするのである。そんな棚橋に苦しい胸のうちを聞いてもらったときに言われた言葉が頭をよぎる。

貴俊、そんなこと気にしてどうする？先輩は流星先輩一筋っていう

くらいだから、倉元さんなんか気にするんじゃない。俺は先輩を傍でささえられる立場にいるんだぞ。

飯田は自分にそう言い聞かせるとそんなもやもやした思いを払拭するように立ち上がった。

「さ、行きましょう。俺はPCを借りてから行きます」

会議室には通常備え付けのPCがあるのだが、ミーティングルームは簡単な打ち合わせ用のため、備え付けられてなかった。飯田は流星が席にいないことを祈りつつ、二人のもとを離れた。

木村と漣は二人で企画室に向かって歩き出した。すぐに木村がはつと何かを思い出したように立ち止まった。

「ああ、真藤くん、デスクに忘れ物したから先に行っててくれよ」

漣はクスクス笑って頷いた。

漣は木村の後姿を見送って1人になると急に表情を曇らせ、重いため息を吐いた。それから背筋を伸ばし、顔を引き締めると、自分を奮い起こすように企画室に向かって歩き出した。漣は企画室につくと部屋の中をおそるおそる覗いた。流星の姿は見えない。ほっとしたように部屋の中に入って企画部の人たちのデスクをやり過ごすと一番奥のミーティングルームの前に立った。扉を開ける前に大きく深呼吸して扉を開けた。

瞬間、漣は息を呑む。そこには会いたくて、触れたくて、抱きしめたくて……恋しい思いを募らせたその人、流星がいた。

いきなり扉が開いて流星は驚いて顔を上げる。そして飛び込んできたのが漣とわかると流星もはっと息を呑んで固まった。一瞬で部

屋の空気が凍りつく。

二人は我を忘れて視線を絡めあった。互いにあふれんばかりの愛おしさと苦しさが濁流のようにこみあげてくる。わずかに残る理性のかけらで今にもあふれ出しそうになる想いを必死で堰き止める。

「あ…、ごめ…ん」

漑はどうしていいのかわからずに、やっと言葉を口にするのだが、流星を捉えた目を逸らすことができない。これ以上、何かしようとすれば、衝動的に流星の胸に飛び込んでしまいそうで身動きがとれない。それでも、なんとか自分を奮いたたせて扉を閉めようとした。扉が閉じる瞬間、流星は咄嗟に隙間から漑の腕を掴んだ。そして漑を部屋の中に引っ張り込むと、すばやくに扉を閉めた。

「漑…」

流星は一方の手を扉を押さえるようにして漑を扉と自分の体で挟み込んだ。その瞬間、エゴイストの香りが漑を包む。漑は流星の懐かしい香りに思わず目を閉じる。流星は漑の腕を強く掴んだまま、至近距離で漑を厚い視線で見つめる。

流星…

あれから半月しかたっていないのに漑には流星に会えない時間が果てしなく遠い時間のような気がしてならなかった。想いが通じていなかった頃でも。流星と会えないなんて考えたこともなかった。いつもニヤついて漑をからかいながらも必ず振り返ると流星が傍にいた。流星の存在を感じられないことなんてなかった。なのに今はこんなにも流星が遠い。漑はそれまでのいろいろな想いが堰を切ったようにこみ上げてきて思わず涙とともにあふれ出した。そんな漑を見て

流星がビクツとする。漣は涙で一杯になった目を開けると縋るように流星を見つめた。

なつかしい匂い、なつかしい体温、なつかしい顔！

間違いなく毎日思い続けたただ1人の人流星！

会いたくて会いたくて、その声を聞きたくて：

寂しくて何度となく流星の名前を呼びつづけた：

その流星が今、目の前にいる：

そう思うともう何も考えられなかった。漣が堪えきれずに流星に触れようと掴まれた手と反対側の手を伸ばそうとすると、その時、流星がはっとして我に帰ったかと思うと、すっと体を離れた。

「ごめん…」

流星は目をそらして、漣に一言謝ると、掴んでいた手に気付いて酷く狼狽しながら名残惜しそうに手を離れた。手を離された瞬間、漣は恐ろしいほどの不安が押し寄せてくる。流星はそんな漣の落胆振りがわかるのか、端正な顔をゆがませてそのままずっと背中を向けた。

「流星…？」

しばらく、流星は応えない。漣はその背中をじっと見つめた。

何か言って！流星！

漣が心でそう叫んだ時、流星は背中を向けたまま口を開いた。

「…ごめん、…なんでもないんだ。…打ち合わせか…？」

漣は一瞬何を言われたか把握出来ずにしばらく言葉を失っていたが、深く深呼吸して自分を抑えるように低い抑揚のない声でやっと思いで返答した。

「…ええ、…ここしか開いていなくて…」

「ああ、そうか…。部屋取りするの忘れてたな…。そうか、じゃ、空けてやるよ」

流星は部屋の奥に戻り、PCの蓋をすばやく閉じた。そしてテーブルに広げていた資料をあわててかき集めると漣の横を通り過ぎようとした。その時、冷たくヒンヤリとした細い手が流星の手を掴んだ。

「待って。流星…。私…私…」

そこへPCと資料を片手に飯田がやってきた。飯田は扉のノブに手をかけようとしてはっとして立ち止まった。

「私…流星がどんな状況でも、私は流星が好き。この先、一緒にいられなくても私には流星…あなただけ」

流星はその言葉にビクツとしてしばらくじっとしていた。そして漣に背を向けたまま低く曇った声で答えた

「漣…。俺のことは忘れてくれないか。お前には貴俊があってるよ。貴俊は優しい男だ。とことんお前をささえてくれるはずだ。こんな勝手で酷いやつなんか忘れちまえ」

そう言い放つと同時に扉を開けた。そこで流星は再び固まった。ド

アの前には飯田が立っていたのだ。

「先輩……」

しばらく飯田の顔を辛辣な顔で見つめていたが、何も言わずに流星は出て行った。

「流星！」

追いかけてようとする滯を今度は飯田が会議室に無理やり押し込んで扉を閉めた。

「先輩、耐えてください。ここは企画室ですよ。周りに人の目があります！」

そういつてテーブルにPCと資料のファイルを置くと飯田が涙目で扉に穴が開きそうなくらいじっと見つめている滯を抱きしめた。

「先輩。仕事中です。耐えてください」

厳しい口調で言いつつも飯田は滯を優しく包み込むように抱きしめた。飯田の暖かい温もりとほのかに香るベルガモットの香りは滯を穏かにやさしくしみこんでくる。

「落ち着きましたか？先輩」

滯は飯田の胸の中で静かに頷いた。飯田は滯の両肩に手をやり滯から体を離して顔を覗きこんだ。

「じゃ、いつもの真藤滯にもどってくださいね。もうすぐ木村マネ

ージャーがきます。涙を拭いてください」

そう言って飯田は優しい表情で滯の涙をぬぐってやった。滯は飯田の顔を見上げて少し微笑むともう一度頷いた。

「はい。ごめんなさい。もう大丈夫。いつもの真藤滯よ。ごめんなさい。取り乱したりして…」

「いいんですよ。僕はいつだって貴方を支えますから、いつでも泣きたいときは付き合いますから、仕事中だけは我慢してくださいね」

「ありがとう」

そういつて二人は打ち合わせの準備を始めるべく席に着いた。しばらくして木村が忘れ物の資料を取りに行ったら電話でつかまってしまつてと頭をかきながら申し訳なさそうにやってきた。そして、滯は今日の倉元とチアキとの打ち合わせの件を報告し、飯田は社内説明スケジュールについて報告した。

「いよいよ本格的にいそがしくなるぞ。しかし、社内説明は殺人並みのスケジュールだな。分刻みだ。大丈夫か？もう少し調整かけたらどうか？」

木村が仕事が順調なことに満足して笑顔で滯に問いかける。

「はい。お気遣いありがとうございます。でも、毎度のことですよ。マネージャー。いつも段取りは飯田君が万全に取り仕切ってくれるので、私は話すだけなんです。」

飯田も笑顔で援護する。

「はい。任せてください。ちょっと説明用の机上用見本の仕上がり
がギリギリなので心配ですが、後でもう一度進捗を確認に行って参
ります」

「販売の方に気に入ってもらえるといいんですけど。できるだけ最
新の情報を下げて説明に行こうと思いますので毎日説明内容が更新
されますからちょっと忙しいんですけど、ここが正念場なのでがん
ばります」

さっきの折れそうなほどに同様した様子はなく、いつもの真藤漣の
顔だった。仕事の時の漣は活き活きして凛々しい。

「そうだな。販売を取り仕切るマネージャーに気に入られないと店
頭のBCも本気になってくれないからな。ビュティークウンセラ一番の落としどころだな。
ああ、CMのVTRだが、間に合わせるようにちょっと強引だが手
を回しておいたよ。なんと少しでも間にあわせてほしいって。そし
たらさっき返事してきたよ」

そう言って木村が茶目っ気たっぷりにウィンクした。

「えっ？間に合うんですか？良かった絵コンテのままじゃ伝わらな
いんでほとほと困ってたんですよ！さすがですね、マネージャー。
ありがとうございます！」

漣は木村の抜かりない根回しに声が上ずる。漣の嬉しそうな様子に
満足した木村はさらに話を続けた。

「それでね、明日、一本サンプルが届くんだ。聞くとところによると

ななえちゃんいい出来だったらしいぞ。真藤くん、いい子を落としたね。明日10時には届けるといつていたからみんなで見よう。モニターの部屋をキープしといってくれないか」

「はい！かしこまりました」

澤が意気揚々と応えると飯田が援護する。

「楽しみですね。ななえちゃんの本気がみられるといいですね」

3人は顔を見合わせて進捗が順調な様子に満足気に頷きあった。

25#

俺は今何をした？

滯に…。

いい加減にしろ！

中途半端なことをして滯を悲しませるな。あの涙はお前の所為だ！
滯…。

流星は自分を責めながらも早足で席にもどると資料とPCを置いてそのまま部屋を出てホールへと向かった。ホールに出ると流星は一番近いエレベーターの前に走り寄り、昇階用のボタンを荒っぽく押す。エレベーターの扉はボタンを押すと同時にすぐに開いた。流星はまだ扉が開ききらないうちに中に飛び込んでせわしく最上階を押す。扉が閉まると流星は耐え切れない思いをもてあましつつ、エレベーターの壁にもたれてうなだれた。

滯…

「くっ…」

涙を堪えるようにぐっと拳に力をこめる。

しばらくしてエレベーターが止まり、ピンという音とともに扉が開いた。流星は力のない歩きでエレベーターホールを抜けると非常階段の重い扉を開いた。そして一瞬立ち止まって階段を見上げると、重い足取りで一つ一つ階段を昇っていった。頂上まで昇りきると、「開放厳禁 関係者以外立ち入り禁止」とかかれた看板を無視してその向こうの扉を押し開けた。

屋上に出たとたん、流星は強いビル風の突風にさらされた。真夏の湿気を含んだ熱風が流星を拭きつける。風が止まると今度は温室のようにじとっと湿った空気が肌にはりついた。空を見上げると今にも雨が降り出しそうなほど、どんよりと重く厚い雲が広がり、周りは暗く灰色の湿気に包まれている。

「今の俺にぴったりだな…」

ふっと諦めたように笑ってつぶやくと、屋上のフェンスの辺りまで歩いた。周りはオフィス街の一等地なため、ビルで囲まれている。けっして見晴らしがいいとはいえない。このビルは一見新しく斬新なビルに見えるが、建てられてから随分年数がたっている。建てられた当時はモダンでこの辺りでは1・2を争うほどの高層ビルだったらしいが、その後立てられた周りのビルはもっと高く、ここは見晴らしがいいというよりはまわりのビル群が迫ってきているかのようだった。流星は暗く立ち込める雲によって光を失った無機質なビル群を眺めた。

あの時、思わず濡の手を掴んでしまったことを思い返す。ほぼ衝動的だった。今まで、どんなときでも自分を抑えることは出来たはずなのに、あの時は気付くと濡を引き寄せて抱こうとしていた。流星は、あの瞬間、どうしても本能的に濡を欲してしまう自分を思い知らされた。

「くそっ！」

流星はフェンスに指を絡めて力をこめると何度も打ち付けるようにフェンスを叩いてその思いをぶつけた。

「濡…」

滯の少しグレーがかった憂いある瞳、やや細くて綺麗に通る透明な声、柔らかな髪、滑らかで少しひんやりした肌、昔からなじんだ滯の匂いすべてが流星を惑わせる。

「…くっくく馬鹿だな…、俺は…。いい加減諦めが悪い」

流星はフェンスにもたれて笑い出した。

もうどうでもいい…

どうせ俺が自分の手で滯を幸せにしてやれるわけじゃない。今だけ…時間がたてば滯だって忘れられるはず…

「くっくくく…はははは…」

「何がそんなにおかしいの？春日君。」

流星はその声に振り返りはっと顔色を変えた。

「江怜奈…」

「こんなところで1人笑いなんて、おかしな人ね。何がそんなに楽しいの？」

江怜奈が流星の傍にきていつものねっとりとした視線で流星を見上げた。流星はこわばった顔で黙ってじっと見返す。江怜奈は流星の目を捉えたまま、ニツコリと笑って流星に腕を絡めてきた。

「そう言えば、考えてくれた？結婚式の話。両親にも話をしないといけないのよ。いいでしょ？」

流星は厳しい視線を向けると深呼吸をしてから口を開いた。

「江怜奈、今、その話はしたくないんだ」

そして江怜奈が絡めた腕を解いて江怜奈から離れて背中を向けると、周りのビル群に視線をやる。

「必ず返事するから、今は1人にしてくれないか」

江怜奈の表情がピクッと動いた。

「さっき、企画室に真藤さんがはいつていくのを見たわ。しばらくしたら、あなたが飛び出してきた。会ったんでしょう？真藤さんと」

「…」

「隠さなくてもいいじゃない。話してあげてよ。私達の結婚式のこと。なんなら招待してもいいわ」

流星がピクッとこめかみを吊り上げる。

「悪趣味だな」

江怜奈はにやりと笑った。

「なぜ？あなたの幼馴染でしょう？呼ばないのも失礼じゃなくて？」

流星はちらっと江怜奈に視線をやるとうっとおしそうな表情をした。

「もういい。今は1人にしてくれ。たのむから…」

江怜奈は瞬間、目を剥いた。そして片側の口角をあげていやみっぽく笑う。

「だめよ。1人になると貴方はあの女のことばかり考えるもの。あきらめなさいよ。あの女には貴方の後輩がべったりくっついてるじゃない。あなたよりお似合いよ」

「江怜奈っ！」

流星が鋭い視線で振り返った。

「それ以上言うな。俺はお前のものだからな、何をしても何を言ってもかまわないが、滯のことはいうな。たのむから滯に構うな！」

流星が声を荒げて言い返した途端、江怜奈の顔色が変わった。そして急にきびすを返すと走り出した。江怜奈はフェンスの扉の門をぬくとフェンスの外へ飛び出した。流星は驚いてその後を追った。

「滯！滯！ってうるさいわね！私を馬鹿にする気？あなたと結婚するのは私よ！あの女じゃないわ！」

「江怜奈！ばかなことはやめろっ！危ないだろっ！」

「来ないで！今あの女は企画室にいるわよね」

そういつて江怜奈がにやっと笑って社内の携帯電話を取り出した。

「私がここから飛び降りる前にあの女に電話したらあの女はどうするかしらね」

すでに江怜奈の目は尋常じゃない。

「やめろっ！江怜奈。わかったから。全部お前の言うとおりにするから、馬鹿な真似はやめろっ！」

ふっと笑ったかと思うと恐ろしい形相で叫んだ。

「もう絶対にあの女に会わないって約束して！」

「わかった。約束するから。だから、こっちへ来い。江怜奈！」

江怜奈が携帯をしまおうと下を向いたその隙に流星が江怜奈にとびついてフェンスの方に倒れた。流星は庇うように江怜奈を抱きかかえながら厳しい顔で目を閉じて大きく息を吐いた。

26#

「じゃ、お先に」

「上条先輩おつかれさまでしたー」

秘書課の後輩たちが一様に笑顔で江怜奈に声をかける。江怜奈はその笑顔に応えることもできずにちらっと一瞥しただけで、そのまま席を立った。後輩達は緊張した面持ちで江怜奈を見送る。

「ねえ、今日は午後から最悪だったわよね」

「そうそう、どこかに出かけて帰ってきた時なんか超ご機嫌ななめで…。最近かなりひどいわよね。なんかあったの？」

江怜奈が外へ出たとたん秘書課の後輩達が声を潜めて話し始める。江怜奈は職場でも、いいにつけ悪いにつけ影響力は強い。居ればまわりがちやほやしてくるが、居なければこんな風にひそひそと悪口をたたかれる。

「さあ。でも、最近企画の春日さんとあやしいらしいから、なんかあったんじゃない？さっきも企画室に向かって行っただし。」

「えー？春日さん？あんな超イケメン！まさかつきあってるの？シヨック！ファンだったのに。」

「でも、本気かどうか。今までもほとんどのイケメン手玉にとって、すぐ捨ててるでしょ？」

「春日さんて、ちょっとクールで何考えてるかわからないところあって逆に遊ばれてたりして。」

「ちょっと、めったなことというんじゃないわよ。聞こえたらやばいって。」

江怜奈はIDカードを読み取らせようとする手が一瞬ビクツととまる。しかし、何事もなかったように聞こえないフリしてカードを読み取らせると足早に秘書室を出た。

どうせ誰もわかりはしない：

江怜奈は心の中でそうつぶやいた。

それでも、さっきの流星のやりきれない悲痛な顔を思い出すと何かどろどろした気持ち悪い塊が胸にへばりついているような不快感にさいなまれた。

なんだっていうの？

心にべったりはりついたヘドロのようなものの存在を打ち払うように、高いヒールの音をコツコツと響かせてすばやく大股で外へ出る。ビルの入り口の自動ドアをくぐると、途端に喧騒的な車の音に巻き込まれ、同時にじととした熱気でよどんだ空気が江怜奈の白い肌にまとわりついてきた。江怜奈は一度はひるんで立ち止まってため息をついた。それでも、今の自分には似合う気がして、気持ちを強引に立て直して足を前に進める。しかし、昼間の熱気を含んだ重く息苦しい空気は江怜奈の体に深く入り込んで、何かどす黒い塵のようなものを沈殿させていくような気さえする。吐きそうなほど気分が悪い。江怜奈はますます、心の中にゆがんだ闇をを積み重ねていった。

どこ行く当てもなく、どこをどう歩いたのか、江怜奈は気付くとバレリアンの付近に来ていた。

なんでここなわけ？

ふと3日前のことが頭をよぎる。

―貴女はあの人を愛してない。

胸がむかむかする。まっすぐ向けられた真っ暗で闇のように深い瞳。江怜奈はあの瞳にさらされるのが酷く怖かった。

なんだっていうのよ。あのバーテン。

あれから、時々あのバーテンの顔がちらつく。そのたびにあの夜の闇のような黒い瞳で心の奥底をじっと見透かされるような気がして何度となく震え上がった。思わずじとっと手のひらにいやな汗をかく。

ばかね、江怜奈。あんな奴気にしなければいいのよ。

そう言い聞かせ、苦笑いしてきびすを返そうとした。しかし、その瞬間、そのまま江怜奈は身動きが取れなくなって立ち止まってしまった。江怜奈の心拍数は急激に早くなる。

「ああ…。俺は帰るつもりはない…。ああ、もういい加減にしてくれない…」

拓海は顔を上げた瞬間、そう言いかけて携帯電話を握ったままその

双眸を見開いて呆然と立ち尽くした。しばらく二人は目を逸らせずにじっと見つめあう。江怜奈にとってはまるでそこだけ切り取られたように異空間となつて、時間がとまった気がした。拓海も目を見開いてじっと江怜奈をその瞳に捉えたままだ。

『もしもし？拓海さん？聞ってるの？』

拓海の右手に握られた携帯電話から声が漏れる。それでも拓海は動かない。江怜奈もだまって見返した。

『拓海さん？聞ってるの？』

拓海は江怜奈を見つめたままその整ったクールフェイスを一瞬崩して微妙に笑みを浮かべた。そしてゆっくり電話に戻る。

「気が変わった。今の話。考えてやってもいい。ただし、条件がある。あとで連絡しなোস。」

そう言つて拓海は電話を切つた。しかし、その漆黒のような瞳はまだ江怜奈を捉えたままだ。江怜奈は逃げ出したい思いにかられるが、なぜか体が動かない。江怜奈はゴクリと唾液を飲み込んだ。口の中は乾ききっているのか、やや粘る唾液は酸味と苦味が入り混じる。心拍数はさらにあがつて脈打つたびに全身に響きわたり、まるで体中から危険を知らせてくるかのようなのだ。

何してるの？江怜奈？こんな男どうでもいいじゃない。早くこの場から去るのよ。

そう言い聞かせるのにやっぱり体は動かない。江怜奈は近づいてくる拓海の真意を量ろうとその美しく整った顔を必死な思いで見つめ

るが、その顔には感情は現れず、いつもカウンターで見せるクールな表情がそこにあるだけだった。

「江怜奈さん…。悲しい顔してる…」

江怜奈は途端にカーツと身体の血が逆流したかのように体中が総毛立つ。

「なんですって？わ、私は別に…」

拓海はそれまでの無表情な顔を微妙に動かし、そのクールな目を細める。

「悲しい顔…。心が泣いてる」

「なっ…！」

一瞬、拓海の顔に同情するような表情が現れたのを捉えて、さらに江怜奈は心拍数があがる。

「し…失礼ね！この間といい、今日といい、なんなのよ！いったい！」

江怜奈は拓海を牽制するような態度で威嚇するが、それでも拓海は表情を変えずにその深く漆黒のような瞳を江怜奈に向けたままゆっくりと近づいてくる。

「自分を偽らないで。江怜奈さん。」

それでも江怜奈の体はいうことをきかない。頭の中を拓海の言葉だ

けがりピートして、体は芯からわなわなと震えてだしてきた。拓海は江怜奈の至近距離に立つとゆっくりと江怜奈の頬に手を伸ばした。江怜奈は一瞬ビクツとする。拓海の手は暖かい。あの闇のように暗い瞳のイメージとは全く意に反してやさしく心を包まれた気がした。江怜奈はふと既視感にみまわれる。

どこかで…。

江怜奈はどこか遠い記憶を探るように目を閉じた。

「泣かないで」

拓海の酷く優しい囁きに江怜奈ははっとして我に返った。目を開けた途端、間近に拓海の漆黒のような瞳を捉えて、江怜奈は一瞬息が止まりそうな気がした。まるですべての血液が一気に溢れだしたように体中が痛い程脈うっている。体は熱い。視線を逸らそうにも拓海の漆黒のような瞳から逃げ出せない。

この感じ、どこかで…。

拓海の瞳は自分の内面まで見透かすようで、江怜奈は心臓をぎゅっと掴まれたように息苦しさを感じていた。それでもそんな瞳にさらされながら江怜奈は何かを思い出そうと眉間にしわを寄せつつ記憶を辿るように目を細める。拓海はそんな江怜奈にかまう様子もなく、頬に触れている手とは反対の手で肩に手を回すとゆっくりと江怜奈を自分の胸に抱き寄せた。江怜奈はそんな拓海の行動にも拒むようなそぶりはみせず、何かにあやつられているかのようにぼうつと一点を見つめて、おとなしくされるがままにしている。拓海は今までのクールで無表情な顔をふっと柔らかく崩すと一転して優しい穏かな表情を見せた。そしてその張り詰めてこわばっている背中に穏か

にそつとさするように触れてやる。すると江怜奈は驚く風もなく、自分から拓海に体を預けた。拓海の腕の中で江怜奈は頭のどこかで必死に記憶を検索しているのだが、大きく肩で息を吸って呼吸を整えようとするものの、その意識は徐々にぼんやりとしていくようだった。江怜奈は目を閉じてもう一度息をゆっくり吸い込んでみる。拓海の匂いが心地よく鼻に触れた。同時に江怜奈はなぜかひどく懐かしい気がして何か遠いもやっとした物の存在を感じた。思い出しそうで思い出せない。

この感覚は何？誰…？

緊張してこわばっていた体もふっと力が抜ける。拓海の体温が酷く心地いい。

「江怜奈さん…」

江怜奈は拓海に名前を呼ばれてはっとして我に帰ると、真っ赤になつて拓海を思いつきり突き飛ばした。

「さわらないで！」

江怜奈は拓海を鋭くきつと睨みつけたが、次の瞬間、ひどく困惑した表情を見せると、あわててその場から逃げるように走り去った。拓海は追いかけることなく、その小さくなる後姿を真顔でじっと見つめていた。

27#

ピリピリピリ… ピリピリピリ…

飯田は両手一杯の荷物を床置いてポケットの携帯を取り出す。

「はい。飯田です。…はい、…はい、ええ…」

飯田はチラッと時計に視線を落とした。

「わかりました。それ以上は商品の特性上無理ですから、必ず時間確保をお願いできますか。…はい、…はい、…では、よろしく願います」

飯田は電話を切ると床に置いた荷物をもう一度持ちあげて、少し小走り気味に濡の背中を追いかける。

今週は月次会議がひしめく会議週間のため、社内説明で二人は分刻みのスケジュールで奔走していた。ここ数日は一番の山場で、お取引先を担当するBIビユーティイー・セミナー・インストラクターや販売を取り仕切るブロック・マネージャーの会議が続く。この会議は一度に50〜100人と人数も多い。こちらの本社で東側、大阪支社で西側と開催地も2箇所にわけている。おとといは二人で早朝から大阪支社まで出張し、説明終了後、夕方の本社での部長会議に間に合わせるため、トンボ帰りしてきたのだ。

「先輩！次のマネージャー会議ですが、15分ずれてるそうです。午後2時15分から25分間です。会議の時間が押してるからと5分巻けということでした。大丈夫ですか」

書類の山を両手に抱えた濡は足を停めずに飯田に振り返る。

「了解。毎度のことだから大丈夫よ、5分ね」

隣に追いついてきた飯田を見上げてニツコリ笑う。飯田はこういうときの滯の表情が好きだ。こんな時の滯は子供が何か楽しいことをみつけたかのように楽しそうな表情をするのである。イレギュラーなことが起こると、その場を切り抜けるための滯の頭の回転は速い。

「ねえ、会場についたら、VTRのセットを先にお願ひできる？ 巻かないといけないなら、説明よりも先にCM見てもらいましょう。ああ、最後のオチはいつもと同じで。あとはまかせて」

にやっと笑って企むような表情を飯田に向ける。

「わかりました。うちの前は西本さんのところで使ってるのですぐに使えますよ」

飯田が即答する。

「了解。でも、午前中も長引いてたわね。デスクで大分調整に終わってたけど、休憩時間タイトだったでしょ？ お昼食べた？」

午前中はバッティングしていたので、営業企画会議に滯が行き、飯田は人事や総務の会議で簡単な商品概要を説明してきたのだ。

「なんとか。さっき抜け出して蕎麦かき込んできましたよ」

「ああ、なんだ、さっきどこいったのかと思ったら社食？」

「いいえ、ちょうど時間が終わってましたから、会社のビルの向か

いの立ち食いです」

飯田が照れくさそうに笑う。

「ごめんなさいね。飯田君。今回昼前後に説明が集中しているからせわしいわよね。この説明が今日は最後だから、あとでゆっくりお茶しながら何か食べましょ。蕎麦ぐらいじゃおやつ程度にしかないでしょ？私がおごるわ」

漣が飯田を気遣ってお茶に誘うと飯田は嬉しそうにすぐにその話に飛びついてきた。

「えっ？ほんとですか？じゃ、スタバにしましょう。シナモンロールつきで。」

茶目っ気いっぱい飯田が舌を出す。

「了解！じゃ、気合入れていきますか」

漣がくすつと笑って飯田を見上げると飯田も目で合図するようにスベシャルなさわやかスマイルで頷いた。

漣と飯田は会議の会場につくところそり会場の後ろから静かにはいった。ファンデーションのチームが、この秋新発売の商品の説明をしている最中だった。飯田は開いた机に荷物を音を立てないように静かに置くと、配布しやすいように仕分けを始めると、漣も飯田の隣で資料を小分けし始めた。段取りが済むと二人とも時間まで座って待機にはいった。途端に場内が暗くなってスクリーンにはファンデーションのCMが流れ、場内が沸く。マネージャー達の反応はまずまずのようだ。

「今回、西本さんのチームは思い切りましたね。ギリギリまで渋られてみたいですけど、西本さんがくいさがつて渋々幹部もOKしたって聞きましたけど、フェイ・チャン、反応いいですね」

「そりゃそうよ。今まで日本で活躍はあまり目立ったものはなかったけど、今、アジアじゃ注目の女優だもの。トレンドにうるさいマネージャー達は知ってるわよ。西本さん、この秋封切る日本人の監督する映画の撮影をしてるって聞いて香港まで交渉に行ったのよ」

「ええ？香港ですか？」

驚いて飯田が声を上げる。

「シッ！」

滯が眉間にしわを寄せて唇の前に指を一本立てた。飯田があわてて手で口を抑えて再び声を殺す。

「あ、すみません。先輩もすごいと思いますけど、西本さんもすごいですね。うちの女性陣は大胆ですごい熱意があって、ほんと感心しますよ」

滯がまんざらでもない顔で笑う。

「ふふふ。そうね。さすがに映画のスポンサー権はとれなかったみたいだけど、先方は日本での露出が増えることに好感触ですぐにOKしてきたらしいわ。さすがよね。ほんと綺麗な人ね。フェイ・チャン。うん、CMいいじゃない？これから日本でも人気でるわよね、飯田君」

「そうですね。でも、俺はななえちゃんの方がいいかな。なんか、かわいいだけじゃなくて、なんか人をひきつける独特のオーラがあるって、間近で見るとドキドキしますから」

「ああ、そうね、飯田君の好みはちょっとかわいい妹みたいな感じが好きだったものね。ななえちゃんはぴったりだわ」

漣がスクリーンを見ながらくすくす笑って冗談ぼく飯田に流し目をする。飯田はすかさず応戦する。

「えっ？あ、そんなことないですよ。綺麗な人好きですよ…」

先輩みたいなのと言ったと同時に漣が立ち上がって飯田に声をかけた。

「あ、終わったわ。さあ、資料と物を配布してくれる？」

「えっ？あ、はい。」

返事とともに漣を見上げて、飯田は今は聞こえてなかったことを知る。漣の横顔は既に戦闘モードにはいつていたのだ。飯田は心の中でがっくりと気を落としたが、笑顔で速やかに立ち上がるとスピーディに資料配布を始めた。会議の主催のスタッフも手伝って、使用見本も配布した。配布されたところから「かわいい！」「ステキ！」「などと急に席が騒がしくなる。マネージャー達は30代の女性が多く、ピュアクリスタルを配布用の袋から取り出して思い思いに試し始めた。漣はスクリーンの傍で、その様子を観察して満足気に頷いた。評判は上々のようだ。全員に行きわたった頃には会場はピュアクリスタルで少女のようにきゃあきゃあ盛り上がっていた。

「皆様、こんにちは。『Beau』担当の真藤です」

いつもなら、ここで資料の説明から入るところだが、やはり漣は出方を変えてきた。画面いっぱいにピュアクリスタルの商品イメージ写真を映している。

「いかかですか？新製品のピュアクリスタル。かわいいですよね。私もいつも以上に気に入っているんです。説明もなんですから、まずはいろいろ試してください。私は中でもクリスタルコフレアイズのピュアレモンがお気に入りなんですよ。肌にのせると色の光とスターダストのような細かなパールが輝いて透明感がすごくでるんです。他の色でも、技術は同じですよ。光に当ててみてください。上品な光なのにつけると目元に華やかさがでて、簡単にイキイキした夢見る少女のような目元にみせることができますよ。ここにはうちの研究チームの世界初の技術が反映されています。今回皆様にお配りしたのは、プレミアム限定販売用のシンシアクリスタルコフレのシリーズです。」

「えーっ！シンシアクリスタル？ステキ！」

会場は一気に盛り上がる。

漣の話を聞いてないかのように商品に夢中になっているようで、結構耳は生きているらしい。思い思いに手の甲にコフレアイズをのばして光にあてては、「ほんと！すごきれい！」「肌が綺麗に見えるわ！」などと黄色い声を上げている。漣は思い通りの反応に満足している様子で満面の笑顔を見せていた。そのうち、チラっと時計に視線を落としたかと思うとすぐに顔を上げて動き出し、いろいろなテーブルをまわって一緒にピュアクリスタルを試しては楽しそうにマネージャー達と会話している。会場はもう、夢見る少女でいっぱいの雰囲気につつまれた。5分ほどすると、漣は名残惜しそうに笑って会話しながら前のスクリーンの傍に戻ってきた。

「皆様がいかがですか？一通りお試しいただけましたか？お気に召していただけたような感じで私もすごく嬉しいです。早速ですが、仕上がったばかりのCMをいち早くご覧いただきたいので、皆様前方のスクリーンをご覧ください。」

澤は会場中央の飯田にアイコンタクトで合図を送る。飯田は頷いてスクリーンを切り替え、PCを操作する。会場の照明が落とされ、盛り上がっていた会場は一気に鎮まりかえる。しかし、CMが流れ出した途端、ざわめきはじめた。

「ねえ、結城ななえじゃない！かわいい！」

CMは結城ななえのアップではじまる。

潤んだ瞳でやや上目遣いでじっと見つめる。バックで流れる曲は女性から絶大な支持を集める人気グループ、アニスシード。

「アニスですって？ステキ！」「私大好きなのよ！アニス！」「アニスの曲すっごくいいわよね！」

このCMのために書き下ろした新曲だが声に特長があるために、さすがにすぐに気がついたようで会場がさらにどよめく。

カメラが退いて秋のパリの街を映し出す。オープンカフェで友人達とテーブルを囲んで談笑する中、1人ななえの視線は何かを捉えている。その視線の先に通りを歩く青年に向けられている。青年は歩きながらなえと視線を絡めている。再びななえがアップになり、少女らしい淡い恋心を表現する見事な表情を見せた。

そのあとコフレアイズがアップになって映像が消えた。しばらく真

っ暗になって、すぐに2本目がはじまる。今度はコフレルージュ版だった。

オフィスで仕事の打ち合わせ中、やはりななえの視線が何かを捉えている。近くを通るビジネスマンが歩きながらななえに視線を合わせる。ななえは打ち合わせ中なので、目の前にいる相手に何かを話をしている。その美しい口元がアップになってキラリと上品に艶めく。そのあとは一本目と同様、ななえのアップで今度は大人の恋心をほのかに漂わせる表情で映像が終わる。

スクリーンから映像が消えた途端に真っ暗になったが会場はざわざわと沸いている。飯田が照明をつけると会場はさらににぎやかくなった。すぐに飯田はスクリーンを映像から、前のPCに切り替えた。澤はすかさず話し始める。

「今回のCMは皆様ご存知のとおり、結城ななえさんです。このピュアクリスタルのイメージにぴったりなのは結城さんしかない、他の候補は一切考えず、直接本人に交渉にいききました。あとで事務所からお叱りをいただきましたが。」

会場がどっと笑う。澤はすっかり会場にいる全員の気持ちを掴んだようだった。

「結城さんがすごくやる気になってくれて、自ら事務所に直談判で契約を決めてくださったんです。ですから、このCMやポスターの撮影ではとても熱心に取り組んでくださり、最高の物が出来たと思います。また、バックに流れていた曲ももう説明はいりませんね。アニスシードです。今回はこのCMのために曲を作っていただき、商品の発売と同時期にシングル曲としてCDを発売する予定です。では、商品の概要とこのピュアクリスタルを盛り上げるプロモーション

ヨン企画の説明に入りますので、お手元の資料をご覧ください。」

漣は、商品の説明はもちろん、プレス発表会でクノチアキが結城ななえをモデルにデモンストレーションでメイクショーをすることや、V誌でプレス発表の特集をタイアップで組むこと、V誌のみの企画でプレミアム限定品としてシンシアクリスタルモデルを予約販売することや、BCのいるショップのみでクノチアキとコラボで『Beau』オリジナルブラセツトを販売すること、V誌とM誌の専属モデルのコレクションでメインスポンサーで契約し、V誌とM誌とクノチアキとコラボでショーを実施する内容を説明した。今までは全く比にならないような企画内容のため、説明の度にどよめきが起こり、会場はだんだんヒートアップして熱気で溢れかえる。その後売り上げ目標や店頭でのプロモーション展開の詳細を説明した。最後にあと3分の時間を残して漣は湧き上がる会場に呼びかける。

「皆様！実はもう1本見ていただきたいVTRがあります。もう一度正面をご覧ください。」

再び会場が暗くなり、周りがざわつく中、スクリーンに映像がCMとは明らかに違う映像でななえが映し出された。

「この商品の販売にたずさわる皆様、はじめまして。今度『Beau』ピュア・クリスタル』のパーソナリティを担当させていただきますことになった結城ななえです。化粧品のパーソナリティは初めてでしたので、このお話をいただいた時には本当に嬉しくて舞い上がりました。そして、このピュアクリスタルと出逢ったときにはすごくステキで一目ぼれしました。」

ななえがピュアクリスタルを手にとって時々視線をやりながら楽し

そんな表情で話す。

「今では皆様より一足先にピュアクリスタルを毎日愛用しています。私はこのパリのカフェで撮影した時に使ったクリスタルコフレのピュアピーチがお気に入りです。かわいくても甘すぎず、ちよつと凛々しさもある仕上がりがとっても好きなんです。私もこのお仕事を一生懸命努めさせていただきます。皆様とともに日本中の女の子にピュアクリスタルをお奨めしていきたいと思いますので、どうかよろしく願います。」

VTRが終わるとすかさず飯田は前のPCに切り替え、照明をつける。

「このVTRは結城さんのご厚意で撮影させていただいたものでノーギャラです。ドラマの撮影の合間にうちの飯田がハンディカメラで撮影しました。結城さんは本気でこのピュアクリスタルに取り組んでくれています。そして、VTRにはありませんでしたが、このピュアクリスタルで、『Beau』をメイク市場でNo.1を目指していると伝えたところものすごくやる気になってくださって、No.1に絶対なりましようねと手を握って熱く語ってくださいました。私達も今回は絶対狙えると思うのです。こちらでもさまざまなキャンペーン企画でバックアップするよう今まで以上に準備に力を注いでいます。しかしながら、一番重要なのは皆様の販売の力です。No.1になれるかどうかは現場の皆様の力にかかっています。皆様の力でどうか、念願の初のNo.1に押し上げてください。どうかよろしく願います。」

滯が真剣な眼差しで訴える。会場は静まりかえり、どこからともなくパラパラと拍手がはじまり、やがて会場全体で割れんばかりの拍手が響き渡る。滯は拍手に突き動かされるように映像が消えたスク

リーンの中央に立った。

「以上で、説明を終了します。皆様『Beautifulピュア・クリスタル』をどうかよろしく願います。」

漣は深々とお辞儀をした。会場はさらに拍手がヒートアップする。漣は名残惜しそうに何度もお辞儀しながら席にもどり、飯田をともなうて会場を後にした。

「いやあ、先輩すごいですよ。時間ぴったり。しかも、製品の説明であんなに盛り上げることができるんですから、ほんと驚きですよ。でも、どこの会場もすごく評判いいですね。予算も目標個数も今までと比べ物にならないぐらい高いのに現場はやる気満々でノリノリだし。企画内容もすごいですけど、やっぱり先輩ですよ。」

飯田が興奮さめやらぬといった感じで漣に話しかける。例は照れくさそうに笑った。

「飯田君、あんまり褒めないで。みんなが協力してくれたから良い企画になったのよ。」

飯田は笑って首をふる。

「先輩ですよ。先輩はなんていうか、こう、人を惹きつけて心を動かす何かがあるんですよ。だから協力者も増えるし、その人たちのやる気まで引き出してしまいう魔法までかけられるんですから。」

漣の表情も清々しく飯田の言葉に嬉しさを隠せない。

「そんな私は魔法使いでもなんでもないわ。そんなに褒めてもシナ

モンロールまでよ。それ以上は自腹でね。」

「えっ？だめっ？ちえっ。ここで、もう一個分ぐらい上乗せできる
と思ったのに。」

滯が立ち止まって飯田に向き直る。指を1本たてて小さい子供に言
い含めるように笑いながら冗談ぽく言った。

「そんなのバレバレよ。さ、飯田貴俊君、スタバで休憩のやり直し
でお茶しましょう。シナモンロール1個つきで。」

「そんなに強調しなくてもいいじゃないですか、先輩。」

飯田が頬を膨らませて冗談ぽく拗ねてみせる。滯はその様子を見て
クスクス笑いながら飯田とともに軽やかな足取りでデスクに向かっ
た。

28#(前書き)

「では、皆様、『Beautifulピュアクリスタル』よろしく願います。」

澤はスクリーンの前で深くお辞儀をした。しばらく静かになってやがて拍手が始まる。もう毎回恒例となった光景だ。今日は関係部署ではなく、残りの社員への社内新製品発表会である。営業系や関係部署の説明を一通り済ませた後、秘書課、会計、法務、その他残りの社員を会社で一番大きなセミナーホールに集めて、この秋～冬にかけての新製品の発表会をするのが毎回最終である。

よし、コレで最後。

澤は頭を上げて照れくさそうに笑顔を見せると、もう一度軽く会釈をして会場を後にした。会場ではまだ余韻で盛り上がっている。

『ステキねー』

『ねえ、ねえ、真藤さんのつけてたピュアレモンもいい色ね』

『ああ、あれ？ステキだったわね。でも、私このベリーが大人なかんじ』

『結城ななえきれいだった！ちよっとくやしいぐらい、どきっとしちゃったわ』

『でも、真藤さんだって、綺麗よね。モデルでもいい位よね』

『そうよね、美人だけど気取るところないし、いつも仕事も一生懸命でなんか、いいのよね。うちの男性人ファン多いもの』

『だって、ファンクラブあるらしいわよ』

『えーっ！くやしいーっ！でも、真藤さんならいつか。なんかいいのよね、女性から見ても』

『りりしくてさわやかよね、真藤さん』

『うちの課もああいう先輩がほしいわ』

そんな声を背中で聞きながら、緊張から解放されたように穏かな微笑を浮かべて滯がデスクに帰ろうと足をすすめると、エレベーターホールで飯田が満面の笑顔で待機していた。

「先輩、お疲れ様でした。俺の方も終了しました。」

滯も飯田を笑顔でねぎらう。

「お疲れさま、飯田君。」

「先輩こそ。ほんとうに怒涛の2週間でしたね。」

「そうね。でも、社内説明はすべて終了したから、あとは社内はメイクの研修会だけよ。それも、先週の打ち合わせでは河東さんの専門家集団がノリノリだったから、心配も要らないわ。一応、私もいけるところは付いて全国回ろうかと思ってるんだけど。あとで、スケジュール調整していい？」

「了解です。そう来ると思って先週はいったスケジュールまだ調整してないんですよ。もどったら、早速。」

ピンというコールとともにエレベーターが開く。エレベーターには数人が乗っていて、二人が乗り込むのをオープンボタンを押して待っている。漣は笑顔で会釈をして、隣の飯田に満足そうに笑顔で頷こうと顔を上げた途端、凍りついた。

「先にお茶しませんか？ 棚橋さんが先輩が好きなゴディバのオレンジ：先輩？」

飯田が隣の漣に視線を落として、漣の異変に気がついた。

「先輩？ どうされ：」

飯田は漣の視線の先に目をやり、はっとする。セミナーホールの入口では、江怜奈が険しい視線で二人の姿を睨みつけていた。

「先輩行きましょう。」

飯田は急に真顔になって漣を庇うように漣の肩に手を回し、先を促そうとした。

「いいの。飯田君。」

漣が飯田が促すのを拒み、立ち止まってじっと江怜奈を真顔で見つめる。

「先輩、気にせずいきましょう。」

それでも、飯田が強引にエレベーターへ促そうとした。漣はその手をやりわりと払って江怜奈へと向き直った。

「先輩？」

飯田が背後から困惑して漣と江怜奈を見つめる。漣は視線を逸らさずに深呼吸して気持ちを引き締めると向き直って一步江怜奈の方にすすんだ。顔色を変えることなく、丁寧にお辞儀をしてもう一度江怜奈と視線を合わせる。そしてゆっくりとした動作で歩き出してエレベーターに乗り込み、中の人に何もなかったように笑顔で挨拶をした。飯田はどうしていいかわからず、一瞬とまどったが、あわてて漣の後について乗り込んだ。江怜奈は二人が消えたあともエレベーターの扉をじっと睨み続けていた。飯田はエレベーターの中でちらちらと漣を見下ろして様子を伺うが、漣の表情からは何も伝わってこなかった。自分たちのフロアに到着して、エレベーターを降りると、漣が飯田に振り返った。

「ねえ、飯田君、打ち合わせはコーヒー飲みながらにしない？」

「いいですよ。俺、買ってきます。ツールでいいですか。」

「ええ、よろしく。あ、ブラウンシュガーよろしく。ちょっと疲れたから。こっちはその間に準備しとくわね。」

「了解。」

飯田の返事を確認すると漣は飯田が取り付くまもなく化粧室の方へと向かっていった。飯田はその後姿を心配そうな表情でしばらく見つめていたが、思いなおしてデスクに一旦帰って、書類を置くともう一度エレベーターホールへと向かった。いつもの漣なら、どんな

時でも明るく、笑顔で話しかけてくるのに、今は無表情で、淡々と
してその感情を見せてない。漣の心情を思うと飯田は気が気ではな
かった。

先輩・・・

飯田はもう一度漣が消えたホールを見つめた。

漣が化粧室に入るとそこには誰もいる気配がなかった。ふと洗面
台の鏡に映った自分の姿に目をとめる。なんて顔をしてるのだろう。
まるで感情のない人形のように。不自然で酷く顔色も悪い。漣は大き
くため息をついた。途端に息苦しくなる。急に胸に重いものがのし
かかったような気がした。脳裏には先ほどの上条江怜奈の目が焼き
ついている。漣はかき消すように頭を振った。

いい加減現実を受け入れなさい、漣。いつまでも逃げてちゃだめ。
事実を受け入れなさい。このまま中途半端な思いをずっと引きずっ
ていくの？漣？

漣は自分に問いかける。かといって流星を諦めきれない。物心つい
たときから片時も離れたことがない存在だ。いなかったことになん
て到底できないともう一度深くため息をつく。

いったい何をどうしたらいいの？なぜこんなことに？

流星の心が見えない。流星の存在がない毎日がこんなにもつらいも
のなんて…。

でも、待って、流星は？流星の思いはどこ？貴方は本当に今のまま

でいいの？
幸せなの？

滯りはっとした。

：そうだ、流星が幸せであってほしい。たとえ、自分とはもう縁がなくても、流星には幸せでいて欲しい。でも、流星のあの目は何？
流星は幸せじゃない？あんな目を見て、諦めきれなの？

流星はいつだって、私をを庇ってくれた。いつも私だけのことを考えていてくれた。ねえ、私が流星にして上げられることって？

ふと、化粧室の扉が開いて、企画の若いスタッフが笑顔で挨拶してきた。滯りはあわてて、笑顔を作ると会釈して入れ替わりにその場を出て行った。

29#

なんなのあの女！

あの余裕はなんだっていうの？

江怜奈はエレベーターに消えた滯の見た行動に沸々と煮えたぎる思いを抑えられなかった。白くほっそりとした手はいつの間にか爪が食い込むほどに強く握られ、その肌は今にも破裂せんばかりにぱんぱんに張りつめ、真っ赤に染まっていた。江怜奈はしばらく滯が消えたエレベーターの閉じられた扉を強く睨み付け、まるで動きを止められた人形のようにその場に立ち尽くした。

バカにしてる！あの女も私を見下している！許さない！

江怜奈は体の奥から突き上げるような衝動にわなわたと震えた。

その日、江怜奈は滯の顔が脳裏にこびりついて離れず、ムカムカして自分を抑えきれない。突き上げてくる感情に翻弄されて仕事どころではなく、残りの仕事を後輩に強引に押しつけると、適当な理由で半休をとって早々に退社した。春日流星は自分の手の中にあるはずなのに、なんなんだろう？なぜ敗者のような苦い思いを噛みしめさせられるのか？江怜奈はそんな思いに駆られて何かに追い立てられるように時折小走りに夢中で歩き続ける。そして交差点の赤信号で立ち止まった節に、はっと我に帰って周りを見回した。気づくと江怜奈は見覚えのある通りに佇んでいた。そしてその向こうには見慣れた店が目に入る。交差点の角から3軒目のビルの一角に浮かぶダークブラウンの重厚に閉じられた扉にはバレリアンの文字が見える。

なんなの？これ？なんでここなの？あんな男なんか会いたくもないのに！

江怜奈の脳裏に瞬間、拓海とのことがフラッシュバックしてくる。拓海のどこか覚えのある懐かしい匂いや体のぬくもりが鮮やかに蘇る。それだけで心臓はばくばく破裂しそうなほど強く江怜奈の胸を打ちつける。体中のすべての血が熱とともに逆流してくるかのよう。江怜奈は全身をぶるっと震わせた。しかし、体の芯からこみ上げてくる熱とはうらはらに手足は血の気がひいて嫌な汗がにじんでいた。江怜奈はこの震えを抑え込もうと自分の体を強く抱きしめてみる。しかし、震えは強引に抑え込めたとしても、この体の奥から湧き上がるような熱は自分の中でわけのわからない塊となって江怜奈を不安にさせた。江怜奈は目を閉じて空を仰ぐ。夏の夕方は日が高くまぶしい。目を閉じていてもまぶしさが瞼を通して伝わってくる。そして皮膚をじりじりとりつける日ざしは夕方になってまだまだうだるような暑さを引っ張り、不快指数をさらに上昇させる。まだ16時を過ぎたところで、憂さ晴らしに夜の街に出るには早すぎる。江怜奈はイラつく気持ちを押さえ込み、重いため息を吐くと、仕方なくきびすを返して歩きだした。

「あら、お帰りなさい。珍しく早いね、江怜奈さん。」

江怜奈は自宅の玄関で怪訝そうに顔をあげる。継母の華枝が目に入った。その微笑みにはどこか冷ややかで陰湿な陰をさす。江怜奈はその顔をちらっとみただけで、すぐに視線をそらすと、無言で鮮やかなイエローのエナメル素材のサンダルを脱ぎ捨てて、返事もせずに華枝の前を通り過ぎようとした。

「江怜奈さん、挨拶ぐらいするものよ。」

華枝がその微笑みを崩さずにその背後から声をかける。江怜奈は一瞬足をとめたが振り返ることなく、不服そうにただ今と一言ぼそつと返してまた歩きだした。

「そうそう、今晚お父様が江怜奈さんにお話があるそうよ」

江怜奈は一瞬ビクツとして立ち止まる。

「話ですって？ 私にはないわ」

そう言って再び足を進めようとするときさらに華枝が続けた。

「大事な話みたいよ。必ず居るようにとお父様からの伝言よ」

「…そう、…珍しい。こういう風の吹き回しかしら？ どうせろくでもない話ね。で、何時までいればいいわけ？」

江怜奈が背を向けたまま剣のある風に問い直す。

「あら、またお出かけ？ 夜の街で楽しむのは結構だけど、上条の名にキズがつくようなことだけはやめてくれるかしら？」

江怜奈がカチンときて振り返る。ちょうどそこへ腹違いの弟、優貴ゆうきが帰宅してくる。

「ただいま」

「あら、優貴さん、お帰りなさい」

優貴は玄関で華枝の姿を認めると、ややあどけなさが残る穏かで優しい顔にふわっと柔らかな微笑を浮かべた。靴を脱ごうと玄関の奥までやって来てはじめて、華枝の向こうの階段の傍に江怜奈の姿を目に留める。

「ねえさん、帰ってたの？今日は早いね。」

ぱっと頬を紅潮させ嬉しそうな表情を見せると、優貴が江怜奈を追いかけてようとやや慌しく靴を脱いだ。優貴が江怜奈に近づこうとするのをさえぎるように華枝が一步踏み出し、優貴に話しかける。

「優貴さん、今日、浅野先生はお断りしたわ。明日に振り替えたから。」

優貴が脱いだ靴を隅に寄せようとかがんでいた頭を持ち上げて不思議そうに華枝を見上げた。優貴はその辺りでも有名な私立中学の3年生で、その上の高校へ進学するには問題のない成績だが、さらに優秀な生徒が集まる進学校を受験しようと、週3回は進学塾に通い、あと半分は家庭教師の専門の会社から浅野という教師が派遣されてきている。

「今晚はお父様が江怜奈さんに大事なお話があるみたいなの」

「ねえさんに大事な話？」

優貴は不可解だという表情で華枝に向き直った。華枝はその表情にっこりと微笑んで頷いた。優貴はちらっと江怜奈に視線をやった。優貴と華枝のやり取りに立ち止まって背を向けていた江怜奈は一瞬振り向いた時、優貴の視線と重なったが、すぐに江怜奈が視線をそ

らしてそそくさと階段をあがっていつてしまった。

江怜奈は昔からこの優貴が苦手だった。優貴は華枝と父、上条功一郎ういちろうとの間に生まれた、上条家待望の長男である。もともと江怜奈は双子の姉茉莉奈のことで功一郎との間に確執があったのだから、優貴が生まれたことで江怜奈は完全に孤立してしまった。優貴は頭がよく、素直で大人にかわいがられる方法を生まれながらにしているように周りの関心を一心に集めた。江怜奈はこの愛らしく誰にでも素直で純粋な優しさをみせる優貴とどうしてもまともに顔をあわせることができないでいた。優貴を見ているとなんだか良心を咎められているような気分させられるのだ。優貴の方とは言えば幼い頃からねえさん、ねえさんと江怜奈に好意的に慕ってくる。そのたびに江怜奈は適当にはぐらかして逃げるのが精一杯だった。

その晩の食事の時間は、華枝が言うとおり、珍しく父も早く帰り、家族全員そろっての夕食となった。江怜奈は無言で誰とも目をあわさないようにもくもくとサラダをほおばっている。功一郎は珍しく機嫌よさそうにビールを飲みながらチラツと江怜奈に視線をやる。

「江怜奈、話と言うのはな、見合いの話だ。今週の週末をあけておきなさい」

江怜奈がフォークで野菜をつつこうとしてピクツと固まった。

「見合いですって？」

江怜奈が訝しげに功一郎に視線をやった。

「ああ、御堂グループの会長のお孫さんだ。幼い頃に御堂家の別荘に何度かお邪魔したことがあるだろう？」

功一郎は表情を変えることなく江怜奈の顔も見ずに返事をする。

「御堂？」

御堂グループとは功一郎の経営する会社に大きな利益をもたらす大口の得意先の企業グループである。江怜奈は功一郎から視線をはずすとかを思い出すような表情を浮かべた。功一郎はまたチラッと江怜奈に視線をやると話を続けた。

「なんだ、忘れたのか。まあいい。その御堂家のご子息がな、お前を指名してきているのだ」

「私を指名？」

疑うような目つきでもう一度功一郎を見る。

「ああ、お前どこかで会ったのか？」

「まさか、会うわけないわ。知らないわよ」

「そうか。まあ、お前は知らなくとも、先方はとにかくお前を指名している。詳しいことは華枝から聞きなさい。相手に失礼のないように準備するように華枝に言っただけである。」

「ちょっとまって、私は嫌よ。いかないわ。断わって頂戴」

功一郎は少し顔をこわばらせて江怜奈と視線を合わせる。

「我俣は許さん。おまえもそろそろ落ち着いてもいい歳だ。いつまでもふらふらと夜中遊びまわってるんじゃない。せっかく先方がお

前を是非にといってくれてるんだぞ。こんなチャンスはめったにない。いい話じゃないか」

「いい話ですって？冗談じゃないわ。お父様の都合でしょ？私は結婚相手ぐらい自分で選ぶわ」

「何を生意気なことを。お前が連れてくる男は信用ならん。私は許さんぞ。どこの馬の骨かわからない奴に上条の血はやれん。お前だって一応上条家の端くれだからな」

「父さん！そんな言い方はないだろ？ねえさんは…」

優貴が見かねて割って入る。

「お前は黙っていなさい。子供が口を挟むものじゃない」

ピシヤリと言い放つと功一郎は険しい視線を優貴に向けた。優貴はその視線にビクツとしておずおず黙り込む。

「有無は言わさん。今週土曜日に御堂家のご子息に会ってもらうかな」

「嫌よ！」

江怜奈が凄い剣幕でフォークを握っていた手でバンツと食卓を思いっきり叩いた。その音に功一郎の顔色が変わった。

「私の言うことが聞けんのか？江怜奈？」

厳しい顔で睨み合いを続ける。功一郎が厳しい顔つきで鋭い視線を

江怜奈に向けている。一瞬、その場の空気が凍りついた。江怜奈は息を飲む。しばらく息が詰まりそうなくらい張り詰めた空気を振るわせたのは江怜奈だった。江怜奈はおもむろに立ち上がると、不服そうに低い声でつぶやくようにわかったわ、と一言言い放つとそのままダイニングルームを逃げるように出て行った。

「ねえさん！」

優貴が追いかけようと立ちあがろうとすると華枝が優貴の腕を掴んだ。

「優貴、ほおって置きなさい。」

「でも…。」

勇気が不服そうに座って、上目遣いで華枝を見た。

「優貴、貴方は将来この家を継ぐ人よ。今は勉強のことだけ考えなさい。大人になればわかるわ」

優貴がぱっと顔を赤くしたかと思うとその優しく穏かな顔を陰しくゆがめた。

優貴は食事の後、早々に勉強するからと部屋に引き上げた。優貴は何か考え込むような面持ちで階段を昇り、自分の部屋へと向かった。部屋の扉の前で立ち止まるとしばらくじっと考えて、決意したように顔を上げて振り向いた。じっと斜め向かいの閉じられた扉を見つ

める。

ねえさん・・・

心の中でつぶやくと自然と江怜奈の部屋の前に立っていた。優貴は少し戸惑いながらも意を決して扉をノックする。

「ねえさん。」

返事がない。優貴は張り詰めていた気持ちを吐き出すように息を吐いた。

「ねえさん、いるんでしょう？返事して？」

返事どころか物音さえしない。

「ねえさん、ごめんなさい。僕、力になってあげられなくて…。大丈夫？」

やはり扉の向こうは静かだった。

「ねえさん、開けるよ？」

優貴がドアに手をかけるとドアには鍵がかかっていて動かない。

「ねえさん、開けて」

優貴がドアをどんと拳でなぐ叩いた。

「優貴、別にたいしたことじゃないわ。私に関わらないほうがいい

わよ。貴方はこの家の跡取りなんだから父さんや母さんのいうことをきいて勉強してなさい」

ドア越しに淡々として感情のない言葉が返ってくる。

「ねえさん、でも…」

優貴が心配そうにつぶやく。

「いいから、優貴。私出かけるの。邪魔しないで」

江怜奈は相変わらず感情のない話し方で優貴を拒む。

「ねえさん！」

優貴が悲痛な声で呼びかけるが、それからは返事も物音もしなかった。江怜奈に拒絶された優貴はじつと恨めしそうに堅く閉じられた扉を見つめて立ち尽くした。しばらくすると、深いため息をついて、重い表情で自分の部屋にもどっていった。

優貴…

江怜奈は苦しげな切ない表情を浮かべてじつと優貴が去る足音を聞いていた。

2号会議室。静かな空間にカタカタとキーボードの音だけが響く。流星はただひたすら画面を凝視し、男にしては優美な細長い指をしなやかに動かして、数字をリズミカルに入力していく。その間、指先以外はほとんど微動だにしない。その顔はどこにも感情がないかのように硬質でまるで温度が感じられない。流星は数字の入力が済むと一気にグラフに変換する。

「ふう…。なんとかなったな。」

流星は疲れた顔色で大きくため息をつく。これで明日の午後のMTで必要な資料はほぼ出来上がった。明日の午前中に概略をまとめたもののみコピーすれば十分間に合う。流星はふと時計に視線を落とす。20時過ぎ。こここの所、仕事が架橋に入って毎日深夜まで残業が続いている。いい加減36協定＜※労働基準法第三十六条による協定。残業時間に限度が定められている。＞に危うい。仕方なく、PCを終了させて片付けた。流星は重い足取りで会議室を出て行く。すると、ケイタイが震えた。画面の表示は仙道将明^{せんどうまさあき}だった。流星は今、大学の時のバレー部で同級生の仙道の借りているマンションに居候している。

「ああ、将明、どうした？」

仙道は大手証券会社に勤めていて毎日のように帰宅は深夜である。当然、今の時間も仕事中的のはずだった。

「流星、今どこだ？珍しく早く終われるからな、仕事都合つくならたまには一杯どうだ？忙しいか？」

仙道は明るくノリのいいキャラで、周りの信頼も厚く誰からも好かれる。大学時代もいつもチームを盛り上げるムードメーカーだった。電話の向こうの能天気なほど明るい声にふと和まされる。流星はうつすらと笑みを浮かべて仙道に応えた。

「お前見えてるのかよ。まったく、するどいな。俺も今日は早仕舞いだ。今から帰ろうと腰を上げたところさ。」

「ああ、俺はお前のこと愛してるからな。なんでもわかるのさ」

「ばか、気持ち悪いぞ、お前。俺はそっちの趣味はない」

流星は冗談交じりに冷たく言い放つ。

「はいはい。そうでした。お前は昔から女にモテたからな。たまには俺にも紹介しろよ」

「ああ、いつかな」

「ちえっ！つれないな。お前、女にかけては昔から冷たいやつだよな」

電話の向こうで仙道が冗談ばく笑っているのが聞こえる。ここの所、気分がめいりっぱなしで気軽に馬鹿を言える仙道が酷くありがたい。流星は仙道のマンションの近くの居酒屋で待ち合わせをすると電話を切って会議室を少し軽い足取りで出て行った。

流星が到着すると既に仙道は来ていて、生ビールのジョッキを半分あけたところだった。

「悪いな、さきやってて」

仙道がジョッキを持ち上げて笑う。流星は仙道の屈託のない明るい笑顔につられて少し微笑んで頷いた。

「お前もビールでいいよな」

「ああ」

流星の返事を待つか待たないかぐらいで店員を捉まえて流星の自分のおかわりのビールを注文する。そのついでに店員に笑いながら話しかけた。店員も笑いながら愛想よく楽しそうに会話している。

仙道はこんな風に誰でも親し気に話しかけ、その明るく社交的なキャラで大概相手の心を掴む。昔から根回しがうまい。流星はクールで頭の切れる論理的で合理的な判断を得意とし、計算能力は抜群の冷静なマネジメントをする部長だった。しかし、仙道は人の気持ちを掴むのにたけている。常に理性的な流星に対して、仙道は対照的で部員の感情的な部分を見事にフォローする副部長として、当時の二人のコンビは絶妙だった。

「久しぶりだな、一緒の部屋にいるのにほとんど会話してないよな」

仙道と流星はクリーミーな泡が盛り上がったビールジョッキをやや手前に持ち上げ、アイコンタクトで乾杯のしぐさをする。

「ああ、お前の会社どうかしてるぞ、いったい何時に帰ってるんだ？ちゃんと寝てるのか？」

流星はそう仙道に返すとゴクゴクとビールを飲み干す。

「寝てるよ。ちゃんと。朝はお前の方が早いだろ？働いてる時間はお前と対して変わらないぞ」

仙道もクスツと噴出すように笑うと残っていたビールを飲み干して、空のジョッキを角に置き、追加したビールに手をかける。

「やっぱり、いいよな、仕事の後のビールは」

幸せそうに仙道が笑う。思わず、流星もふっと目を細めた。

「ああ、そう言えば俺も久々に飲むな。ここの所、会社につめていたからな」

流星はそう応えると大きくため息をついた。仙道はそんな流星の様子にやや顔を曇らせる。

「おまえ、疲れた顔してるな、色男が台無しだぞ、お前こそ寝てるのか」

心配そうに仙道は流星の顔を覗きこんだ。流星は一瞬ちらっと仙道を見たが、すぐに視線を逸らして愛想笑で返答する。

「ああ、大丈夫だ。おまえこそ、俺が居候なんかして迷惑だろ？気いつかわしてるだろ？」

「いや、そんなことないよ。むしろ大歓迎だね。深夜疲れて帰るだろ？寝ていたにしろ、帰ったときに誰かがいる気配があるのはいいいもんだぞ」

仙道が一瞬ふわっとやさしい表情を見せる。

「そう言えば、真藤さんは元気か？」

「ああ…」

流星が一瞬顔色を変える。すぐに平静を装ったが、仙道は人の顔色を読むのに長けている。

「ん？どうした？流星？」

「いや、別に。」

仙道は流星の一瞬の行動で何かがあったことを察知した。

「真藤さんとなんかあったのか？流星？」

流星は視線を逸らして黙っている。その顔は厳しく流星の端正でとのった顔から血の気がうせていた。しばらくの沈黙のあと、仙道が口を開いた。

「わかったよ。話ができるような状態じゃないってことか。悪かった。もう聞かないよ。飲もうぜ」

そういつて仙道がまた、屈託のない顔で笑いかける。

「もう…手が届かないのさ…」

「流星？」

流星がぼそつと吐き捨てるようにつぶやいた。その顔には喪失感と絶望感がにじみ出ている。今までに見たことのない流星の落胆振りにさすがの仙道も息を飲んだ。

「もう、俺には何もない…」

「おまえ…」

「俺のせいなんだ。俺が自分をごまかして人の心をもてあそんで…みんなを傷つけた。これは罰なんだ。自分の弱さのために滞すら守ってやれなかった…」

仙道は静かに独白する流星の青白い正気のうせた顔を真顔で黙って見つめている。

「俺にはいつもあいつかいなかったのに…、あいつかにも俺しかなかったのに…、俺は馬鹿だ。本当のあいつの心を見ていなかった。己の恐れにとらわれて見失ってしまった」

そう言って自分をあざけるように苦しい笑みを浮かべる流星が仙道には泣いているように見えた。

「おまえ、真藤さんのことしか見てなかったもんな。気付いてたぜ？ 近くにいる連中はさ。お前ってばいつもクールでどっか遠いところから俺達を見てたろう？ その冷静さがお前の魅力でもあったし、うちのチームの強みでもあったんだ。実際、お前の冷静な判断力はすごいからな。誰も気付かない先まで見越してそれにあわせてコントロールしてた。俺達はそんなお前に絶大な信頼感を寄せてたんだよ。でも、一方で、いつもは冷静なのに真藤さんのこととなるとお前は人が違ったように感情をおもむろに表わして、執拗なまでに執

着する面を見せる。はじめは誰もが頭をひねってたんだ。でも、ずっと見ていくうちにおまえの人生には真藤さんしかないんだって、ほかに何にも目にはいつてないんだってわかった。おまえ、すつげえ才能があるのになんでもいとも簡単に捨てて真藤さんを選ぶもん。俺達には理解不能だったよ」

仙道の話にはっとして流星が顔を上げた。そこには仙道のまっすぐな視線があった。目を逸らさずにそのまっすぐな瞳は流星に語りかける。

「将明：」

「でもな、ずっとチームで戦っていくうちにそんなお前だから、無欲なお前だから、誰も気付かないことに気付いて、冷静に的確に判断できるんだって、ほら、大学の2年の秋、合宿にいったろ？あの時お前が寝ちまってから、レギュラー陣で話してたことがあるんだよ。お前のことすげえやつだってみんな思ってたけど、近寄りがたいて話になって…。でもな、飯田が1人、お前を擁護するんだよ。後輩で肩身狭いくせにそこだけは譲らずに。ほんとうは酷く純粋で誰よりも繊細で誰よりも優しい人だって。先輩達は勘違いしてる、ってマジに怒って俺達にいい返してたんだぜ？あいつ、お前を本当に慕ってたもんな」

仙道は店の入り口のほうに視線をやると懐かしそうに目を細めた。流星は飯田の名前がでて、一瞬息苦しくなる。

「悪いな、取り留めのない話しちゃったな。」

仙道がそういって一瞬微笑んだが、すぐに真顔になって流星にまっすぐに視線をやった。

「真藤さんはお前のすべてだろう？俺としてはお前にお前らしさを失ってもらいたくない。真藤さんどうなったのかは知らないけど、お前の真藤さんへの思いは真藤さんを手に入れたいだけのものなのか？お前の愛情はそんな薄っぺらいものなのか？」

流星が驚いたように目を見開いて仙道を見た。

「普通のやつなら、他に女さがせよ、いい女なんて世の中たくさんいるだろって言ってやるけどな、おまえには無理だっていうのは今まで見てきて十分すぎるぐらいわかってるよ。真藤さんのためなら、命だって投げ出しそうぐらいの勢いだったからな」

仙道が苦しそうに笑う。

「将明…」

「流星、俺はお前がうらやましかったんだぞ。あんなにひとりの女のことに夢中で他が見えないほどに思いいれられるお前がな。俺なんかさ、男には縁があるけど、女縁はからつきしだからな」

仙道が笑う。流星はそんな仙道をじっと視線で捉らえたまま黙っている。

「流星、お前達の間には特別に何かあると俺は思うよ。だから…、諦めるな…。…うまくいえないけど、諦めて欲しくないって言うのかな。人のことなのにな、俺、どうかしてるよな。さ、飲もうぜ。たまには男同士で、とことん飲もうぜ。家はすぐそこだからな。気にすることもない」

そう言って、仙道はいつもの屈託のない笑顔を見せた。

31# (前書き)

お待たせして申し訳ございません。おそくなりました。

PCの調子が悪く、携帯での執筆、推敲のため、すこし時間がかかり、遅くなってしまいました。携帯での作業はなかなか苦労しますね。笑

今回は流星の話の続きです。どうぞおつきあいください。m (

) m

31#

「ヴィオニエ事業部から上がってきた計画をもとに見積もりを計算しますと、3年でこのブランドは270億に達する見込みで早ければ、5年で採算ベースに乗る可能性は十分かと。」

幹部は無表情のまま、誰も何も発しない。

「もう一度市場状況の資料を出してくれないか」

「はい」

流星も顔色を変えずに淡々と幹部の要望に応える。会長、常務、専務が頭を寄せて真剣な面持ちで資料を時折指をさし、なにやら密談をしている。その様子にまわりがざわついた。それでも流星は顔色を変えない。いつものクールフェイスを貫く。ヴィオニエ事業本部長の方が緊張して青い顔をしていた。

「ふむ。なんとか収めたな。」

会長の鶴の声にその場の空気が溶ける。

「いけそうだな。それでは、来春、ヴィオニエ事業部をヴィオニエ・プロダクツとして発足できるように法務部へ」

「はい。かしこまりました」

ヴィオニエ本部長がほっとした顔で満面の笑顔で会長に頭を下げる。

「では、以上だ」

そういつて幹部一同が退席した。

ヴィオニエ事業部は香麗堂の中でも個性派ブランドである。スキンケアからメイクブランドまで、フィットケミカル＜植物化学＞から生まれた自然志向派高級ブランドで、化粧品のみならず、美容健康食品もファンが多く、最近ではヴィオニエグッズも化粧小物だけでなく、バッグ、食器、その他雑貨等そのブランド力とデザイン性でここ10年で勢いよく売上げを伸ばしてきた。このブランドを来春連結子会社として独立させようと2年前からプロジェクトチームが組まれた。流星は企画に所属しているが、鋭い視点とクールに客観的に分析するその卓越した計算能力を買われ、2年前、このプロジェクトチームにこの若さで異例の抜擢をされたのだった。

幹部の退席をやり過ぐすと残されたヴィオニエプロジェクトチームの面々は立ち上がって、互いをねぎらう。

「春日くん、お疲れさま。よかったよ。最後はどうなるかと思ったよ。でも、さすがに君の読みは凄いな。しかも、資料はわかりやすいし完璧だよ。君に助けられたな、随分」

ヴィオニエ事業本部長がにこやかな笑顔で流星に握手を求める。流星は営業スマイルで応える。

「いえ、皆さんの熱意に応えたまでです。私は事業部の中期計画の内容を数字にただけです」

「いやいや、君の綿密な下調べは本当に頭がさがるよ。あんな数字をどこからもってくるのかと感心しながら聞いてたんだよ」

本部長の言葉に傍に居たマネージャーもスタッフもしきりに首を振る。

「ありがとうございます。本音を言うと、私もほっとしました。本当に皆さんの思いを裏づけできたかどうか、自信なかったのですが、結果オーライです」

「そうか？ そんなふうには見えなかったぞ。自信たっぷりで話してたように感じたけどな」

本部長は上機嫌で流星を持ち上げる。流星は苦笑いして、遠慮がちに首を振った。

「今日はちょっとした打ち上げだな、人数確認して場所を確保しておいてくれないか」

本部長は隣のマネージャーにそう声をかけると流星にも行くだろう？と誘いをかけた。流星は疲れているから、今日は帰りたい思い出一杯だったが、仕方なく笑顔で頷いた。

その晩、会社のすぐそばの居酒屋の個室を貸しきってプロジェクトチーム全員参加で飲んで食べて盛り上がった。流星も少なからず、久しぶりに少し気分が良かった。

2年前、プロジェクトチームに抜擢されたときは、なにも見えない状態の手探りのような状況だったので、今日の日を迎えられたことが、やはりうれしい。流星はいつの間にか学生時代にもどったかのような感覚に酔いしれる。しかし、流星は学生時代に懐かしく思いを馳せた途端、ふと昨日の仙道の話思い出した。チームで協力して何かを成しえる達成感は本当に気持ちいい。流星は、できればあの頃に時を戻すことが出来たらと学生時代に思いを馳せた。そして滯ることも。もっと早く滯の想いに気付いてやれば、今のような

ことにはならなかったはずなのに……。流星がプロジェクトメンバーの話しに頷きながら頭の隅で後悔の念に駆られていたとき、ふと胸ポケットのケイタイが震えた。

「失礼」

そういつてケイタイを取り出しつつ、席を立てて外へ出た。画面には江怜奈の文字が浮かび上がっていた。流星の顔が途端にこわばる。

「ねえ、今どこなの？」

流星は電話にでたもののためらって一瞬言葉を発することができなかった。

「春日くん？ちょっとときこえてるの？」

江怜奈がむっとしたように語尾をあげて尋ねた。

「：あ、ああ、ちょっと周りがうるさくて、聞き取りづらいんだ」

流星は咄嗟に適当な言い訳をする。

「飲んでるの？」

「ああ、ヴィオニエ事業部の人達とな」

流星はややため息交じりに言葉を返した。

「そう……。：今から出られる？」

流星は時計を見る。

「何か用なのか？」

流星が淡々とした口調で問いかけると、電話口から江怜奈のため息が聞こえてくる。

「…春日くん、婚約者が用事がないと電話しちやいけないわけ？」

江怜奈は怒って流星に噛み付いた。いつも以上に江怜奈は気が立っているらしかった。流星は沈黙を保って何も言葉を発しない。

「とにかく、すぐに来て。貴方に会いたいの。バレリアンの向かいの角にスタバがあるでしょ？そこにいるわ」

そう言い放つと江怜奈は流星の返事を待たずに一方的に電話をきった。流星は電話をおろして画面を眺めると、重いため息をもう一度吐いた。

その後、流星が席に戻るとちょうど締めるところだった。景気よく全員で前途を祈って1本締めで盛り上がりとおのおの帰り支度しはじめた。流星は2次会の誘いを適当な理由を言って断わると、江怜奈の元へ向かった。この場所から10分ほど歩いたところだ。流星は重い足取りでスタバの前に来ると、すぐに流星に気付いたらしく江怜奈が店の外に出てきた。

「随分待たせるわね。どうせ、会社のそばで飲んでたんでしょ？なんで、こんなにかかるのよ」

江怜奈はイライラした様子で流星を睨みつける。電話でも感じたが、何かあったのか、感情が高ぶって落ち着かない様子が見て取れた。

「戻ったらちょうどシメだったんだ、だからみんなと一緒に店を出たからな。まさか俺だけ先に帰るわけにはいかないだろう？ 江怜奈、どうしたんだ、こんな時間に？ 何かあったのか？」

江怜奈は続けて文句を言おうとして、はっと口を閉ざす。しばらく黙っていたかと思うと急に流星の腕を取ると強引に引っ張った。

「こんなところで話していただくはないわ、いきましょ！」

そういつて江怜奈はカツカツと歩き出す。しかし、流星を引っ張って歩き出した途端に江怜奈が急に立ち止まった。流星は危うく江怜奈にぶつかりそうになるのをなんとかセーブして立ち止まった。

「江怜…」

訳わからず流星を振り回す江怜奈にむっとして一言言ってやろうと口を開きかけたが、江怜奈の様子がおかしいことに気付いて口を閉ざした。江怜奈は通りの向こうをこわばった顔で凝視し、その場に釘付けになって立ち尽くしていた。その視線の先にはどこかで見かけたことのある男がやはり、江怜奈をじっと真顔で見つめていた。ああ、バレリアンのバーテン…、流星はその男の服装やバーテンには似つかわしくない雰囲気で思い出した。バレリアンはカウンターがメインの店である。カウンターは広々として常に2〜3人はカウンター内でバーテンが配置されているようで、江怜奈はいつもあの男の傍に座っていた。行きつけのようだったので、その男を最前に行っているのかと思いきや目を合わせることもなく、注文以外の会話をしているのを見たことがなかった。しかし、流星にはあの男が気になってしげしげと眺めたことがあるので記憶にあったのだ。その男は端正な彫刻のよう整った顔はいつもクールで表情を変えること

はなく、知性的な物静かな雰囲気をかもし出しているが、その雰囲気はカモフラージュでいかにも野生動物が爪を潜めているような気がしてならなかった。時折、見せる鋭く漆黒のような瞳は強烈な印象的で、闇の中を徘徊する猛獣のような鋭さを感じた。その男は数いるバレリアンのバーテンやウェイターの中でも異彩を放っていたのだ。

流星は二人の間で交わされる視線にただならぬ気配を感じとるが、江怜奈の傍でただ黙って立っていた。掴まれた腕に江怜奈の緊張がピークに達してきているのがわかる。その手はこわばるように痛い程力がこめられていた。江怜奈は感情が高ぶってわなわな震えているのすらわかりすぎるほどに流星に伝わってくる。流星が、江怜奈の腕を掴もうとすると、ふと、視線が自分に向けられた気がして男の方を見た。男が流星に笑いかける。しかし、それは決して好意的なものではなく、何か意味ありげに口元だけ笑って、視線は鋭く挑戦的に威嚇されたようだった。流星は反射的に訝しげにじっと見つめ返す。すると男はもう一度ふっと笑って店の中へと消えた。男が消えた後も江怜奈はその重く閉ざされたドアを見つめてその場に立ち尽くしている。

「江怜奈…?」

江怜奈は急に我に返ったのかビクッと大きく体が動いたかと思うと、さっきまでの強気でイライラしていた様子とは打って変わり、おどおどした様子で振り返った。

「えっつ?…あっ…」

ふいを疲れたかのように咄嗟に言葉が出てこない。

「あの男となにかあるのか?」

江怜奈は流星の言葉にカーッと顔を赤らめたかと思うと、ものすごい形相で怒りをぶちまけた。

「なんだっていうの？あの男は関係ないわ！みんな馬鹿にしてっ！なんなのよ！」

往来で大きな声でわめくように怒り出した江怜奈に周りが驚いて立ち止まって視線を向けてきた。

こういうヒステリーのような症状は流星は最近もう何度も見てきた。この状態だと衝動的に何か起こすことは目に見えている。流星はとにかく江怜奈を抱き寄せると近くに停まってドアを開けて待機していたタクシーに声をかけて乗り込んだ。江怜奈はしばらく流星の腕から逃げ出そうとあがいていたが、そのうちドアに身を寄せ、体がかがめるようにこわばらせると、無言で窓の外睨みつけた。流星はその様子を視界の隅でとらえながら、重い表情でタクシーの進む先の景色に視線を向けていた。

32# (前書き)

ようやく梅雨明けですね。本格的に暑くなりました。みなさん、いかがお過ごしですか。

いつもお読みいただいてありがとうございます。

執筆が遅れて申し訳ございません。長期で連載2本はなかなか大変ですね。(笑) 素直2も昨年10月からスタートしようやく32話となりました。今後も遅れることはままあると思いますが、最後までよろしくお付き合いください。

では、熱い季節体に気をつけてお過ごしください。

篠原悠哩

その週末の土曜日に都内の老舗のホテルの庭園にある、料亭に江
 怜奈と父功一郎、そして華絵が顔を揃えて、その料亭で一番眺めの
 いい部屋で御堂家の到着を待っていた。江怜奈はといえbaumと
 かわらないいでたちで不機嫌そうに無言で座っている。

「もう少し、着飾っていらしたほうがよかったんじゃないかしら？
 こんな場所ですもの、お着物になさるとか」

華絵がやや眉間にしわを寄せて不満げにもらす。

「今時、和服なんてはやらないわ」

江怜奈は華絵の顔も見ずに気に入らなさそうに細い眉を吊り上げた。

「まあ、いい。華絵。そろそろ、時間だ」

そういつて功一郎が時計に目をやった。ふと、ノックの音がする。
 功一郎と華絵の2人は椅子から立ち上がってドアに視線をやった。

「失礼します。御堂様がお着きになりました」

この部屋を専門にお給仕してくれる仲居が丁寧にお辞儀して入室し、
 すぐにドアの横で外にいる客を中へ促す。

「やあ、遅くなってすまないね、早く出たんだが、ちょっと道路が
 混んでいてね」

そう言つて、御堂國臣がにこやかに部屋に現れた。後ろには御堂の妻ともうひとり背の高い青年がいた。功一郎と華絵はすぐに立ち上がって一礼した。江怜奈もそのあとに立ち上がってドアの付近にいる御堂家の人々に顔を上げて、はつとして固まった。江怜奈はその瞬間一番最後に入ってきた青年を凝視して動けなくなった。そこには見慣れた顔の男が立っていた。バレリアンのバーテンのはずの拓海だった。江怜奈は心臓を掴まれたように息苦しさを感じて、体中の体温が奪われていくような気がした。功一郎は恭しく御堂國臣と握手を交わし挨拶をすると、華絵を挨拶させて、さらにその後を振り返り、江怜奈が呆然としていることに気付いて諫めた。

「江怜奈、何をしている、挨拶をしなさい」

江怜奈は功一郎に声をかけられてはつと我に返って、御堂國臣の前にて、優雅に丁寧なお辞儀をした。仕事だと思えば、セクレタリセクションの仕事上、こういうシーンは慣れている。

「江怜奈です。ご無沙汰しております。申し訳ございません。このような場合は慣れておりませんので、緊張してしまつて…」

江怜奈は仕事だと自分に言い聞かせ、上品な笑みを浮かべて流暢に挨拶をこなした。

御堂國臣は50代半ばといったところだが、髪も黒く豊かで、若々しく見える程度にきちんと撫で付けられて知的な印象を持たせる。年の割りには引き締まったスタイルで、着ているスーツもビジネス風というよりもエレガントに着こなして華やかな感じさえる。やはり親子だ。拓海に似ている。もちろん、顔形も似てはいるが、それよりもなにか野生の爪を隠しているように静かに威圧する感じがやはり似ている。國臣はニッコリと満面の笑顔を見せるが、その仮面の下にはやり手で野心家の顔が隠れているのは江怜奈でも容易に

理解できた。

「おお、本当にステキなお嬢さんになりましたね、江怜奈さん。こっちが、拓海だ。久しぶりだろう？」

江怜奈は國臣には笑顔で頷くものの、拓海が目が見れないでいた。しかし、拓海は部屋に入ってきたときから江怜奈をじっと見ている。江怜奈は視線を逸らしてはいるが、拓海が江怜奈をじっと見つめていることは入ってきたときからわかっていた。しかし、出来れば江怜奈は拓海と目を合わせたくはなかった。

「御堂拓海です。ご無沙汰しています」

そう言って、夜には見たこともないような笑顔で功一郎や華絵に挨拶を交わした後、江怜奈に近づいた。

「久しぶりですね。江怜奈さん、今日はいらしてくださって光栄です」

さすがに、名指しされたときには江怜奈も諦めて拓海に視線をあわせた。その拍子に拓海が一瞬何かたくらむような笑顔をみせた。江怜奈の心はそれだけで困惑してさらに心拍数があがった。

一通り挨拶が終わると、席へは食事が運ばれ始めた。少しずつ箸を進めながら、和やかに話が進んでいく。しかし、江怜奈は拓海が何を考えているのか気が気ではなく、普段の気の強さでは考えられないほど、御堂の夫婦には控えめでおしとやかな女性にうつったようだった。

「いやあ、美人なのに、知的で落ち着いていて、謙虚さもある。拓

海が目をつけたのもわかる気がしますよ」

「そうですか？これでいて、頑固で曲がらないところも多いんです」
功一郎が社交辞令のように笑顔で言葉を返した。

「いやいや、しっかりしているのは結構なことですよ」

その横で國臣の妻もニコニコ頷いている。

「私の後を継ぐ話をしたら、条件が江怜奈さんにあわせることだって言うんだ。はじめはびっくりしたよ。しかし、こうして久しぶりにお会いしてみると、本当にステキなお嬢さんだ。拓海がどうしてもと言う気持ちがあるよ」

國臣はややお酒も入って上機嫌なようである。

「なあ、拓海、その後はうまくやれよ。振られたから跡を継がないっていうのはなしだぞ」

「はい。わかっていますよ。でも、まず、振られることはありませんせんから、大丈夫ですよ」

拓海が簡抜いれずに自信たっぷりに江怜奈を見て応えると、江怜奈は一瞬ピクツと眉間を動かした。

「たいした自信だな」

拓海が返す言葉に國臣は満足げな表情を見せて拓海に視線をやった。

「頼もしいですね。さすがは後継者ですね」

ここはつつこみどころだと功一郎はすかさず、口を挟む。

「ああ、この自信家は伊達じゃないんだ。小さい頃から拓海には人の上に立つ資質がある。ずっと後継にと思っていたのだが、なかなか本人がその気になってくれなくてな、困っていたんだが、ようやくその気になってくれたようで、よかったよ。私もこれで一安心だ」

功一郎は國臣の話に頷いてから、拓海に声をかけた。

「いつからお仕事を？」

「はい、今やっていることがあるので、そうですね、秋には父の会社の仕事に着きたいと考えています。上条さん、まだ、未熟者ですが、これからよろしくお願いします」

拓海は知的で利発なビジネスマンのように饒舌に挨拶して頭を下げる。

「いえ、こちらこそ、うちの優貴も君のようにしっかりした青年に育てたいものだ。会長が羨ましいですよ」

功一郎はすかさず、國臣に満面の笑顔で視線をやった。

「ああ、そういえば、優貴くんはまだ中学生だったな。成績も優秀だし、利発な子だと聞いている。」

「ありがとうございます。でも、まだ子供ですから。これからですよ。そう言えば、真海くんは…」

会長の顔色が一瞬曇った。その瞬間、功一郎は成り行きでつい真海の話振ってしまったことを後悔した。

「ああ、真海か。あいつは頭はいいが気性が優しすぎるんだ。後継には向かない」

國臣が不満げな顔ではっきり言い放つとその瞬間、拓海の顔色が変わった。

「兄は人への気遣いがすばらしい人です。私には及ばないほどの人格者です」

國臣がちらつと拓海に視線をやるとややため息をついた。

「真海は自らお前の秘書を買って出ただろう？ あれは人の上には立てん男だ」

「父さん、いえ、会長。兄は私にはなくてはならない人です。私が兄に秘書で残ってくれるように頼んだのです。兄は頭がいいし、きめ細かい配慮ができる。私には必要な人です」

拓海がまっすぐに鋭い視線を國臣に向けた。しばらく、緊張した沈黙が続く。先にその沈黙を破って切り出したのは國臣だった。

「ふん、まあ、いい。仲良くやってくれて事業がうまくいけばこんないいことはないからな。真海のことはお前に任せるよ」

「はい。ありがとうございます、会長」

拓海はそういつて頭を下げると夜に見せる何かを秘めた鋭い瞳を上目遣いで國臣に向けた。ほかの誰もが気付かなかったが、拓海に気を取られていた江怜奈はその様子を黙ってじっと眺めていた。

33#

そのあと互いの経歴やさしきわりのない上條と御堂の仕事がらみの話をして食事は和やかに進んだ。ただし、江怜奈だけは聞かれたことを応えるのがやっとで、食事も満足に喉を通らないようだった。最後にデザートまですべてのメニューが出されてしばらくすると、國臣の胸で携帯が震えた。

「失礼」

そう言って着信の相手を確認して電話に出た。

「うん。そうだな。わかった。すぐに行く」

話の雰囲気を外で待たせている秘書からのようだった。國臣は電話を切ると、功一郎に向かってこの後、得意先と約束があることを告げた。

「はい。今日はありがとうございました。わざわざお時間を割いていただきました」

國臣は恭しく頭を下げる功一郎の態度に満足したのか、ニッコリ笑って江怜奈に声をかけた。

「では私達は退散しますから、この後、拓海とゆっくりしてください」

そう言って國臣は立ち上がって挨拶するとその場を立ち去った。國臣とその妻を全員で見送ると、功一郎と華絵も私達もそろそろと拓

海に丁重に頭を下げると、後に続いて退出していった。その部屋には拓海と江怜奈の二人きりになった。途端に江怜奈はそわそわして落ち着きのなさをあらわにしはじめる。その場をどうしていいかわからず、江怜奈は部屋の奥の庭が見える大きな窓ガラスの傍に逃げるように移動する。拓海はその様子にクスッと笑うと江怜奈に後ろから近づいた。

「今日は会えて嬉しいよ。江怜奈さん」

そう言って後ろから肩に手を回す。江怜奈は巧みに触れられた瞬間、ビクッと体を跳ねさせたが、そのまま固まったように動かなくなつた。

「…どうということなの？」

拓海はクスクス笑う。

「貴女は全く覚えてないんだね」

江怜奈は困惑していた。確かにどこかにおぼえがあるようだが、思い出せないでいた。

「小さい時、夏に何度か伊豆高原の別荘に行った覚えはない？ 貴女と貴女のお姉さんと真海兄さんと毎日一緒に遊んだはずだよ？」

江怜奈はそう言われて記憶をたどる。しかし、覚えがあるようなないような感じで訝しげな顔をした。窓ガラスに困惑した表情が写る。

「ひどいな、忘れてしまったの？ 俺はずっとあの時から貴女を思っていたのに」

そう言って拓海は肩に置いた手に力をこめて後ろから江怜奈を抱きしめる。江怜奈は背中から拓海の体温が伝わってくると、またふつと既視感に見舞われた。確かにこの匂い、この感じは覚えがある。懐かしく江怜奈を包む。拓海はじつとしている江怜奈の耳の傍に唇で触れた。熱い吐息と柔らかな唇。江怜奈は電流が走るかのように体を震わせた。

「ふふ。いろんな男を連れてるからもつと慣れてると思ったたら、意外と敏感で初々しいね」

「なんっ…」

江怜奈は途端にかつと体に熱いものが走る。体がカタカタと震えて思わず顔を上げた。目の前の窓ガラスには拓海がじつと江怜奈を捉えているのがうつっていた。視線が合った途端、その目に江怜奈は囚われてしまった。また動けなくなってしまった。拓海の瞳は一度目をあわせるとその黒い深い闇のような瞳に吸い込まれて我を忘れそうになる。

「いつまでも心を隠さないで。本当の貴女は素直で寂しがりで…、そして誰よりも愛に飢えている」

江怜奈は一瞬心臓を一突きにされたかと思った。逃げようと咄嗟に拓海の腕を振りほどこうとするが、拓海の腕は容易に振りほどけない。

「逃げないで。貴女自身を見つめるんだ。心の奥底に置いてけぼりにされて、泣いている本当の貴女に気付いて」

江怜奈は急に息苦しくなって心拍数があがってくる。どくどくと心臓の鼓動は激しく打ちつけ、いつの間にかびっしり汗をかいている。

「はな…して…お願い…」

それでも拓海は抱きしめる力を緩めない。ガラス越しにじっと漆黒の深い瞳がまっすぐに江怜奈を見ている。

「江怜奈さん、本心を隠さないで。俺なら貴女を守ってあげられる」

江怜奈はさらに呼吸が荒くなり、いつのまにか汗なのか涙なのかわからないものが頬を伝っている。

「やめ…はなし…て…。はあっ、はあっ、…お願いっ！」

それでも、拓海は離してはくれなかった。

「君はその心に何を隠している？」

「やめ…っ！」

江怜奈は耳を塞いでその場に崩れ落ちそうになる。拓海は力をこめて江怜奈を支えた。

「お願い…やめ…て…、ヒック、ヒック…」

江怜奈はしゃくりあげて子供のように泣き崩れている。拓海は江怜奈を抱き抱えて傍にあったソファに座らせた。その時、ドアをノックする音が鳴り響く。扉が開くと、部屋係の仲居がお飲み物を持ちいたしましたとすっと入ってきた。黙々とテーブルにもってきた飲

み物のグラスを丁寧に配り分けると、置いてあった空いた器を片付けた。そして立ちさろうと顔を上げた拍子に江怜奈がソファに突っ伏して息が荒くぜいぜいしていることに気がついて声をかけた。

「どうかなさいましたか？お客様？ご気分でも？」

拓海はため息をついて仲居に応えた。

「ああ、ちょっと気分が悪くてね、横にさせたところだ。車を呼んでくれるかな？」

「は、はい。ただ今すぐに」

仲居はあわてて部屋を出て行った。拓海はもう一度ため息をつく、胸ポケットから携帯を出して電話をした。

「ああ、拓海だけど。休み中悪いな、今から一人見て欲しいんだ、ああ、そうだ」

拓海が電話を切ったあと、さっきの仲居がやってきて、タクシーを一番近い裏手につけたことを告げたので、拓海は礼を言って江怜奈を抱き上げると裏口へ向かった。

34# (前書き)

随分、更新が遅れてしまいました。大変申し訳ございませんでした。しばらくは遅れることもございますが、がんばって更新しますので、今後ともよろしく願います。

34#

「おはようございます。今日はよろしくお願いします、チアキ先生」
漣がチアキの姿を見つけて走り寄ってきた。

「おはよう、漣ちゃん。ああ、午後、倉元も取材にくるらしいわよ」
チアキはいつものように明るくさっぱりした感じで漣に応える。

「そうなんですね。リハでもいらっしゃるんですね。さすが、倉元さん」

「あらかじめ情報収集していいところに絞って撮影したいからよ。だって長いでしょ。このコレクション。4時間もあるのよ。」

「そうですよね。ほんとそんなすごいショーに参加させていただけで嬉しいです。これもチアキ先生と倉元さんのおかげですよ。感謝します」

「何いつてるのよ。漣ちゃんの熱心な仕事をみたら誰でも一緒にやってみたいと思うわよ。あら、森ちゃん、おはよう！」

ロングな巻き毛をゆらして満面の笑顔で森川クリスがお辞儀しながら姿を見せた。

「ああ！チアキ先生！今日はよろしくお願いしま〜す。」

森川クリスは今ノリにノってるトップモデルだ。最近ではCMやド

ラマの主演など、露出が多い。滯はいつもモニターや雑誌で見
たことがないので間近で森川クリスを見るのははじめてだった。森
川クリスは滯よりまた身長が高く、手足は華奢で長い。母方がロシ
ア系アメリカ人らしく、日本人離れした色の白さと金色にも思える
明るいブラウンの瞳は周りの雰囲気からぬきんでて浮き立つ。誰も
がはっと振り向きたくなる存在だった。

「ねえ、紹介するわ。こちらが香麗堂の真藤滯さんよ。」

「真藤です。よろしくお願いします」

滯はニツコリ笑って丁寧にお辞儀をした。

「あ！噂の滯さんですね。よろしくお願いします。」

クリスは大きな目をくりくりさせながら人懐っこい顔で笑顔を向け
てくる。

「えっ？噂？」

「だってー、チアキ先生も倉元さんも仕事の打ち合わせの時、いつ
も滯さん滯さんってべた褒めなんだもん。気になるじゃないですか
ー。ほんとステキな人ですね。綺麗だし。悔しいなあ。」

すねた子供のようにクリスはほおをふくらませて口を尖らせる。チ
アキが困った子供に言い聞かせるみたいにクリスを注意した。

「ちょっと森ちゃん！失礼よ」

「えーだって、普通にOLなのに、すごく綺麗だし、チアキ先生

や倉元さんにみとめられるってなかなか難しいのに、べた褒めなんですよ。悔しいにきまってるじゃないですか。みんな滯さんに関心ありありで来ますよ、今日。」

「えっ？私に？」

「何ばかなこといつてんのよ、森ちゃん、貴方は私が担当でしょ？早く準備なさい。時間押してるんだから。」

「はい。」

クリスはちょっとしたいたずらをした後、叱られた子供のように笑っておどけて舌を出すといそいそと控え室に入っていた。

それから続々と雑誌でよく見かけるモデル達がやって来た。もちろん全員をチアキが当日メイクするわけではない。チアキはメイクをプロデュースして、自ら担当するのはそのうちトップモデルの5人のみで、あとはチアキのスタジオのスタッフと香麗堂が抱えるメイクアップアーティスト達で手分けをしてのぞむ。先週の打ち合わせでメイク担当者を揃えて全員でチアキからメイクのイメージとメイク方法の像あわせを事前にすませている。今日は衣装も一部を除いて実際に着用する服を揃えている。V誌とM誌の専属モデルはTV出演やドラマ、その他さまざまな仕事を持っており、皆、多忙でそうそう何度も集められない。今日も全員ではないが、約8割方集めることができた。今日はりはといいつも本番さながらの雰囲気がある。

チアキは次々と手馴れた手つきでメイクしてはイメージチェックをして、修正が必要な箇所を書きとめ、手早く修正を施していく。あらかじめイメージしても個々のモデルの顔の特長や肌特性が違いため、計画はおおよそにしか立てられない。実際にメイクした時に完成する。チアキは自分がメイクをこなすだけでなく、ヘア担当

のスタッフに指示しつつ、スタジオのスタッフや香麗堂のスタッフのメイクの仕上がりをチェックしてアドバイスを含めて修正箇所を告げて像あわせを次々こなしていく。それでも、生身の人間であるいくらプロでコンディションを整えてくるとはいえ、当日何があるかはわからない。当日処置しなければならないこともでてくる。そこはプロの腕のみせどころである。それでも、さすがに大きなショーを何度も経験しているだけあって、チアキは戸惑うことなくスムーズ且つコンスタントに仕事をこなしていく。リハとはいえ、チアキもそのほかのスタッフも嵐のようにめまぐるしく動き回っている。滯もあちこち写真を撮りながら挨拶してまわっているとあつと言う間にお昼の休憩の時間がやってきた。お昼はチアキの控え室に滯の分もお弁当が準備されていた。

「はあゝ。疲れた。」

そういつてチアキは座り込むとお弁当をすごい勢いで食べ始める。そして早々に食べてしまったかと思うと、空になったお弁当箱をよけるといきなり顔を伏せて寝始めた。チアキのその様子に滯は驚いた。

「先生？だいじょう…」

「いいんだ。滯さん。チアキはいつもだから。短い時間でも寝るとすっきりして集中力があがるらしい。10分でもあればチアキは眠るよ。驚いただろう？チアキは一旦現場で仕事しはじめると半端じやない集中力で爆発的に仕事をこなしていくんだ。それが、クノチアキの原動力さ。」

滯が後ろを振り向くと、そこにはなれた顔がにこやかに笑って立っていた。

「倉元さん、いらしてたんですか？食事はすみしましたか？」

「いや、さっき打ち合わせで早いランチでいただいてきたよ。それより、様子はどうだい？」

「ええ。すごいですね。さすがですよ、チアキ先生。当たり前ですが、うちの商品を誰よりもよく知ってますね。先生が手にすると使い慣れた物のようにすばやく綺麗なんです。マジック見てるみたいですよ。さっき少し写真を撮らせていただいたんです。倉元さん、ご覧になりますか？」

滯がいそいそと傍にあったデジカメを取り出し、倉元に手渡した。

「ああ、是非」

倉元は慣れた手つきでカメラを操作して次々と画像を確認していく。

「へえ、滯ちゃん写真の腕前もなかなかだね。いい構図でとってるよ。」

滯はその言葉に照れくさそうに笑った。

「ええ？そんな、写真はド素人ですから写真の技術的なコメントは勘弁してください。」

倉元はくすくす笑う。

「いや、なかなかセンスあるよ。しかもいいところを撮ってる。」

「もう！倉元さん。」

倉元に褒められて顔を赤らめるが、専門家にいい視点だとほめられてるのである。漣はまんざらでもなかった。

「でも、チアキはやっぱいい顔してるな。漣さんもそうだけど、チアキも仕事の時の顔はすごく綺麗なんだ」

倉元は満足そうに画像に視線をやりながら嬉しそうに話す。その様子に漣も薬と笑ってうなずいた。

「そうですね。私も写真とりながらそう思いました。ステキな方です。ね。懂れますよ。」

礼の言葉に倉元が顔を上げて漣を見てにこやかに頷いた。

「そうだな。俺もチアキには懂れるな。」

漣は倉元の思いもよらない発言に一瞬ドキッとさせられた。

「えっ？倉元さんが？」

漣が驚いて思わず倉元をまじまじと見つめてしまった。倉元は少し照れくさそうに笑ってもう一度頷くと再びカメラの画像に視線を落とした。

「ああ、チアキはいつも希望の星なんだ。いつも一歩先で手招きしてくれてる。くじけそうなときもチアキの明るさや歯に衣をきせない辛口トークがいつも救いになるんだ」

倉元が懐かしそうに目を細める。漚はそんな倉元の意外な一面をほほえましく見つめた。

「あ、でも、わかります。私も何度も救われてますから。チアキ先生と話しをしてると元気できますよね。すごいですよね、チアキ先生って。みんなに頼りにされて」

「ああ、でも、竹を割ったみたいな性格に見えてるけどああ見えて結構繊細なんだよ。チアキは。さみしがりだし、失敗して泣いてる時だってあるんだ」

「へえ。倉元さん、チアキ先生のことなんでもしってるんですね」

「えっ？」

倉元は漚の指摘にドキツとする。

「ああ、付き合い古いからね。」

慌てて言い訳して答えながらも、漚の言葉への自分の心の反応がどこか引っかかった。

「ちょっと、何二人で人の話してるのよ。寝てる傍で欠席裁判はするもんじゃないわ」

いつのまにかチアキが目を覚ましていた。伸びをしながら片手を口にあてて欠伸をしている。

「裁判なんかしてないよ。チアキはすごい人だって話してたんだ」

倉元があきれたようにチアキに声をかけた。

「本当ですよ。チアキ先生」

滯もくすくす笑いながら声を揃える。チアキは冗談ぽく二人を睨むともう一度大きく伸びをして突然すくっと立ち上がった。

「さて、充電完了だわ。戦闘開始。倉元、終わりまでいるの？」

急にいつものチアキの顔に戻る。

「ああ、いるよ」

倉元がすぐに応える。

「そう…」

チアキが企むようににんまり笑った。

「じゃ、帰りに一杯付き合ってね。あ、滯ちゃんも時間あったらいかない？」

「え？ いいんですか？ 是非！」

滯が嬉しそうに目を輝かせる。

「ということだから、倉元あとよろしく」

「はいはい。チアキ姫。店を見繕っておくよ」

倉元は優しい笑顔をチアキに向けると滯にも視線を飛ばして頷いた。

「よし！やる気が沸いてきた。じゃ、ひとがんばりするわ」

そう言って勇んでチアキは控え室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8767c/>

素直になれなくて 2

2010年10月9日01時50分発行